
明日に咲く花

瑞原唯子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日に咲く花

【Zコード】

N5156Q

【作者名】

瑞原唯子

【あらすじ】

コールベルは魔導科学技術研究所で実習生として働き始めたが、先輩のジョシュの態度はあからさまに刺々しく冷たい。その理由がわからず悩んでいたところへ、同じフロアのレイモンドが馴れ馴れしく声をかけてきて？？。

「遠くの光に踵を上げて」後のコールベルの話です。

http://celest.serieo.jp/celest/novel_kakato.html

作者本人による本家サイトからの転載です。

「ユールベル、データの集計は進んでる?」

「はい、まもなく終わります」

「じゃあ、終わったらジョシュに送つてね」

「はい……」

「よろしくーー」

ユールベルは実習生として魔導科学技術研究所に来ていた。あと半年ほどでアカデミーを卒業し、その後、ここで勤務することになつているのだ。

社会に出てやつていける自信など、彼女にはなかつた。

だが、そうしなければならないとサイファに諭された。それが社会のシステムなのだと。ユールベルも18歳になり、成人となつた。いつまでも子供のままでいはいけないのだ。

両親から受けている金銭的援助も、アカデミー卒業後に打ち切ることに決定された。つまり、自分が働かなければ、生きていいくこともできないのである。

サイファは困つたときは手を差し伸べてくれる。だが、決して甘やかしてはくれない。

そのことについて不満があるわけではない。自分のためであることはわかっている。ただ、漠然とした不安が自分を苦しめていた。しかしこまだ二日目だ。こんなところで挫折するわけにはいかない

？？。

「集計……終わりました」

「ああはいどうも」

ジョシュはモニタから目を離すことなく、投げやりに答える。

ユールベルは彼が苦手だった。

自分も愛想はない。だから、そのことについてはとやかく語り合つたりはない。だが、彼の場合は、単に愛想がないだけではなく、棘というか、あからさまな敵意のようなものを感じるのだ。それは自分にだけ向けられているように思つ。最初に会つたときからそうだったので、原因すらもわからない。

「いつまでもそんなところに突つ立つてゐるなよ」

嫌悪感を含んだ声でそう言われ、ゴールベルはハツとして急いで席に戻つた。うつむいて小さく溜息をつく。

「ジョシュは人間嫌いなんだ。気にすることはないよ」

突然、耳元で囁かれ、全身がぞわりと粟立つ。

同じフロアで仕事をしているレイモンドだ。

ジョシュよりも幾分年上の三十歳くらいだろうか。彼は何かとゴールベルを気に掛けてくれる。優しいのかもしない。だが、そのゴミゴミケーションの取り方が、ゴールベルには馴染めなかつた。距離が近すぎるのは。くつつかんばかりに顔を近づけてきたり、腕や肩に触れたり、親しくもないのに無遠慮に私的な空間に踏み込んでくることに不快感を覚えるのである。

そんなゴールベルの心情をわかつてゐるのかいののか、レイモンドはさらに肩に手をのせて続ける。

「今度ゆつくり相談にのらう」

「…………りません」

「遠慮することはない。そうだ、今夜一緒に食事でもしながら話を聞くとしよう。いい店を知つていてるから予約をしておくよ。仕事が終わるころに迎えに行くから」

ゴールベルの拒絶などお構いなしに、レイモンドは勝手に話を進めるが、白い歯を見せて片手を上げ、自席へと戻つていった。

「…………」

ゴールベルは口をきゅつと結んでうつむいた。断りたいのに上手く断れない。自分の言い方が悪かったのだろうか。どう言えばわかつてもうえるのだろうか？？そんなことを考えていると、不意に頭

上から声が降り注ぐ。

「次の仕事」

ジョシュはぶつかり、数枚の書類をコールベルの机に投げ置いた。

いつもであればそれだけですぐに立ち去るのだが、今回はいまだそこにとどまつたままである。コールベルは不思議に思つて顔を上げた。

「あいつはやめておけ」

ジョシュは不機嫌な顔のまま、ぼそりとそんなことを言つ。それが何を指してのことか、コールベルにはすぐにわかつた。しかし素直に聞く気にはなれなかつた。今までほとんど拒絶に近い態度をとつておきながら、突然、それも仕事以外のことでの干渉したこと、何か怒りのよつたものが沸々と湧き上がつってきた。

「あなたには関係ない」

うつむいて眉根を寄せながら反発する。

ジョシュは何も言ひ返さず、表情も変えず、静かに自席へと戻つていつた。

自業自得？？。

コールベルは心の中で溜息をついた。

行きたくはなかつたが上手く断ることができず、またジョシュに対する意地もあり、仕事が終わつたあと、レイモンドに誘われるまま食事に出かけることになつた。

彼が予約していたのは、研究所からほど近いところにある、優雅な雰囲気のレストランだつた。出される料理も手が込んでいて上品なものばかりだつたが、コールベルはほとんど上の空で、きちんと味わうことができなかつた。こういう店は初めてといふこともあり、どうにも馴染むことができず、居心地の悪さを感じていたのだ。

しかし、理由はそれだけではない。

レイモンドは相談にのると言つて食事に誘つてきた。だが、いざ

来てみると、そういう話題はまったくなく、ひたすら自分の話ばかりしていた。その内容は、自己顯示欲を満たすためだけのもの？？平たく言えば自慢話である。ときどきコールベルに話を振ってきたが、それも仕事とはまったく関係のない、ラグランジエ家に関する話題のみである。別に相談したかつたわけではないが、彼の意図がわからないことに少し気味悪さを感じていた。

一時間ほどして外に出ると、あたりはすっかり闇に包まれていた。遠くの空に小さな星がいくつか瞬いているのが見える。

「遅くなってしまったな。家まで送るよ」

「ひとりで帰ります」

「男に恥をかかさないでくれ」

レイモンドは白い歯を見せて言つ。彼の言つていることは理解できなかつたが、面倒なのでもう何も言い返さなかつた。相手の言うことも聞かず、一方的に事を進める彼には、何を言つても無駄だと思つたのだ。

「コールベルが歩き始めると、レイモンドもその隣に並んで歩調を合わせる。

「今日は楽しかつたな」

「…………」

コールベルは沈黙というささやかな抵抗を試みた。

それでも彼は気にする様子もなく、細い肩に手をまわして力を込める。意にそわづ、コールベルは彼に寄りかかることになつた。離れようとしたが、彼の腕がそれを許さない。

「僕たちは相性がいいよ」

「そんなこと……ないと思います……」

無視を続けようと思ったが、堪えきれずについ反論してしまつ。しかし、それすらも彼は軽く受け流した。

「コールベル、僕は決心したよ」

そう言つと、コールベルの両肩を掴んで自分と向かい合わせる。

「結婚しよう?」

「……えつ?...」

「コールベルはさすがに驚き、素つ頓狂な声を上げた。

「君と出会った瞬間に運命を感じた。そして君との素晴らしい夜を過ごして確信した。僕の伴侶となる人は君しかいない。愛しているんだ。もう片時も離れたくない」

どこかで聞いたようなセリフを並べ立てて迫り来る彼に、コールベルは困惑しながら後ずさつた。しかし、一歩下がつただけで、足が固いものに阻まれる。壙だつた。その存在を認識すると同時に、彼女の体はそこに押し付けられた。彼の手は両肩を掴んだまま離さない。

「コールベル...」

「い、嫌つ!」

近づいてくる顔を両手で押しのけ、蹴躡きながら必死に逃れる。そして、何歩か離れたところで振り返ると、潤んだ右目でキッと睨みつけた。

「……お断り……します……!」

囁みしめるようにそうつぶつと、背を向けて全速力で走つて逃げた。

「まだ出来てないのか?」

ぼんやりしていたコールベルは、頭上から降り注ぐその声で我にかえつた。慌てて机の上に散らばる書類に視線を落とす。頬ま紅ていた作業はまだ半分も終わっていなかつた。

「あ……もうすぐ、です……」

「ぼつつとするくらいなら帰れ」

ジヨシュは刺々しい言葉を投げつけた。そして、仮面で冷たく一瞥すると、背を向けて主席へと戻つていつた。

コールベルはきのの「」と引きずつていた。

出合つてまだ三日である。なのに、どうして結婚とまで言つ出す

のかわからなかつた。そして、そのことに何か言ひようのない恐怖を感じていた。

?? 行かなければ良かつた。

ジョシュの忠告を聞かなかつたことを後悔する。しかし、レイモンドのしつこさを考えると、きのうは逃げられたとしても、いつかは付き合わされることになるだろう。嫌な思いをしたもののはつきり断れたことは良かったのだと、めずらしく前向きに考えることにした。

「それ貸して。私がやるわ」

今度は女性の声だつた。振り返ると、ジョシュの先輩であるアンナがワインクをして手を差し出している。コールベルが呆然としているのを見ると、自分で机の上の書類を拾い始めた。

「気にしないで。誰にだつて調子の出ないときはあるわ。その代わり、それを資料室に返してきてくれないかな。雑用で悪いんだけど」アンナはにつこりとして、隣の棚の上に投げ出されていた書籍三冊を指差した。随分と前から放置されていたらしく、薄く埃さえかぶつている。すぐに返さなければならぬものとはとても思えない。おそらく、アンナがコールベルに気を遣つて簡単な仕事をくれたのだろう。

コールベルは素直にこくりと頷いて、その書籍を抱えて立ち上がつた。

資料室は地下にあつた。小さめの会議室程度の広さで、そこにスチール製の書棚が数列並んでいる。地下であるため窓はなく、空気は湿つていて、あたりは少しかび臭い。本を保管するのに良い状態とはとても思えなかつた。

本に貼られた分類シールを頼りに、一冊ずつ書棚に戻していく。一冊目を戻したそのとき、入口の扉がギィと嫌な軋み音を立てて開いた。コールベルは書棚の隙間から、息を潜めて窺う。

「やあ、コーレベル」

それはレイモンドだった。書棚越しにコーレベルと田が合ひ、軽く片手を上げて笑顔を見せる。しかし、コーレベルにはそれがとても恐ろしく感じられた。持っていた本を床に落とし、逃げるよう

に奥へと後ずさる。

「何をしに来たの……？」

「ちょっと婚約者の様子を窺いに来たのぞ」

レイモンドはしつとそんなことを言いながら間を詰める。

「そのことは……断つたはず……」

コーレベルの背中にひやりとした固いものが当たる。壁だった。これ以上、後ろには下がれない。前からはレイモンドが迫つてくる。コーレベルは横に飛び出そうとした。だが、その寸前に両の手首を掴まれ、体を壁に押し付けられる。抗おうとしても、体格と力に圧倒的な差があり、まるで杭を打ち付けられたかのようにびくともしない。

レイモンドは口の端を吊り上げた。

「白馬の王子様計画はお気に召さなかつたようだね。苦労して君に会わせたのに傷ついたよ。お嬢さまは我が仮だから仕方ないのかな」コーレベルにはどこが白馬の王子様のかさつぱりわからなかつた。だいたいそんなことを頼んだ覚えはないし、白馬の王子様が好きだなどと言つた覚えもない。勝手なことを言つてもほどがあると思う。

「だが、もうまどろっこいことはやめだ。ここからは俺のやり方でやらせてもらつ」

レイモンドは鋭い視線を向けてそう宣言すると、すぐさまそれを実行に移した。コーレベルを押さえつけたまま、乱暴に貪るように口を奪つていく。

「どうして私がこんな田に？？」

悔しくて目に涙が浮かんだ。逃れようとするものの、非力な彼女の抵抗はすべて押さえ込まれてしまつ。どうすることもできない。

何もかも諦めたように、コールベルの体から力が抜けた。

「は……あ……」

しばらく後に、よつやく口を解放され、苦しそうに息をした。その端から流れ落ちたどちらのものともわからない唾液を拭おうとする。

そのとき、よつやく気がついた。

いつのまにか彼女の両の手首は紐のよななもので縛られていた。ただの紐ではない。魔導で作られたものようだ。そして、それは隣のダクトに括りつけられており、コールベルの動きを封じていた。

「何を……？！」

「既成事実を作るのね」

「させ……い……？」

「子供を作る」

絶句する、とはまさにこのことを言つのだろ。彼の言葉を耳にした瞬間、思考のすべてが停止し、頭が真っ白になつた。言葉など何ひとつ出でこない。

レイモンドは呆然としているコールベルを床に押し倒すと、その上に馬乗りになつた。ブラウスのボタンを鼻歌を歌いながら外していく。

「や……やめて……っ」

「怖がることはない。夫婦ならみんなやつていいことだ」

下着がずらされて白い胸もどが露わになる。その心もとない感覚と、彼に見られている恐怖で、コールベルは小さくふるりと身震いした。逃げるようにそこから視線をそらし、きつく眉根を寄せた。

「私たちは……夫婦じゃない……」

「近いうちにそななるんだよ

「やつ……」

見た目よりもじつく感じる手が、太股を這い上がるよにして短いブリーツスカートの中へ侵入する。同時に、ぞらついた生ぬるい舌が生き物のように脳の上を蠢き出す。言ごよつのない嫌悪感に、

全身がぞつと粟立つた。

「…………」

体中に『えられる望まない刺激に、コールベルは歯を食いしばりて耐えた。目をきつくり瞑り、必死に声を漏らさないよつにする。しかし、彼の執拗な攻めに、次第に限界へと近づいていった。

「も……やめ……て……」

「声を抑えるのはつらいだりつへ、我慢しなくてもいい。どうせ上に聞こえはしないんだ」

レイモンドは耳元で囁くよつて獻らしへり言つて、戯れどばかに耳朶を舐め上げた。

しかし、それきり何もなかつた。彼がそこにいることは確かだ。足元にまたがつていいよつた感触はある。にもかかわらず、声が聞こえなければ、手が這つることもない。

コールベルはぼんやりと薄目を開けた。

パシヤッ？？

その音と同時に白い閃光が彼女を襲つ。思わず目を瞑つた彼女が、再びゆつくりと目を開くと、そこには立て膝のレイモンドが小型のカメラを右手で構えていた。

「これは、君が他の男に心変わりしたときの保険さ」

「コールベルの目から涙が溢れた。まなじりを伝つて耳を濡りす。

「さて、そろそろ本番といくか」

「ほんなどころで何やつてるんですか」

レイモンドのものではない、声。

コールベルには誰だかすぐにわかつた。

「ジョシュ、これから大切な作業があるんだ。邪魔をしないでくれるか？」

レイモンドはやつて振り返ると、挑発的に口の端を吊り上げ、自分の中指をゆつくりと見せつけるよつて舐め上げた。

しかし、ジョシュは仮面を崩さなかつた。

「そういうことは研究所の外でやつてください」

「そんな規則はなかつたはずだけどな」「規則に書くまでもない常識でしょ?」

冷ややかにそう言つ彼に、レイモンドは両の手のひらを上に向かって肩をすくめた。

「仕方ないな、よし、そこで見学することを許可しよう。君の後学のためには」

「所長と警備を呼んできまーす」

ジョシュは無表情で踵を返した。

「待てよ。わかつたよ、出て行けばいいんだろ?」

レイモンドはしぶしぶ立ち上がつた。自分のやつてこることに問題があるという自覚はさすがにあつたようだ。ジョシュの肩をポンと叩くと、追い越して扉のところで振り返る。

「ゴールベル、続きはまた今度、邪魔の入らないところでな」

ゴールベルは全力で首を横に振つた。

しかし、レイモンドは気にせず笑顔を見せ、右手を上げて出て行つた。乾いた足音はすぐに遠ざかり、聞こえなくなつた。

ジョシュは面倒くさそうに大きく溜息をついた。仮頂面のまま右手で頭を押さえると、視線だけを無感情に落とす。

「やつ……」

その視線でゴールベルは我にかえつた。自分がどんな格好をしているかに気付き、羞恥と恐怖で涙がこぼれた。しかし、手首を拘束されているため、隠すことも叶わず、僅かに身をよじることしかできない。

そんなゴールベルに、ジョシュは無言で足を進めると、横たわった身体の上にまたがつて片膝をついた。先ほどまでレイモンドがいた、まさにその場所である。

「や、やめてつ……! 嫌つ!」

「落ち着け! !」

その一喝に、ゴールベルはビクリと動きを止めて息を呑んだ。

ジョシュは捲り上げられたスカートを元に戻し、肌蹴た胸もとを隠すようにブラウスのボタンをひとつだけ留めると、拘束された手首を指差して言つ。

「これを外す。いいな？」

コールベルは濡れた目を見張つたまま、こくりと小さく頷いた。ジョシュは拘束された手首へ近づいていくと、両膝をつき、両手を向かい合わせて呪文を唱え始めた。手の間にほのかな光が発生する。彼女の手首を傷つけぬよう、手のひらにとどまつたその光を、魔導の紐だけにそつと触れさせる。

しかし、紐には何の変化もなかつた。

「あ……れ……？」

「……失敗……したの？」

「ちょっと待て、もう一度やるから、な？」

ジョシュはきまり悪そうに顔を紅潮させ、もう一度、焦りながら両手を向かい合わせて呪文を唱えようとする。だが、そのとき？？。
「何をやつてるんだ！！」

開け放たれたままになつていた入口に、一人の男性が姿を現した。ジョシュたちを目にするなり驚愕の表情でそう叫ぶと、抱えていた書籍をバサリと床に落とし、即座に両手を振り上げて魔導の力を集める。

「ちよつ、待て！！」

ジョシュの訴えも聞かず、男性は白い光球を放つた。ジョシュはすんでのところで結界を張つてそれを消滅させる。本当にギリギリだつた。あと一瞬でも遅れていたら体に直撃していただろう。顔を引きつらせながら、なおも必死に訴えかける。

「落ち着けサイラス！　これにはわけが……」

「どんなわけがあつたってこんなこと許されるわけないだろつ！」

「違うの！　この人は……ジョシュは私を助けてくれたのつ！！」

馬乗りになつたジョシュの下から、コールベルは必死に声を張り上げた。

「はい、外れたよ」

事情を聞いたサイラスは、コールベルの手首を拘束していた魔導の紐を消滅させると、立ち上がりて後ろのジョシュに振り向いた。先ほどとは別人のような穏和な表情を見せている。

「ちょっと特殊な細工がしてあつたけど、それほど難しいものでもないよ。ジョシュもよく見ればわかつたんじゃないかな。さすがに焦つてたんだね」

「そりや焦るでしょ、こんな状況じゃ」

ジョシュは溜息まじりにそう言つと、上半身を起こしたコールベルの脇にしゃがみ、その手首をとつて一通り観察する。

「特に怪我はないようだな。他は……」

「大丈夫……です……」

コールベルは自由になつた手で、左手を覆う包帯を確かめたが、幸い外れていなかつた。ほつとすると同時に、今さらのように自分の姿に対する恥ずかしさが込み上げてきた。彼の視線から逃れるようにうつむくと、ブラウスの前を掴んで体をよじる。

「入口を見張つてるから服を着ろ」

ジョシュは無愛想に言葉を落とし、背を向けて入口の方に向かつた。

それは彼なりの配慮だつたのだろう。

コールベルにはそれがありがたく感じられた。どんな同情の言葉よりも、どんな思いやりあふれる態度よりも、今はただそつとしておいてほしかつた。そして何より、一刻も早くこの無残な格好を何とかしたいと思つた。

部屋の隅に座つたまま衣類を身に着けていく。

それだけで気持ちが少し落ち着いた。安心したせいか急に泣きたくなつた。そして無性にラ・ウルに縋りたくなつた。しかし、それは自分がしないと決めたこと。その面影を振り払つように小さく頭を左右に振ると、涙をこらえて唇を噛んだ。

入口付近で一人はコールベルの方を見ないようにして立っていた。資料室の外からの音に耳をそばだてながら、声をひそめて会話をする。

「サイラス、おまえ何しに来たんだよ。アカデミーはいいのかよ」「今日は助手の子に任せて、こっちの研究を進めようかと思つて」「教師引き受けたんだから、気が進まなくても眞面目にやれよな」コールベルはそれを聞いて思い出した。このサイラスという男性は、アカデミーで何度か顔を見たことがあつた。確か魔導全科一年の担任である。どうやらこの研究所の所員でもあるらしい。

「そんなことより、これからどうするつもり?」

「俺が知るかよ」

ジョシュはぶつかりぼつに答えると、前髪を搔き揚げながら疲れたように溜息をついた。

「とりあえず今日は帰らせた方がいいだろ?」

「そうだね、体調が悪くなつたことにでもして」

サイラスも同意して頷く。しかし、コールベルはそれを望まなかつた。

「仕事、します……」

少しふらつきながら彼らの方に足を進めると、掠れた弱々しい声で主張する。

二人は面食らつたように振り向いた。

「無理しなくていいんだよ」

サイラスは優しい口調で宥めたが、コールベルは首を横に振つた。

「逃げるのは悔しい……もの……」

「そんなことを言つている場合じやないだろ?」

今度はジョシュが呆れたように言つたが、それでも頑なに首を横に振つた。

レイモンドが何を考えているのかはわからないが、このまま引き下がつたのではまるで彼に屈服したかのようである。ますます彼が

調子に乗ることになるだろうと思つた。それに、自分のいないところでレイモンドが何を言い出すか、どんな行動をとるのかを考えると怖かつた。顔は会わせたくないが、目の届くところにいた方がまだましである。

「……わかつた」

「ジョシュ、ちょっと……」

眉をひそめるサイラスを無視して、ジョシュは真面目な顔でユールベルと向かい合つた。

「まず、顔を洗つてこい。それから一緒に戻る。おまえは気分が悪くなつて資料室でしばらく倒れていた。俺はそれを見つけて回復するまで付き合つていたことにする。いいな？」

ユールベルはこくりと頷き、顔を伏せたまま資料室を出でていった。

その後、ユールベルは仕事に戻つた。

予想したとおり何度もレイモンドが声を掛けてきたが、ジョシュやサイラスが上手く追い払つてくれた。仕事に戻りたいという自分の私が僕のせいだ、彼らには迷惑を掛けてしまつたと申し訳なく思う。

「お疲れ、もういいから帰れよ」

就業時間が終わるとすぐに、ジョシュはユールベルにそう声を掛けた。相変わらず素つ氣ない口調ではあるが、もうそこに敵意を感じることはなかつた。

「やあ、ユールベル。どこで続きをしようか」

レイモンドがとぼけた笑顔でやつてきた。

ユールベルがびくりとして一步後ずさると、入れ替わりに、ジョシュが庇うように一步前に踏み出した。背の高いレイモンドを見上げると、感情を抑えた口調で言つ。

「センパイ、仕事で訊きたいことがあるんでちょっとといいでですか」

「悪いが明日にしてくれ。これから大事な用事があるんでね」

「こつちも大事なことなんですよ」

ジョシュはそう言いながら、体の後ろでこいつそりと左手を振り、コールベルに早く行けと指示をする。コールベルは小さく頷くと、逃げるよつて走つて研究所を出て行つた。

「まあいい、チャンスはいくらでもあるからな」
レイモンドは両手を腰に当て、おどけるよつて肩をすくめて見せた。

「ジョシュ、君はお姫さまを護る騎士にでもなつたつもりかもしないが、よく考えてみる、誰の味方をするのが自分にとつて得なのかを」

「そういう考え方しか出来ないんですか」「
ジョシュは冷ややかに言い返した。

しかし、レイモンドは飄々とした態度を崩さなかつた。まるでそんなジョシュの反応を楽しむかのように、ビリか陽気をやん感じさせる表情を見せながら言つ。

「君は相変わらず堅物だな。そつだな……、よし、君がそれほどコールベルを気に入つたのなら、一度くらい抱かせてやつてもいいぞ」「……あんたやつぱサイテーだよ」

ジョシュは嫌悪感も隠さず、軽蔑するよつて吐き捨てる。
フツ、とレイモンドは不敵な薄笑いを浮かべ、横柄に腕を組んでジョシュを見下ろした。

「君はもう少し上手く立ち回ることを覚えた方がいい。もし私の側につくといつのなら、私が所長になつた暁には……」

「あんたに牛耳られた研究所なんか、こつちから願い下げだ」

ジョシュは低く唸るよつな声でレイモンドの言葉を遮ると、腹立たしげに背を向けて自席に戻つた。乱暴に体重をかけられた椅子の背もたれが、ギイツと耳障りな音を立てて軋んだ。

翌日、コールベルは鉛のよつて重たい気持ちを引きずるよつて出勤した。

前日と同様にレイモンドはあれこれちょっかいを出してきたが、ジョシュが何とか上手くあしらってくれた。しかし、そのたびに彼の仕事の邪魔をしているようで、コールベルは心苦しかった。自分は辞めた方がいいのかもしない。

そうすれば彼もこんなことに煩わされることはないはずだ。

しかし、今はそんなことを考えるよりも、少しでも仕事を進めなければならぬ。これ以上、ジョシュの足手まといにならないように？？。

昼休みになると、レイモンドは懲りもせずコールベルのところへやつて来た。逃げようとしたコールベルを阻むように、笑顔で両腕を広げながら近づく。

「お昼は食堂だな。みんなに僕たちの仲睦まじいところを見せつけるとしよう」

まわりの人にも聞こえるようにわざと声を張つて、何人かの所員が興味深そうに一人を見ていた。中には誤解している人もいるかもしねりない。

コールベルは怖くなつて、必死に首を横に振つた。そのとき、ジョシュが横からさつと割つて入つた。素早くコールベルの手を取ると、その手を引いて歩き始める。

「おい、待てよ。人の妻を掠め取るとはいひ度胸だな」

「彼女と仕事の話がありますので」

ジョシュはもう何を言つても無駄だと思ったのだろう、妻という言葉を訂正することなく、無表情のまま素つ氣なくあしらつた。

レイモンドはフツと鼻先で小さく笑つた。

「いつまで足搔けるかな」

ジョシュはそれを無視し、コールベルとともに足早にフロアを後にした。

二人は食堂に入ると、昼食を買ってから窓際のテーブルについた。

ジョシュは無言でスパゲティをフォークに絡めている。その表情には濃い疲労の色が見て取れた。その原因が自分であることを、コールベルは痛いほど理解している。膝の上のプリーツスカートをギュッと掴んで顔を上げる。

「あの……」

「あらー？ 女嫌いのジョシュ君がめずらしい

コールベルのか細い声は、アンナのよく通る声に搔き消された。アンナはプレートを手にして立つたまま、人なつこい丸顔で二口一口しながら一人を見下ろしていた。

「何か用ですか？」

ジョシュは少し苛立つた声で尋ねる。それでもアンナの笑顔は崩れなかつた。

「良かった良かった。一人が仲良くしてくれてお姉さん嬉しいぞう。ジョシュはとつつきにくいけど悪い子じゃないの。仮頂面も冷たい態度もぜーんぶ照れ隠しだと思つてればいいからね。まだまだお子様なのよ」

「殴りますよ……」

ジョシュは低い声で物騒なことを言つたが、アンナは完全に無視してコールベルにウインクした。コールベルはどう反応すればいいかわからず、困惑しながら目を伏せる。

「あと……」

アンナは少し真面目な顔になると、腰を屈めてコールベルの耳元に口を寄せた。

「レイモンドに気に入られてるようだけど、あいつには気をつけた方がいいわ。ちょっとヤバいから」

そう小さな声で囁いて、頭を指しながら片眉をひそめて見せる。

「ま、ジョシュが一緒にいてくれれば安心だけだね。じゃあまたつー！」

彼女は軽く手を振り早足で去つていいくと、少し離れたところで待つていた同僚とともに奥の席についた。キャピキャピと楽しそうに

はしゃぐ声が聞こえる。

「……あいつ、何て？」

「レイモンドはヤバいから氣をつけなさいって」

「遅せえよ」

ジョシュは力なく笑いながら溜息まじりに言つた。面倒くさそうに頬杖をつくと、手に持つて回したフォークを回し、再びスパゲティを絡め始める。

コールベルは膝に手を置いたまま視線を落とした。

「ごめんなさい、女嫌いなのに……」

「からかってんだよ、そんなこと真に受けけるな」

ジョシュは少し怒つたように語調を強めると、スパゲティを絡めたフォーク口に運んだ。そして、今度はサラダをつつきながら重い声で切り出す。

「おまえさ、ボディガードでも雇えよ。研究所の中なら俺が氣をつけてやれるけど、外まではさすがに無理だ。あいつは本当にヤバい。このままだといつか……」

彼はそこで言葉を切つたが、何を言いたかったのかはコールベルにもわかつた。あのときのことを思い出して表情がこわばる。そんな彼女に、続く彼の言葉がさらに追い打ちを掛けた。

「ラグランジエ家のお嬢さまなら、そのくらいしてもらひえるだらう」

コールベルは深くうつむき、膝に置いた手をギュッと握りしめた。

「……私……お嬢さまじやない……」

彼に悪気がないのはわかっている。コールベルの家庭の事情など知るはずもない。ラグランジエの名を聞けば、それなりの良い暮らしをしてきたと思われても仕方のないことだ。しかし、実際は薄暗い部屋で長年幽閉されて、ただ生かされていただけだった。人間としての扱いすらされていなかつたのである。

「ボディガード、無理なのか？」

ジョシュは戸惑つたように眉をひそめて尋ねる。

「私、ここを辞めます……あなたにも迷惑を掛けてしまうし……」
サイファの紹介でここに来たので、簡単に辞めるわけにはいかないと思ったが、もはやそうするしかないと思った。ジョシュやサイラスに甘え続けるわけにはいかないし、このままではかえってサイファに迷惑を掛けることにもなりかねない。

「そうだな、それがいいかもしない」

ジョシュも賛成した。しかし、暗い声で言葉を繋ぐ。

「ただ、あいつがそれで諦めるかはわからないが……」

確かにあれほどの執着を見せているレイモンドが簡単に諦めるとも思えない。だからといって、他にとるべき方法など思いつかない。ゴールベルはただうつむくことしかできなかつた。

「やあ、ゴールベル

「おじさま」

書類を整理していたゴールベルは、背後から名を呼ばれ、咄嗟に立ち上がりて振り向いた。そこには、濃青色の制服を着たサイファが、人なつこい笑みを浮かべながら軽く右手を上げて立つていた。研究所にいるときは所長と一緒にことが多いが、今日はひとりのようだ。

「仕事の調子はどうかな？ 困ったことや悩み」とがあつたら相談にのるよ」

「…………私…………大丈夫です…………」

「ガン！」と唐突に激しい音がして、ゴールベルはビクリと振り向いた。それは、ジョシュがスチール製の机を蹴り飛ばした音だった。仮頂面でモニタに向かつたまま、苛立つた様子で口を開く。

「何度も言つてますが、仕事の邪魔をしないでもらえますか。仕事とは関係のない話をするなら研究所の外でしてください。その役立たずは連れて行つて構いませんから」

「ジョシュ！――」

離れていたところにいたアンナが飛んできて、ジョシュの頭を拳

骨で横殴りにした。そして、サイファに向き直ると、腰から一つ折りになるくらいに頭を下した。

「申しわけありませんっ！」

「いつも邪魔をしていたよ、『あらじそ申しわけなかつたね』サイファは笑顔のままで言つ。それを見たアンナの顔から血の気が引いた。

「邪魔だなんてそんなこと全然ありません！」

サイファはにつこりとしてユールベルの肩を抱き寄せた。

「彼の言葉に甘えさせてもらつて、ユールベルをちょっと借りたいんだけどいいかな？」

「はい！ どうぞいくらでも！！」

戸惑うユールベルに、ジョシュがちらりと田を向けた。その田を見てユールベルは理解した。これが彼なりの配慮だということを？。

ユールベルは、魔導省の塔にあるサイファの個室へと連れられてきた。サイファに促され、大きな執務机の前に置かれた椅子に座る。「ここなら邪魔者はいないし、心置きなく話ができるだろ？」
「おじさま、ジョシュは私のためにあんな言い方をしたの」
本題に入る前に、まず彼の態度について弁明しておきたかった。自分のためにいつまでも彼を悪者にしてはおけない。信じてもらえるだろうかと心配したが、サイファはとっくに見透かしていたようだ。

「そんなことだらうと思つていたよ。あの場では言いにくい話があつたのかな」

「それは……」

ユールベルにはまだサイファに話す決心がついていなかつた。しかし、辞めにしても、サイファには理由を告げなければならない。握りこぶしを胸に当ててグッと押せると、思いつめたように表情を引き締めて顔を上げる。

「私、研究所を辞めるつもりです」

「理由を聞かせてもらえるかな」

サイファは顔色一つ変えず、冷静に尋ねた。

コールベルはレイモンドのことをサイファに話した。仕事中でもしつこく言い寄つてくること、結婚を前提に付き合つてくれと言われたこと、断つたにもかかわらず婚約者のつもりでいることなど、思いつく限りのことを堰を切つたように言つ。ただし、資料室でのことだけは触れなかつた。あれだけはサイファであつても知られたくないつた。しかし、それを除いたとしても、辞める理由には十分だろうと思つた。

「レイモンド……レイモンド＝＝コールソンか……」

サイファは真剣な顔で聞いたあと、小さくそれだけ呟くと、すぐに方々に連絡を取り始めた。それはまさに怒涛の勢いだつた。コールベルが口を挟む隙もないくらいである。時折、何かの書類を持つた人がやってきて、サイファにそれを渡していく。サイファはそれを見ながらさらにどこかに連絡、指示をする。その繰り返しだつた。何をしているのか具体的にはわからなかつたが、どうやらレイモンドについて調査しているらしいことだけはわかつた。

それが一時間ほど続いたのち、サイファは丁寧に受話器を置くと、コールベルに目を向けてにっこりと微笑む。

「コールベル、君が辞めることはないよ」

「え……？」

「レイモンドをここへ呼んで話をつける」

「おじさまやめて！ 私……いいの、私が辞めるから！」

コールベルは引きつった声で懇願した。

「そつはいかない。これは君だけの問題ではないからね」

サイファは鮮やかな青の瞳に鋭い光を宿して言つた。冷たい笑みを浮かべるその表情には淒みがあり、コールベルはゾクリと背筋が凍りつくように感じた。

そのとき、初めて彼のことを怖いと思つた。

君だけの問題ではない??その言葉の意味はわからなかつたが、尋ねることも反論することもできず、ただ椅子に座つたまま硬直するだけだつた。

「ンンン??。

扉が軽快にノックされた。

「入りましたえ」

サイファはいつもより厳肅な声で言つた。

扉を開けて入つてきたのは、予想どおりレイモンドだつた。ユールベルは思わず椅子から立ち上がり、警戒するように身構えながら一步下がつた。

しかし、レイモンドはコールベルには田も向けず、サイファに向かつて丁寧にお辞儀をすると、思いきり愛想のよい顔を見せて言つ。「ラグランジエ本家当主直々のお呼び出しとは光榮の極みです」「なるほど、君にとつて私はラグランジエ本家当主というわけか。君の勤める魔導省の副長官ではなく、ね」

サイファは意味ありげな笑みを、その形の良い唇に乗せる。

一瞬、レイモンドは怯んだ。口元を僅かに引きつらせる。しかし、すぐにそれをごまかすように笑つと、両の手のひらを上に向け、大袈裟に肩を竦めて言い訳する。

「魔導省副長官より、ラグランジエ本家当主のインパクトが強かつただけです。他意はありません」「君はユールベルに随分と執拗につきまとつてゐるようだね」「いえ、私たちは結婚を前提として付き合つています」サイファは少しの間も置かず本題へと移したが、今度は心構えができていたのか、動搖を見せることなく平然と即答した。

「ユールベルは断つたと言つていたが?」

「少し喧嘩をしてしまつたので、今は機嫌が悪いだけでしょう。いくら愛し合つっていても、些細なことで喧嘩になつてしまつ」とぐらり、あなたにもありますよね?」

「さあ、私にはないな」

同意を求めたレイモンドに、サイファはつれない答えを返す。

その答えが事実かどうかは、コーレベルにもわからない。だが、レイモンドを動搖させるのに効果的だったことは間違いないようだ。予想外の返答にシナリオが狂つたのか、少しの間だったが言葉を詰まらせた。

「……とにかく、私はコーレベルを愛していますし、コーレベルも私を愛してくれています」

「嫌つ……！」

レイモンドに肩を抱かれたコーレベルは、抵抗して身をよじり、その腕から逃れようとした。だが、レイモンドは耳元に悪魔の囁きを落とす。

「写真」

その一言だけで、彼が何を言いたいのかわかつた。

そう、彼の手には切り札があったのだ。

コーレベルは抵抗する手を止めた。彼の言いなりになどなりたくはなかつたが、そうしなければあの写真をばらまかれてしまう。悔しくて目に涙が滲んだ。

「よろしければここで結婚の許可をいただけませんか？ 今すぐ結婚でなくても構いません。とりあえず確約だけいただければと。一生、彼女とともに生きていく覚悟は出来ています。彼女も同じ気持ちのはずです。そうだろう？ コーレベル

「…………わた、し……私は……嫌つ……！」

コーレベルは耐えきれずにそう叫ぶと、レイモンドを突き飛ばした。彼の体は虚をつかれてよろめく。しかし、すぐに体勢を立て直すと、顔いっぱいに笑顔を作つて言ひ。

「結婚式は君の望みどおりにするよ。だからそろそろ機嫌を直してくれないかな」

「写真なんて好きにすればいい！ 一生あなたと生きていくよ、そつちの方がよっぽどましだわ！！」

「コールベルは体の横でこぶしを握りしめ、体の奥から声を絞り出すように叫んだ。右目から涙が零れ落ち、頬を伝って床に落ちる。体は悔しさと恐怖でわなないていた。

「写真？」

サイファは表情を変えずに、少しだけ怪訝な声で聞き返した。

しかし、それに対する返事はなかつた。レイモンドは苦虫を噛み潰したような顔をしている。コールベルにとつては好機だったが、自分の口から説明する勇気はなかつた。

「レイモンド、説明してくれ」

サイファは一人の様子を確認すると、レイモンドの方に説明を求めた。

それで観念したのだろうか。

レイモンドは両手を腰にあて、わざとらしく大仰に肩を竦めた。

「やれやれ……計画変更かな」

溜息まじりにそつ言つと、ニヤリと厭らしく口の端を吊り上げ、ズボンのポケットから小型のカメラを取り出した。

「このカメラには、コールベルの人には見せられない姿が収められています」

コールベルは耳をふさいで、きつく目を瞑つた。しかし、それでも声は漏れ聞こえてくる。あのときのことが脳裏によみがえり、体中にゾワリと悪寒が走つた。

サイファは僅かに眉根を寄せて尋ねる。

「盗撮か？」

「まさか、そんな罪は犯しません。盗撮なんかよりもっとすごい画が撮れますよ。なにせ私たちが愛し合つているときに撮つたものですから」

「ウソ！ あなたが無理やり……っ！」

コールベルは思わず反論したが、それだけ言つのが精一杯だった。再び目に涙を溜め、唇をきつく噛み締め、小刻みに体を震わせる。いつたいどうしてこんなことになつてしまつたのだろう。考えてみ

てもわからない。悔しくて悲しくてやりきれなかつた。

対照的にレイモンドはこの状況を楽しんでいるように見えた。

「どうします？ 可愛い姫御さんがあられもない姿を世間に晒しますか？」

「好きにすればいい。本人がそう言つているんだ」

サイファはさらりと無感情に言つた。

一瞬、レイモンドは怯みかけたが、負けじと食い下がる。

「ラグランジエ家」の令嬢のこんな姿が世間に晒されでは、大騒ぎどころではないでしょう。由緒ある家名に傷がつくことは避けられないはずです」

「ラグランジエ家はそれくらいでは揺らがない」

その言葉を体現するかのように、サイファは冷静沈着に、そして威厳をもつて言つた。声を荒げているわけでも、威圧的に振舞つているわけでもないが、その佇まいには相手を恐怖させるものがあつた。

「写真を見たら意見が変わりますよ。明日、現像してお持ちします」

レイモンドは脂汗を滲ませながらも、強気に口の端を上げて、手

にしていたカメラを顔の横に掲げて見せた。その瞬間？？。

バン！ と短い爆発音がして、カメラが粉々に砕けた。

それはサイファの魔導によるものだつた。

カメラもフィルムも原形を留めていない。その中心から薄煙が上がっている。レイモンドの指からは、魔導を受けたせいか、破片によるものか、赤い血が流れている。頬にも斜めに赤い線が走つている。それ以外にもところどころ軽い裂傷を負つてているようだ。レイモンドはカメラだつた物体を床に落とし、傷ついた手を反対の手で押さえて歯を食いしばる。

「カメラ代は弁償する。治療費も払おう。ただし慰謝料は出さない」

サイファは毅然と言つた。そして、机の上で両手を組み合わせる

と、レイモンドに呆れたような冷たい目を向けた。

「君が馬鹿だつたおかげで手間が省けたよ」

「……こんなことをして……私が訴えればどうなるか……」

レイモンドは唸るようにしてそんな脅し文句を口にしたが、サイフアは平然としたまま涼しい顔で問いかける。

「君の欲した力はその程度のものなのかな？」

「くつ……」

ラグランジエ家に掛けられ、その程度の傷害事件を揉み消すことなど造作もない。そんなことはレイモンドにもわかっていたのだろう。圧倒的な敗北にもう言葉も出なかつた。

「そもそも、研究所に君の戻る場所はもうないから」

サイフアは急に軽い口調になつて言つた。

レイモンドは驚いて顔を上げ、呆然とした。

「解雇……ということですか？」

「いや、内局に戻すことにした。それが君の望みだつたんだろう？」
レイモンドはもともと魔導省の内局に勤めていた。だが、何かと問題を起こすことが多く、厄介払いのような形で研究所へ異動になつたのだ。

しかし、今、サイフアは内局に戻すといつ。

「……それは、取引ですか？」

少し考えてから、レイモンドは慎重に尋ねる。

「解釈は君に任せる」

サイフアは静かにそういうふうと、フシと小さな笑みを浮かべた。
「レイモンド、わかつているとは思うが、念のためにあえて忠告しておく。今後、一度とラグランジエ家に手出しをしようなどと思つな。もし再び何らかの行動を起こした場合、私はありとあらゆる手段で君を追い詰める」

それは單なる忠告などではなく、抗いようのない最後通告である。サイフアならば実際にそれを実行することが可能だ。そうなれば人生は終わつたも同然である。レイモンドの顔は引きつり、額から頬に汗が伝つた。

「行け」

もう言い返す気力もなくなつたのか、サイファに命じられたまことに部屋を出て行つた。その背中は哀れなほどに憔悴しきついていた。

「おじやも……レイモンドの狙いはラグランジエ家だつたの……？」

「コールベルはまだ濡れている瞳をサイファに向けて尋ねた。

「そうだよ。コールベルと結婚してラグランジエ家人間になり、その力を手に入れるつもりだつたようだね」

サイファは優しい口調でゆつくりと答える。そして、机の上で両手を重ねると、少し表情を険しくして続ける。

「そういう人間が出てくるだらうことは予想していたが、これほど早く、これほど強引な方法で来るのは予想外だつた。もつと氣をつけておくべきだつたと反省している。コールベル、君には本当に申し訳ないことをした」

コールベルの目から涙が溢れ、その場に膝から崩れ落ちた。顔を両手で覆つて嗚咽する。

その背中に、そつとあたたかい手が置かれた。

ビクリとして顔を上げると、サイファが申し訳なさそうに微笑んでいた。コールベルの隣に膝をついてしゃがみ、そつと自分の胸に抱き寄せた。

コールベルはサイファにしがみついて泣きじやくつた。

泣き疲れて落ち着くまで、サイファはずつと無言で抱きしめてくれていた。その包まれるような優しい温もりに安堵して寄りかかる。しかし、心の片隅では、それでもラウルを求めていた。

「何だと……？」

ラウルはカルテを整理する手を止めて振り向くと、顔いつぱいに疑念を広げ、思いきり眉をひそめて聞き返した。しかし、患者用の丸椅子に座るサイファは、対照的に満面の笑みを浮かべて答える。

「だから講師を頼みたいんだよ。ラグランジエ家の若者を集めて講座を開くんだ。題して『ラウルの恋愛コミュニケーション講座』」

「ふざけるな」

ラウルはこめかみに青筋を立てて一蹴した。

それでもサイファは少しも動じることなく、にっこりと笑顔を浮かべたままで言う。

「大真面目だよ。ラウルにも話しだろう？」ラグランジエ家も一族の者以外との婚姻を認めるにしたと。通達したのはラグランジエ家の人にだけだが、もう随分と世間に広まってしまったようだね。ラグランジエ家に入つてその力を得ようとすると者が動き出しているんだ」

確かにそういう動きがあつてもおかしくはない、とラウルは思う。ラグランジエの名には良くも悪くも強大な影響力がある。ある種の権力といつてもいい。実力のない人間ほど手に入れたがるものだ。サイファも当然ながら想定はしていただろう。だが？？。

「それでなぜ恋愛コミュニケーション講座なんだ」

ラウルは椅子を回してサイファに向き直ると、腕を組んで冷ややかに見下ろした。

サイファは両の手のひらを上に向けて答える。

「まあ平たく言えば、つまらない人間に騙されないようについてことだよ。もちろん最終的には私が調査・面談して、問題のある人間は却下するが、それでも騙された子の心には大きな傷が残る。不憫だろう？　だから、それ以前に自分自身で見抜くスキルを身につけさ

せたいと思つてさ。あと、しつこい相手の断り方や、いざといふときの身の守り方もね」

「……話はわかった」

サイファの考へてゐることとは意外とまともだつた。おかしいのはタイトルだけである。そこまで教えてやる必要があるのかとも思うが、ラグランジエ家の置かれている今の状況を考えれば仕方がないのかも知れない。

しかし、それと講師を引き受けたかどうかは別の話である。

「だが私には無理だ。他を当たれ」

「ラウルほどの適任はいなさ。長い年月を生き、多くの人と関わってきた。人の本質を見抜く能力は誰よりもあるだろう？ 恋愛方面も得意なようだしね」

サイファはそう言つと、薄い唇に意味ありげな笑みを乗せ、挑戦的な視線を送る。

ラウルはピクリと眉を動かして睨み返した。

「おまえ、嫌味を言つてゐるのか？ からかつてゐるのか？」

「どこか間違つてゐるか？」

サイファは真顔で言つ。とぼけているのか本気で言つているのか判然としない。

「引き受けてくれれば謝礼は弾むぞ」

「あいにく金には困つてない」

「では、ラウルだけのために我が家でティーパーティを開こう。レーチェルの淹れた美味しいお茶を飲ませてやるよ。何ならプリンも作らせるぞ。好きなんだろう？」

「おまえ……」

人差し指を立てて笑顔で取引を持ちかけるサイファに、ラウルは眉間に皺を寄せながら呆れたような視線を送つた。しかし、危うく応じそうになるほどに心を動かされてしまつた自分も、度し難い人間という意味では似たようなものだ。それをごまかすように目を逸らすと、大きく声を張つて突き放すように言つ。

「とにかく断る。そんなものはやうへんの結婚詐欺師にでもやらせればいいだろ?」

「結婚詐欺師?」

サイファはきょとんとして聞き返した。それから、軽く握った右手を口元に当ててじっと考え込むと、小さく頷きながら言つ。

「なるほど、その発想はなかつたな。さすが先生だよ。そつだな……よし、ではさつそく結婚詐欺師の手配をするとしよう!」

「…………」

ラウルは面倒くさくて投げやりに思いつきで言つただけである。本気で考えていたわけではない。なのに、まさかそこに食いついてくるとは思いもしなかつた。ましてや本当にそんな展開に持つていくなど想像すらしなかつた。

いつたい何を考えているのだろうか。

ラウルは眉をひそめて怪訝な眼差しを送るが、サイファはまるで意に介する様子もなく、すぐさま椅子から立ち上がって医務室を出て行こうとした。だが、扉に手を掛けたところで振り返つて言つ。

「そうそう、コールベルだけはおまえに頼むよ。ラグラソジエ家を狙つていた下衆な男に弄ばれてひどい目に遭つたらしい。だいぶ参つているみたいだから、様子を見てやつてくれないか。おまえのたつた一人の患者だろ?」

「精神科も心療内科も専門外だ」

ラウルは無愛想に答える。

「医師としてではなく個人としても何か出来ることはあるだろう。彼女が自分から心を開くのはおまえくらいだからな。とにかく頼んだぞ。講師よりは随分楽だろ?」

サイファは一方的にそう言つと、引き戸をガラリと開けた。

ラウルは机に手をついて勢いよく立ち上がる。

「待て、勝手なことばかり言つな」

「私は忙しいんだ。結婚詐欺師も探さなければならないしな」

サイファは僅かに振り返り、目を細めてラウルに視線を流すと、

何か裏を含んだよつた妖艶なまでの笑みを浮かべた。外からの小さな風に、鮮やかな金の髪がさらりと揺れる。

彼が何を考えているのかわからない。

扉が静かに閉まつた。

ラウルは何も言えないまま見送り、遠ざかる足音を聞きながら、顔をしかめて椅子に腰を下ろした。机に肘をついてうなだれた頭を支える。その視界の端には、薬棚にいくつも常備してある新品の包帯が映つていた。

「ンンン？？。

ゴールベルはアカデミー二階の隅にある一室の、少々古びた扉をノックした。

「はい、どうぞ」

中から女性の声で返事があつた。掛けられたプレートをもう一度確認したが、部屋は間違つていない。予想外のことに対する想い、戸惑つたが、このまま逃げるわけにもいかず、おそるおそるドアノブを回して扉を開いた。

「あら？ ゴールベル、いらっしゃいー！」

「あなた、どうしてここに……？」

広くはない雑然とした部屋にいたのはアンジェリカだつた。机に向かい赤ペンで何かを書きつけていたようだ。彼女の机にも、その奥の机にも、紙束が山のように積み上げられている。彼女は赤ペンにキヤップをすると、顔を上げてニッコリと微笑んだ。

「私、先生の助手をしているのよ」

「そう……」

確かにアンジェリカはアカデミーで働いていたと言つていた。だが、それがまさかここだとは考えもしなかつた。ゴールベルは何となく気まずいものを感じたが、アンジェリカの方にはまったくそんな様子は見られない。

「先生はすぐに戻つてくると思うから、その辺の椅子に座つて待つていて」

「いえ、出直すわ

ゴールベルは一步下がつて扉を閉めようとする。

「ゴールベル？」

背後の少し離れたところから声がした。ゴールベルはドアノブに手を掛けたまま、声の方に振り向く。そこにいたのはサイラスだつ

た。彼は目を丸くしていたが、すぐに一ヶ口つと穏和な笑みを浮かべ、コールベルの方に歩を進めながら言つ。

「本当に来てくれたんだ。嬉しいよ」

「あなたが来いって言つたから……」

コールベルは目線をそらして言い訳のようなことを口にする。

きつかけは確かにそれだった。例の事件のあと、研究所で顔を会わせたときに「一度、遊びに来て」と言われたのだ。それは社交辞令だったのかもしれない。だが、少し彼に相談したいこともあります。別件でアカデミーに来たついでに立ち寄つてみたのである。

「それに、わざわざ来たわけじゃないわ」

「わかつていいよ」

サイラスは包み込むようにそう言つと、戸口で立ち尽くすコールベルの背中に手を添えて部屋の中へと促した。コールベルはその温かさに戸惑いながらも、素直にそれに従つて足を進めた。

「じゃあ、私も、もう帰りますね」

アンジェリカは机の上を片付けてそう言つと、鞄を肩に掛けて立ち上がつた。

腰を下ろしたばかりのサイラスは、きょとんとして顔を上げる。

「え？ もう帰るのかい？」

「たまにはいいですよね？ 先生、さぼらないでちゃんと仕事をしてくださいね」

アンジェリカは悪戯っぽく忠告すると、くすつと小さく笑い、手を振りながら部屋を出て行つた。それはおそらくコールベルたちに気を遣つてのことなのだろう。彼だけに話したいことがあつたコールベルには、彼女のその行動は有り難かつた。

「それほどさぼっていないんだけどね」

サイラスは苦笑しながら誰にともなく呟いた。そして、机の上の書類を無造作に脇に寄せる。おもちゃ箱をひっくり返したかのような引き出しの中からマグカップを一つ取り出してそこに置く。

「コーヒー飲む？ インスタントだけど」

「はい……」

サイラスの隣に座るコールベルは、戸惑いながらもそう答えた。
なぜ事務机の引き出しにマグカップをしまっていいるのか、それはきちんと洗つてあるのか、埃をかぶつていないのかなど、さまざまな疑問が喉まで出かかつたが、それを尋ねるのも失礼な気がして、ぐつと言葉を飲み込んだ。

そんなコールベルの不安などお構いなしに、サイラスは机の上に置きっぱなしになつていていたインスタントコーヒーの瓶を開け、そこから直接マグカップに入れると、やはり机の上に置いてあつたポットの湯を注ぐ。

「はい、どうぞ」

「ありがとう……」

コールベルは差し出されたマグカップを両手で受け取ると、中の黒い液体をじつと見つめてゆっくりと口に運んだ。それは、とてもコーヒーとは思えない味だつた。コーヒー自体が酸化しているうえ、湯の温度が低すぎのも一因なのだろう。しかし、目の前で美味しそうに飲んでいるサイラスに、不味いなどと言えるはずもなかつた。サイラスはマグカップを机に置き、につこりと人なつこい笑顔を浮かべて尋ねる。

「もしかして僕に何か用があつた？」

「別に……」

コールベルはそう言い淀んで目を伏せた。図星を指されて思わず否定するよつなことを口走つてしまつたが、こんなとこひでつまらない意地を張つては、勇気を出してここに来た意味がなくなつてしまつ？？ぎゅっとマグカップを握りしめると、意を決して顔を上げる。

「私、先生に相談したいことがあるの」

落ち着いた口調ではあるものの、その中にはどこか思いつめたような声音が響いていた。少し驚いたような表情を見せるサイラスに、

ゴールベルは深い森の湖のような瞳でじっと訴えかけた。

「えっ？ ジョシュに避けられてる？」

ゴールベルは白いワンピースの裾をぎゅっと掴み、固い顔でじりりと頷いた。しかし、それを聞いたサイラスは、腕を組みながら困惑したような表情で首を傾げる。

「うーん、それ、気のせいじゃないのかなあ

「そんなことないわ！」

ゴールベルは身を乗り出し、思わず強い語調で言い返した。その必死な態度にサイラスは面食らったようだったが、すぐに優しい表情になると、ゴールベルを覗き込んで穏やかに問いかける。

「じゃあ、詳しく説明してくれる？」

ゴールベルはこくりと頷き、どのように説明しようか思案すると、暫しの沈黙のあとに小さな口を開いた。

ゴールベルが話した内容はこいつである。

ジョシュには研究所に来た当初から嫌われていいようだったが、例の事件のときには、ゴールベルを助けて力になってくれた。これがきっかけで、彼との関係も良好なものになるのではないかと期待したが、その後もなく彼の態度は再び硬化してしまった。ただ、以前のようにあからさまに嫌っているような態度ではなく、気遣いつつも関わり合いを避けている、そんなふうに感じる……と。

「最初にジョシュが冷たい態度をとっていた理由ならわかるよ」

「えっ……？」

思いもしなかつたサイラスの言葉に、ゴールベルは目を見開いて聞き返した。

「ジョシュはね、ラグランジェ家が嫌いなんだ。多分、理由はそれだけだと思うよ」

サイラスは柔らかく微笑んで言つ。

「でもどうして？ ラグランジエ家が嫌いって……」

「さあ、どうしてかな。ジョシュは眞面目だから、柔軟な対応をするサイファに反発しているというのはあるだろ？ それに、何かと優遇されているラグランジエ家の人間を見て、やりきれない思いを持つているのかも」

ゴールベルは何も言えずにしつむいた。それを見て、サイラスは慌てて付け加える。

「ゴールベルが責任を感じることはないんだよ

「私、わかったわ……」

ゴールベルは咳くように言つた。

サイラスはきょとんと瞬きをして覗き込む。

「わかったって、何が？」

「私もおじさまの口添えで研究所に入ることになつたもの。ジョシュの嫌いなラグランジエ家の人間そのものだわ。でも、あの事件のこと少し同情してしまつて、どつちつかずの態度になつているのね」

ゴールベルはうつむいたままに言つ。それがもつとも辻褄の合つた気がした。

しかし、サイラスは納得していないようだった。

「うーん……本当は冷たい態度をとつていたことを後悔しているけれど、素直にそれを言いだせないって可能性の方が高いと思うよ。ジョシュだってゴールベルが研究所に入るだけの実力があることはわかつてははずだし、いつまでもそんな言いがかりみたいな理由で嫌つたりしないんじやないかな」

確かにそれも考えられなくはないが、ゴールベルはそこまで楽観的になれなかつた。

「じゃあ、あの事件で迷惑をかけてしまつたから、そのことで腹を立てているのかも。もうあんなことに巻き込まれないようこ、私の関わりを避けているのかも」

「そんなことないって」

サイラスは苦笑しながらそう言つて、小さく息をついて、落ち着いた静かな声で続ける。

「ジョシユつてさ、あまり人付き合いが得意じゃないから、どういう態度をとればいいかわからなくて戸惑つているだけだと思つ。嫌つているとか避けているとか、そんなこと考えない方がいいよ」

「先生とは仲が良さそう……」

これまで一人が話しているのを見る限り、サイラスとは打ち解けているように見えた。少なくともコールベルに対する態度とは雲泥の差である。

サイラスは机に腕を置いて言つ。

「そんなに仲良しつてわけでもないけど、まあ普通に喋つたりはするね。でも最初からそうだつたわけじゃないよ。最初は僕もかなり刺々しい態度をとられていたし」

「そう、なの？」

コールベルが不思議そうに尋ねると、サイラスはにっこりと大きく微笑んだ。

「仲良くしたいんだつたら、コールベルの方からそう言つてみたら？」

「別にそういうわけじゃないわ」

コールベルは思わずむきになつて言い返した。

「怖がらなくとも大丈夫だよ。ジョシユつて態度はあんなだけど根はいい子だから。きちんと話しあつて、コールベルが自分の素直な気持ちを伝えれば、いい方に向かうんじゃないかな」

二口二口しながらそう言つたサイラスから、コールベルは視線を外して目を伏せた。居たまゝ逃げるよつて、机の上のマグカップを手に取つて口に運ぶ。ますますぬるくなつていたそれは、先ほどよりも随分と苦く感じられた。

数日後？？。

研究所のそのフロアは、一部分のみ灯りがついていた。

もう深夜といつてもいい時間である。ほとんどの所員はすでに帰つており、このフロアで残つてゐるのはジョシュとサイラスだけだつた。背中合わせで一人とも黙々と仕事をしている。静かだつた。紙をめくる音さえはつきりと聞こえるくらいである。

「ね、ジョシュ」

「ん……」

サイラスは沈黙を破つて呼びかけたが、机に向かつたままのジョシュから返つてきたのは、ほとんど声になつていなくての氣のない返事だつた。それでもサイラスは遠慮なく言葉を繋ぐ。

「どうしてゴールベルのことを避けているの？」

ジョシュの動きが止まつた。

「別に、そんなつもりは……」

「この前ゴールベルから話を聞いたときは半信半疑だつたけれど、さつき様子を見ていたら本当に避けてたよね。すごく素つ氣ない返事しかしないし、目を合わせようともしないし、態度も不自然でぎこちないし。あれはもつ氣のせいとかで「まかせないよ。彼女と何かあつたの？」

ジョシュは背を向けたまま、無言でうつむいて唇を噛んだ。

答えそうにない彼を見て、サイラスは質問を変える。

「彼女のこと、嫌いなわけじゃないよね？」

「……ああ」

少しの間をおいて、ようやくジョシュは低い声で返事をした。

「だつたらどうして？」

「先生には死んでも言わねえよ」

今度は不機嫌そうにぼそりと言つ。それが彼の精一杯の意思表示だつたのだろう。

「まあ、僕に言わなくともいいけど、ゴールベルのことはもつと考えてあげなよ。彼女は避けられている理由もわからなくて毎日不安

で仕方ないんだから」

「……俺は、彼女と顔を合わせる資格もない人間なんだよ」
サイラスはちらりと振り返った。どこか寂しげなジョシュの背中を、横目でじっと見つめる。

「潔癖すぎると生きるのがつらいよ」

「そう、かもな」

ジョシュは感情を抑えた声でぽつりと言つた。

サイラスは椅子の背もたれに体重を掛け、両手を上げて大きく伸びをする。

「自分はそれでいいかもしないけど、相手にもつらい思いをさせてしまうんじゃ、本末転倒じゃないかな」

「わかつてる……けど……」

ジョシュの言葉はそれきり途切れた。

しばらくして、再び紙をめくる音がフロアに響いた。

それから、一ヶ月半が過ぎた。

ユールベルの実習期間は今日で終わる。

もつとも、アカデミー卒業後??つまり数ヶ月後には、再びここで勤務することになつてないので、取り立てて感傷的な気持ちにはならなかつた。今日もいつものように与えられた仕事をこなしていくだけである。

ジョシュの態度は相変わらずだつた。

何か言つたそうにしていることもあつたが聞けなかつた。ユールベルの方からも何も言い出せなかつた。交わす言葉は仕事上での必要最低限のことだけである。二人の間にはぎこちない空気が流れ続けていた。

「じゃあまた。今度来るとときは正式なウチの所員ね」

勤務時間が終わると、アンナは人なつこい笑顔でユールベルを見

送る。コールベルはフロアの戸口で小さく頭を下げた。言葉には出来なかつたが、何かと良くしてくれた彼女には心から感謝していた。

フロアの中に視線を戻す。

ジョシュは自席に座つたままだつた。モニタをじつと凝視しているようだ。仕事に没頭しているのだろう。彼には声を掛けそびれたので、最後に一礼だけでもしたいと思ったが、彼がこちらに目を向けることはなかつた。諦めて扉を開け、静かにフロアを後にする。

研究所の建物を出ると、門のところで振り返つてその建物を仰ぎ見た。

これからここで上手くやつていけるのだろうか？？実習に来るときに感じた不安は未だに消えていない。むしろ大きくなつたくらいだ。目を細めて小さく溜息をつくと、重い気持ちのまま踵を返して歩き出そうとした。

「コールベル」

ドクン、と大きく心臓が跳ねる。

声だけでそれが誰であるかすぐにわかつた。だが、今までずっと避けていた彼が、なぜここに来たのかわからぬ。コールベルは息を止め、おそるおそる振り返る。

案の定、そこに立つていたのはジョシュだつた。

困惑したような、怯えたような、どこか苦しそうな、何ともいえない複雑な顔をしている。コールベルに声を掛けることを随分と迷つたのだろう。彼はぐぐりと唾を飲み込んでから、低く抑えた口調で切り出した。

「今まですまなかつた。その、避けるような態度をとつて……。おまえは何も悪くない。全部、俺の心の中の問題だ」

「ウソ……」

「嘘じやない」

思わず口をついて出たコールベルの言葉を、ジョシュは即座に否定する。それでもコールベルは信じることができなかつた。長い金の髪を揺らしながら首を横に振ると、眉をひそめてじつと睨むよう

に彼を見つめた。

「私、知っているんだから。ラグランジエの名前を使って研究所に入つた私を軽蔑しているんでしょう？ 嫌いなんでしょう？」

ジョシュは目を見開き、小さく息を呑んだ。

「おまえ、それをどこで……」

ゴールベルは小さく息をつくと、努めて冷静に言葉を紡ぐ。

「確かに私はあなたに嫌われても仕方のない人間だもの。ちゃんとわかつているわ。あなたのことを逆恨みなんてしない。だから、そんなウソをつかないで」

「ちょっと待て！ 違う、違うんだ！」

ジョシュは狼狽しながらも必死に主張する。

「確かに最初はそうだった。おまえの言うとおり、ラグランジエ家の人に間つてだけで楽して入つてきた嫌なやつだと頭にきてた。でもそれは最初だけで、おまえが頑張つてのをずっと見てきたし、十分に実力があることもわかつたし、今はもうそんなことはこれっぽちも思つていない」

彼はゴールベルを見つめてきつぱりと断言した。そのまっすぐな瞳からは嘘やごまかしは微塵も感じられなかつた。

ぐらり、と頭の中が揺らいだ。

信じたいという思い、信じられないという思い、その相反する気持ちがせめぎ合い、心が引き裂かれそうになる。どうすればいいのかわからない。潤んだ瞳を隠すようにつづむくと、感情を昂ぶらせて声を震わせる。

「じゃ……じゃあいつたい何なの？ どうこうことなの？ 納得いくように説明して！ 嫌いでもないのに避けるだなんて意味がわからぬ……つ！」

「だから、それは……それ、は……俺が……」

ジョシュは顔をしかめて額を押さえた。額中に苦惱を広げている。額には大粒の汗が噴き出していた。

「俺が、何……？」

「だから、その……えつと……」

問い詰められるとますますしどりむどりになり、消え入るようこの声が小さくなつていく。声だけではなく彼自身も背中を丸めて小さくなつっていた。

コールベルは僅かに目を細めた。

彼が何を言おうとしているのかわからなかつたが、嘘をつけるような人ではないのだということは十分すぎるほどに伝わってきた。自分と同じくらいに、いや、それ以上に不器用な人間なのだろう。

コールベルはジョシュとの間を詰めると、目を閉じてそつと寄りかかつた。

その体がビクリと震える。

「コールベル……？」

「嫌いじゃないのなら、もう避けないで……」

ジョシュの胸に額をつけたまま、コールベルは小さな声で囁くようになりだした。

「……わかつた」

ジョシュは静かにそう答えると、ゆっくりと右手を持ち上げ、少し迷った様子を見せながらも、そつとコールベルの背中に置いた。その触れるか触れないかの力加減が、コールベルにはとてもくすぐつたく感じられた。

「これで一件落着、かな？」

不意に後方から明るい声が聞こえた。コールベルとジョシュは同時にその方に振り向く。声の主を目にしたジョシュの眉間に、みるみるうちに深い皺が刻まれた。

「……センセー、ずっと見てたのかよ

「見るつもりはなくともこんなところじやね」

サイラスは両の手のひらを上に向かへ、軽く肩をすくめてとぼけたよつと言つた。

ここは研究所の入口の真正面である。確かに彼の言つとおり、研

究所に出入りする人間であれば嫌でも目に付いてしまうだろう。ジョシュは腕を組み、疲れたように溜息をついて話題を変える。

「それで、何しに来たんだよ」

「コールベルのお見送りだよ」

サイラスは屈託なく答えると、コールベルに視線を移して微笑んだ。

「よかつたね、ジョシュと仲直りできて」

コールベルは返答に迷い、助けを求めるようにジョシュの腕を掴んで見上げた。ジョシュは困惑したような表情で少し頬を染め、僅かに目を逸らせると、ぶっきらぼうにぼそりと呟く。

「別に喧嘩してたわけじゃない」

「あ、そうだったね。ジョシュが一人で勝手に迷走してたんだったね」

「サイラス、おまえ……」

軽く笑ってからかうサイラスを、ジョシュは顔を赤らめたまま横目で睨んだ。

「じゃあな」

門の前で軽く右手を上げるジョシュとサイラスに、コールベルは小さく頭を下げるが、背を向けて微かな風に乗るようにゆっくりと歩き出した。

白いワンピースがふわりと風をはらむ。

研究所での実習期間には様々なことがあった。その多くがつらいことだったような気がする。しかし、それだけではない。助けてもらつたことも、相談にのつてもらつたことも、優しくしてもらつたこともあった。そして、どうにもならないと諦めていたジョシュとのわだかまりが消えたことが、何よりもコールベルの気持ちを軽くしていた。

多分、悪いことばかりではない??。

燃えるような朱い空を見上げ、胸一杯に息を吸い込むと、無意識

にほんの少しだけ口もとを緩める。心中にはまだ不安が色濃く残つていたが、それでも、これからやつていけるかもしれないというひとかけらの希望だけは見出せた気がしていた。

「今度の休日?」

食堂の窓際で昼食をとっていたジョシュは、フォークを持つ手を止め、向かいに座るサイラスに聞き返した。

「うん、何か予定ある?」

「別にない……けど……」

何となくサラダをつつきながら歯切れ悪く答える。今までサイラスにこんなことを尋ねられたことはなく、いつたい何なんだろうと訝しく思う。そんな心情を察したように、サイラスはにっこりと微笑んで理由を述べる。

「ユールベルがね、お礼をしたいって言つてるんだよ

「お礼つて、何の?」

「ほら、レイモンドの……」

「ああ……」

濁された言葉を察して、ジョシュは低い声で頷いた。彼女にひとつは思い出したくもない出来事だらう。それをわざわざ気にして、律儀に礼などしなくともいいのにと思つ。

「夕方頃に研究所の前で待ち合わせでいいかな

「俺はいつでもいいよ」

笑顔で尋ねるサイラスに、ジョシュは感情を見せずに素つ気なく答える。

ユールベルはアカデミーにあるサイラスの部屋を何度も訪れているようだ。研究所は関係者以外は原則的に立ち入り禁止であり、今はサイラスを通してしか連絡が取れないことはわかっている。だが、彼女がサイラスのところに行く理由はそれだけではないだらう。

「時間はまた連絡するよ

「わかった」

ジョシュはサラダに皿を落としたまま頬杖をつき、短く返事をし

た。

「早すぎたな……」

ジョシュは腕時計を見ながら呟いた。待ち合わせの時間まではまだ30分以上ある。だが、遅れるよりはいいだらうと思いつつ、塀に寄り掛かつて腕を組んだ。

コールベルに対する罪悪感はまだ消えたわけではない。それでも、彼女を避けることは彼女を傷つけるだけだとわかつた。いや、それは単なる言い訳だらう。彼女との繋がりを断ち切りたくないと自身が願つてゐることは自覚していた。

小さく息を吸い込んで、優しい色の青空を見上げる。

その穏やかな空とは対照的に、ジョシュの気持ちは落ち着かずそわそわしていた。コールベルの実習終了の日以来、彼女とは一度も会つていない。約一ヶ月ぶりである。しかも、休日待ち合わせをして会つことは初めてなのだ。さらに「お礼」の内容も気になつていた。彼女の考へてゐることはわかりづらいのでなおさらである。いつたいどこへ行くつもりなのだろうか、そして、何をしてくれるのだろうか？？。

「ジョシュ、早いね」

「うわあっ！」

ぽんやり考へてゐるところに、突然横から声を掛けられ、ジョシュは大きな声をあげて飛び退いた。そのあまりの驚きようこ、声を掛けたサイラスの方も目を丸くして驚く。

「ごめん、そんなにビックリするなんて思わなくて」

「……何しに来たんだよ、先生」

ジョシュは訝しげに横目でじとじと睨んだ。まさか自分をからかうためだけにわざわざ来たりはしないだらう。たまたま通りかかつたか、それとも休日出勤か何かだらうと思つ。

「何しにって、待ち合わせだから来たんだけど？」

「…………？？」

一人の話は噛み合つていなかつた。互いに不思議そうに顔を見合はせている。しかし、サイラスが何かをひらめいたらしく、急にパツと顔を明るくして言つ。

「もしかして、ジョシュ、自分だけって思つてた？ 僕もジョシュと一緒に誘われてるんだよ。今日はここで3人で待ち合わせ。言わなかつたっけ？」

「そつ……そんなこと聞いてないっ！」

ジョシュは顔を真つ赤にして言い返した。サイラスも一緒になどとは一言も聞いていない。だが、ジョシュ一人だとも言われていない。考えてみれば、確かにサイラスもコールベルを助けたわけで、お礼を受けるのは当然のことである。

「ごめんね、変に期待を持たせちゃつたみたいで」

サイラスは軽く笑いながら言つ。揶揄しているわけではなさそうだが、ジョシュとしては図星を指されて居たたまれない気持ちになり、さらに顔を赤くして目を泳がせた。

「別に……そういうわけじゃない……」

「喧嘩、しているの？」

「うわあつ！」

背後から声を掛けってきたのはコールベルだつた。ジョシュは全身の毛が逆立つほど驚いた。バクバク脈打つ心臓を押さえながら、不思議そうにしているコールベルを狼狽えながら見つめる。

「別に喧嘩つてほどじやないよ。ね、ジョシュ」

「あ、ああ……」

サイラスの助け船に感謝しながら、ジョシュは曖昧に頷いた。鼓動はまだ早鐘のように打つている。それが彼女に伝わらないよう祈りながら、暴れる心臓を静めようと深く呼吸をした。

「これからどこへ行くの？ そろそろ教えてくれないかな？」

サイラスは前を歩くコールベルに尋ねた。サイラスもジョシュも、まだ行き先すら知られていない。サイラスは今日にいたるまで何

度か尋ねたが、コールベルは内緒だと言つて教えてくれなかつたらしい。だが今度はあつさりと答える。

「私の家よ」

ジョシュの眉がピクリと動いた。

彼女のフルネームはコールベル＝アンネ＝ラグランジエである。つまり？？。

「コールベルの家つてことはラグランジエ家……だよね」

「まあ、そういうことだよな」

サイラスも同じことを考えていたようで、声をひそめてジョシュに確認してきた。

「なんか緊張してきたなあ」

その言葉とは裏腹に、サイラスはどことなく嬉しそうだつた。魔導の研究をしている彼が、その名家であるラグランジエ家に憧れの気持ちを持つことは不思議ではない。行つたからといって特に何かがあるわけではないだろうが、それでもミーハー心くらいは満たされるだろう。普通なら一生かかつてもこんな機会はあるかどうかわからないのだ。

「ジョシュ、気に入らないからつて暴れたりしないでね」

「……そこまで子供じゃない」

確かにラグランジエ家は嫌いだし、自分に大人げない部分があるのも事実だが、いくら何でも招待されておきながら理由もなく突っかかつたりはしない、と心の中で反論する。

「ラグランジエ家つてわけじゃないわ」

二人の勝手な誤解に黙つていられなくなつたのか、前を歩いていたユールベルが、顔だけちらりと振り向けて言つた。そして、感情の見えない声で付言する。

「私、親とは一緒に住んでいないから」

それを聞いたジョシュの表情は途端に険しくなつた。

親と一緒に住んでいないということは、おやぢへ一人暮らしなのだろう。

だとしたら？？。

脳裏には資料室でのことが鮮明によみがえった。ジョシュが様子を見に行かなかったら、誰にも気づかることなくあのままレイモンドに襲われていたかもしない。そんなことがあったというのに？？。

ジョシュはサイラスの腕を引っ張つて歩みを遅らせ、コールベルから少し距離をとると、今度は彼女に聞こえないうつ声をひそめて耳打ちする。

「一人暮らしの家に男を入れるなんて軽率すぎないか？」

「でも僕たち一人つてわけじゃないし」

「男が一人もいたら余計に危険だろ？」「

「僕たちのことは信用してくれてるんだよ」

サイラスもひそひそと小声で答える。しかし、ジョシュは納得しなかった。サイラスの言つことは間違つていないとと思うが、そういうことではなく、ジョシュとしては危機意識の話をしているのだ。

「簡単に男を信用すると痛い目を見るだ」

顔をしかめて舌打ちをして、ジョシュは苦々しく言つ。

しかし、サイラスはその隣でにこにこと微笑んでいた。

「……何だよ」

「ジョシュってばすっかり保護者だね」

「……危なつかしいんだよ、あいつは」

ジョシュはぶつきらぼうに答えると、前髪を搔き上げて顔を上げた。少し先を歩くコールベルの金髪が、緩やかなウェーブを描いて風に揺れている。そして、そこに結ばれた白い包帯も、同じように軽やかに、そしてどこか頼りなく揺れていた。

コールベルが入つていったのは、まだ真新しいマンションだった。建物自体はそれほど大きくないが、落ち着いた上品な造りで、そこはかとなく高級感が漂つている。彼女はエントランスを通り抜け、階段を上ると、突き当たりの扉を重たそうに開いた。

「あれ？ 早かつたね」

「迎えに行つただけだから」

中からコールベルに声を掛けたのは、上半身裸で首にタオルを掛けた男だった。鮮やかな金の髪からは水滴が滴つている。どうやら風呂上がりのようだ。彼はコールベルの後ろにいたジョシュとサイラスにちらりと目を向ける。

「その人たち？」

「ええ」

確認するような短い質問に、コールベルは中に入りながら肯定の答えを返した。それを聞いた彼は、タオルで前髪を搔き上げ、眩いばかりの笑顔を二人に向ける。

「いらっしゃい、今日はゆっくりしていって」

そんな歓迎の言葉を口にすると、スタスタと部屋の中へと入つていった。

「……えっと、誰？」

果然として固まっていたサイラスは、ようやく口を開き、男の消えていった方を指さしながらコールベルに尋ねた。それはジョシュが聞きたかったことでもある。まさかとは思つが？？。

「弟のアンソニーよ」

コールベルの素つ気ない答えを聞いて、ジョシュの全身からびつと気が抜けた。そして、自分の先走つた勝手な勘違いに、思わず苦笑いを浮かべた。

「お茶を入れてくるから待つていて」

コールベルはそう言い残して台所へと消えていった。

居間のソファにはジョシュとサイラスが並んで座り、ローテーブルを挟んだ向かいにアンソニーが座つている。先ほどは薄暗がりでよくわからなかつたが、明るいところであらためて見てみると、身長はジョシュと変わらないくらいだが、その顔にはまだ少し幼さが残つていた。しかし、鮮やかな青の瞳はそれとは不釣り合いに鋭い。

ジョシュは何が心を見透かされているようで落ち着かなかった。

ふと、アンソニーは不敵な笑みを浮かべて言つ。

「下心満載で来たのに、弟がいてガツカリつてところ?」

「べつ、別にそんな……ここに来ることも知らなかつたんだ!」

ジョシュは顔を真つ赤にして狼狽し、じぶしを握りしめながら反論した。言つてることに嘘はないのに、その必死さのせいで、かえつて言い訳くさくなつてしまつた。困惑ぎみに奥歯を噛みしめてうつむく。そんなジョシュを見て、アンソニーはくすくすと笑い出した。

「わかりやすいね、おにいさん」

「…………」

「冴えなくて頼りない感じだけど、悪い人じやないみたいだし、僕としてはあえて反対はしないよ。頑張つてみたらいいんじやない?」

「? ? このマセガキ……！」

喉元まで出かかったその言葉を、ジョシュはぐつと飲み込んだ。この無性に反発したくなる感覚は、以前にも何度も味わつた覚えがあつた。それは、確か仕事のとき? ?。

「あつ、君、どこか見た感じだと思つたら、サイファさんに似ているんだ。顔もそうだけど、雰囲気も近いものがあるね」

「本当? そうだつたら嬉しいんだけど」

サイラスの言葉に、アンソニーはどこか誇らしげに顔をほこりほこせゐる。それから? ?。

ジョシュは納得した。人目を引くような端整で華やかな顔立ちに、余裕を見せつけるような態度、相手を軽くいなすような口調。どれも自分の苦手なあの男にそつくりである。だから無意識のうちに反発したくなるのだろう。

そのとき、台所からゴールベルが戻ってきた。紅茶をのせたトレイをローテーブルに置くと、不機嫌にしていたジョシュを見上げて心配そうに尋ねる。

「アンソニーが何か失礼なこと言つたの?」

「いや、別にそういうわけじゃ……」

「普通に雑談していただけだよ。ね、おにいさん」

言葉に詰まつたジョシュの代わりに、アンソニーが人なつこい笑顔で答えた。彼がどういうつもりかはわからないが、会話の内容を知られなかつたジョシュにとっては、そのごまかしはありがたいことだつた。

アンソニーはすつと立ち上がると、腰に手を当てて背筋を伸ばす。「じゃあ、そろそろ僕は準備にかかるよ」

「ええ、お願ひ」

ゴールベルは紅茶を配りながら言つた。

「準備?」

サイラスが口に出したその言葉は、そのままジョシュの疑問でもあつた。一人そろつて不思議そつな視線を投げかけると、アンソニーは軽くさらりと答える。

「ゴー駆走を作るんだよ」

「おまえが?」

今度はジョシュが聞き返した。

「今日おにいさんたちを呼ばうって言い出したのは、実は姉さんじやなくて僕なんだよね。姉さんが襲われかけていたところを助けてくれたつて聞いたから、そのお礼をしようと思つてさ」

アンソニーは胸に手を当てて丁寧に答えながら、爽やかな笑顔を見せた。

「いやー、これはなかなか本格的だね」

出された料理を次々と口に運びながら、サイラスは感嘆の声を上げた。なぜか少し悔しい気持ちはあるが、ジョシュもそれには同意せざるをえなかつた。正直、弟が作ると聞いたときは、食べられるものが出てくるのか心配したが、目の前に並んでいる料理は、ちょっとした高級レストランで出てきそうな感じられた盛り付けがなさ

れている。そして、料理の正確な名前はわからないが、肉料理もスープもパンも、どれも文句なしに美味しい。

「喜んでもらえて良かった」

アンソニーはきれいな顔を無邪気にほほえませた。その隣で黙々とナイフを動かしているコールベルを、ジョシュはちらりと盗み見る。

彼女についてはほとんど何も知らない。

これまで、仕事についての必要最低限のことしか話をしたことなかった。

気になることはたくさんある。目の包帯のこと、家族のこと、親元を離れている理由、これまでどんな生き方をしてきたのか？？今日、ここへ来て初めてその一端に触れられた気がするが、そのことでなおさら知りたいと思う気持ちは大きくなつた。だからといって、まだ親しくもない自分が、何の脈絡もなく尋ねることなどできない。「ねえ、おにいさん。姉さんに見とれてないで、冷めないうちに食べてよ」

「……見とれてなんかない」

ジョシュは無愛想に答えると、視線を落として再び黙々と食べ始めた。コールベルがどんな反応をしていたのか気になつたが、何かに頭が固定されてしまつたかのようだ、どうしても顔を向けることができなかつた。

階の食事が終わると、コールベルはすぐに台所に向かつた。コーヒーの豆を挽いているようだ。香ばしい芳醇な香りが、ジョシュたちのいる居間にも漂つてきている。

「姉さん、このところ毎日コーヒー淹れる練習をしてたんだ。不器用だから失敗ばかり続いてたけど、これだけは自分でやるつて頑張つてたよ。あ、今はちゃんと美味しく淹れられるよになつたから安心して」

アンソニーの話を聞いて、サイラスはくすつと笑つた。

「コールベル、不器用なんだ」

「魔導は器用にこなすんだけど、少なくとも家事はからきし駄目だね。だから、家のことはだいたい僕がやつてるんだ。姉さんと結婚すると大変だと思つよ?」

アンソニーは意味ありげな視線をジョシュに流しながら言つ。

「……何で俺に言つんだよ」

完全にからかわれているとジョシュは思つた。

それがわかつてゐるのかいないのか、サイラスはさうじ話を弾ませる。

「ジョシュはこう見えても結構マメなんだよ。自炊もしてゐて」

「へえ、なら安心だね」

「あのなあ……！」

ジョシュは顔を紅潮させてローテーブルに手をついた。そのとき

？？。

「コーヒー……」

人数分のコーヒーを持ってきたコールベルが、ジョシュの背後でぽつりと咳く。

ジョシュの心臓は飛び跳ねた。

今日はこんなことばかりである。彼女がどこから話を聞いていたのか気になつたが、尋ねては藪蛇になるかもしれないとあえて口をつぐんだ。なぜ自分がアンソニーの標的にされているのかわからぬが、これでは生きた心地がしない。

気持ちを落ち着けるために、彼女が持つてきたコーヒーを口に運ぶ。

期待していなかつたわけではないが、その美味しさには少しばかり驚いた。随分と良い豆を使つてゐるようだ。挽き立てといつものもあるだろつ。もちろん、何より彼女の淹れ方が良かつたに違ひない。ジョシュはちらりと彼女に目を向けた。彼女はなぜかサイラスの隣に座り、コーヒーに口をつける彼を、じつと不安そうに覗き込んでいる。

「先生、美味しい？」

「美味しいよ」

サイラスはこいつにして答えた。なおもコールベルは食い下がる。

「先生がいつも飲んでいるのと比べてどっちが美味しい？」
「うーん、どっちもそれ美味しいかな」

「そう……」

その会話を聞いて、ジョシュはピンと来た。おそらくコールベルもサイラスの不味いコーヒーを飲ませたのだろう。だからこれほど必死になつて美味しいコーヒーを飲ませようとしたのだ。

それにも？？。

ジョシュは呆れた眼差しをサイラスに送る。

普通はお世辞でもコールベルの方が美味しいと言つところだろう。というか、実際、コールベルの方が比べ物にならないくらい美味しい。劣化したインスタントと比較すること自体が失礼である。もつとも、彼はその劣化したインスタントを本気で美味しいと思つてゐようが？？。彼に悪気がないことはわかつてゐるし、そういうずれたところも憎めないのだが、このときばかりは本気で何とかならないものかと思つた。

「姉さん、ちょっと」

ふとアンソニーはそう言つと、隣のコールベルに手を伸ばし、緩んでいたらしい後頭部の包帯を手際よく結び直した。その様子を眺めながら、サイラスは何気ない調子で尋ねる。

「そういえばずっと包帯しているね。ものもらいか何か？」

「…………」

コールベルとアンソニーの動きが止まつた。表情は僅かに強張つているように見える。その変化にはさすがのサイラスも気づいたようで、戸惑いを覗かせながら、控えめにおそるおそる尋ねる。

「えつと、もしかして聞いていいちゃいけなかつた？」

「いいの、別に隠しているわけじゃないから」

「コールベルは小さな声でそう言つと、浅く呼吸をしてから続ける。

「右目、見えなくて……それに、田のまわりにひどい火傷の跡が残つてゐる」

端的な説明だが、その内容は重い。田が見えないだけでも大変なことなのに、顔に火傷の後など、女の子にとつてはどれほどつらいことかと、ジョシュは想像するだけでどうしようもなく気持ちが重くなつた。掛ける言葉などとも見つからない。

しかし、サイラスは優しく表情を緩めて口を開く。

「ごめんね、つらい」と言わせちゃつて」

「訊いてくれて良かつた……」

コールベルは下を向き、ぽつりとそんな言葉を落とした。

それが本心なのかどうか、ジョシュにはわからなかつた。そんなことを訊けるわけもない。少しだけ、サイラスの無神経さがつらやましいと思つた。

「じゃあ、そういうことでも、気を取り直して楽しくやれりよー」

アンソニーは明るくそう言つと、みんなに話を振つて会話を盛り上げていく。会話の中心にいたのは常にアンソニーだつた。コールベルは訊かれたことにぽつりぽつりと答えるだけである。それでも、ジョシュにとつては、これまで研究所で交わしたどの会話よりも意味のあるものだつた。

外がすっかり暗くなつたころ、ジョシュとサイラスはそろそろ帰ることにした。

コールベルとアンソニーは一人を玄関まで見送る。コールベルは研究所まで送ると言つてくれたが、それは断つた。道はわかつてゐるし迷うことはないだろ。少し歩けば知つた場所に出るのだ。

「じゃあまたね、コールベル」

「今日はありがとう、来てくれて」

「ゴールベルは淡々と礼を述べる。

感情の見えない彼女を眺めながら、ジョシュは今日のことを思い返して少し不安になつた。不快な思いをしなかつただろうか、自分たちを呼んだことを後悔していないだろうか、と？？。

「姉さん」

アンソニーはゴールベルの背後から声を掛けると、身を屈め、口もとを隠しながら彼女に何かを耳打ちする。その視線はちらりとジョシュに向けられた。あからさまに何らかの含みを持った意味ありげなものである。

？？まさか！

ジョシュの頭にカツと血が上った。

「おまえ何を言つた？！」

必死の勢いでアンソニーを追及するものの、彼はにっこりと微笑んだままで何も答えようとはしない。間違いない。アンソニーが言ったのは自分のことなのだ？？。慌ててゴールベルに振り向くと、みつともないくらいにあたふたと両手を動かしながら言つ。

「ゴールベル、いま聞いたこと、聞かなかつたことにしてくれ！」
ゴールベルは無表情でジョシュを見つめたまま、小さな声でぼそりと言つ。

「あしたの献立の話なんだけど……」

「……え？」

ジョシュは動きを止めたまま、ヒクリと顔を引きつらせた。

夜の帷が降りた道を、一人は並んで歩く。静かだった。ここに来るとときは、付近の住民らしき人々とよく擦れ違つたが、さすがに夜ともなるとチラホラとしか歩いていない。

サイラスは星空を仰いでにっこりと微笑んだ。

「お姉さん思いのいい弟さんだったね」

「どこが！」

さんざん彼にからかわれたジョシュは、思わず感情的にそう返し

たものの、姉思いという部分に關しては同意見だった。コールベルも彼を頼りにしているようだ。そうでなければ、レイモンドに襲われかけたことなど話したりはしないだろう。

「あいつ、身近に頼れる人間がいたんだな。良かつたよ」

「それが自分でなくて、本当は少し残念だつたりする？」

サイラスの冗談めかしたような言葉が、ジョシュの胸にズクリと突き刺さる。

「バカ言つなよ」

少し歩調を早めながら、ジョシュは平静を装つてはぐらかすように答えた。

それが彼の精一杯だった。

「あまり変なことを言わないで」

コールベルは玄関の鍵をかけながら、背後のアンソニーに少し怒つたようにそう言った。先ほどアンソニーが耳打ちしたことは献立の話などではなかつた。咄嗟にコールベルがそう取り繕つたのである。

「姉さん、もしかして先生の方が好きだつた？」

「あの人たちは、そういうのじゃない」

「僕はどっちでもいいと思つていてるよ」

コールベルの話を聞いているのかいないのか、アンソニーは軽く笑いながら勝手なことを言つ。どこまで本氣で言つてているのか、コールベルにはわからなかつた。ドアノブに掛けた手にギュッと力を込め、うつむいたまま小さな口を開く。

「アンソニー……私のこと、邪魔なの？」

その仄暗い声に、アンソニーはハツと息を呑んだ。

「ごめん、そんなつもりじゃなかつた」

低く真面目な声でそう言つと、後ろからコールベルの細い身体を包み込むように抱きしめる。その動作は、まるで壊れ物を扱うかのよくな優しく慎重なものだつた。

「「」めんなさい……」

ゴールベルは涙まじりの掠れた声を落とした。そして、頼りない肩を震わせると、首が折れそうなほどに深くつづいた。

「先生、まだテストの採点、山のようになつてますよ」
鞄を持つて当たり前のように帰るうとしていたサイラスは、アンジエリカに見咎められると、ギクリと足を止めて振り返り、きまり悪そうに笑いながら頭をかいた。

「ごめん、今日は研究所に行きたい気分なんだよね」

「じゃあ、気分を切り替えてください」

アンジエリカは冷ややかに言い放つた。何かにつけて研究所に逃げ込もうとするサイラスに、彼女は次第に強気な態度を見せるようになつていて。助手としての使命感がそうさせているだらう。それでもサイラスにはあまり効果はなかつた。笑顔のまま、のんびりとした口調で、のらりくらりと反論する。

「別に今日中にやらなくちゃいけないものでもないよ」

「でも、あしたはあしたで課題の採点がありますから」

「そうだね、じゃああしたは今日の分まで頑張るよ」

「もう……」

アンジエリカは口をとがらせて膨れ面を見せた。

たいてい彼女の方が折れることになる。ジークのよう正面きつて言い返してくる相手には強いが、サイラスのように微妙に論点をずらしてかわす相手には弱いのだ。もつとも今日の場合は、あまり切羽詰まつた状況でないため、しつこく聞いてがらなかつたというのもあるだらう。

とりあえず彼女の優しさに感謝しつつ、サイラスは一口一口しながら手を振つて、アカデミーの狭く散らかつた自室をあとにした。

特に何かがあつたわけでなくとも、気分が乗らない日というのはある。

そういうとき、サイラスはなるべく無理をせず、可能であればそ

これから離れるようにしている。つまりは気分転換である。その方が効率よく進められると思うのだが、アンジェリカの賛同はなかなか得られなかつた。気分転換自体は否定しないが、その気分転換が多すぎると言つのだ。確かにそれはもっともだと納得するものの、あまり反省はしておらず、怒られながらもこいつやつて逃避を繰り返しているのである。

日は傾きつつあるが、まだ空は青く、空気も暖かいままだつた。アカデミーを出たサイラスは、大きく深呼吸をして凝り固まつた背筋を伸ばすと、研究所に向かつて歩き出した。教師としての仕事や雑務が多いため、日が落ちてから研究所に向かうことが多く、明るいうちにこの道を歩けるのは、今日のように仕事を放り出してきたときくらいである。残してきたアンジェリカには悪いことをしたと思いつつも、この開放感に幸せを感じていた。

「先生！」

背後から弾んだ声が聞こえて振り返ると、金髪の少年が人なつこい笑顔を浮かべて駆け寄つてきた。その後ろから、小柄な少女もついてきている。

「やあ、アンソニー」

サイラスは笑顔で応じた。少女人方に見覚えはなかつたが、少年がユールベルの弟であることはすぐにわかつた。サイラスは人の顔を覚えるのは得意な方ではないが、その人目を引く容姿のせいか、一度会つただけにもかかわらず強く印象に残つていた。

「今から研究所へ行くの？」

「そう、君は学校帰り？」

「そんなところ。ちょっと遠回りして寄り道してたけど」

身長はサイラスと変わらないくらいだが、屈託なく答える表情は年相応に子供であり、サイラスは少しほつとしていた。ユールベルの家で見たときの彼はやけに大人びていて、時折、ふと深く仄暗い何かをその瞳に覗かせることがあり、何となく気になつっていたのだ。

アンソニーは隣の少女の肩を引き寄せて続ける。

「紹介するよ、こつちは僕の彼女のカナ＝ゲインズブル、そしてこちらが魔導科学技術研究所の研究員で、アカデミーの教師も兼務しているサイラス＝フェレット先生。姉さんがお世話になつてゐるんだ」

「こんにちは

「初めまして」

緩いウェーブを描いた茶髪をふわりと弾ませ、カナは膝を折つて可愛らしく挨拶をした。見ているだけで幸せが伝わつてくるかのような笑顔を見せてゐる。マシュマロのように甘く柔らかい雰囲気の子だとサイラスは思つた。

「あのわ……先生、ちょっと時間ある？」

「いいけど、どうしたの？」

躊躇いがちに尋ねてきたアンソニーを見て、サイラスは不思議そうに尋ね返す。しかし、彼はそれには答えず、隣のカナに申し訳なさそうな顔を見せながら、その顔の前で左手を立てて片眉をひそめた。

「ごめんカナ、今日は先に帰つてくれる？」

「えつ？ あ……うん、わかつたわ」

突然のことに、彼女は一瞬だけ戸惑いの表情を浮かべたが、すぐにエメラルドの瞳をくりつとさせて素直に頷いた。アンソニーの腕からぴょんと飛び出すと、短いスカートをひらめかせながら振り返り、屈託のない笑顔を見せる。

「じゃあまたあしたね！ 先生もよつなう。今度はゆつくりお話をしたいな」

会つたばかりのサイラスにも気後れすることなく、彼女は人なっこく挨拶をした。サイラスもつられるように笑顔になつて、丁寧に挨拶を返した。

サイラスとアンソニーは、カナがその先の角を曲がるまで、軽く

手を振つて見送つた。

「可愛い子だね。同級生？」

「それは見えないつてよく言われるけどね」

アンソニーは肩を竦めた。確かに、サイラスも彼の年齢を知らなければ、一人が同級生とは思わなかつただろう。アンソニーは年齢のわりに背が高く大人びていて、カナは年齢のわりに小柄で幼い顔立ちをしているのだ。並んだ二人はまるで大人と子供のように見えた。

「それで、どうしたの？ 何か相談とか？」

「相談つていうか……えつと……もしかして、先生、本当はあまり時間ないの？」

急かしたつもりはなかつたのだが、アンソニーはそう感じたようで、不安そうに小首を傾げてそんなことを尋ねてきた。大人びた外見とは不釣り合いな子供っぽい仕草に、サイラスは思わず笑みを漏らす。

「そんなことないよ。じゃあ、歩きながらゆっくり話そうか」

アンソニーはほつと安堵の息をついて頷いた。

サイラスは特に当てもなく、無意識に研究所の方に足を進めた。通り慣れた道をのんびりと歩いていく。頬を掠める暖かい風が心地いい。

「先生つて独身だよね？」

不意に隣のアンソニーが口を切つた。思いもしなかつた質問に、サイラスは目を見開いて驚いたが、すぐに穏やかな表情に戻つて答える。

「そうだよ」

「どうして結婚しないの？」

「相手がないと出来ないことだからね」

サイラスは少年時代からずっと勉強と研究に没頭してきた。それ以外の優先順位は低い。こと恋愛や結婚に関しては、ほとんど興味がなかつたといつても過言ではない。彼にとつての幸せは魔導の研

究だけだった。アカデミーの教師も本当は気が進まなかつたのだが、次世代の研究者を育てるのも大切な仕事だとサイファに説得され、4年だけの約束で仕方なく受けたのだった。

「僕はいずれカナと結婚したいと思つてるんだ」

空を見上げて息を吸い込み、アンソニーはぼつりと言つた。その表情は、夢見るようなものではなく、どこか憂いを含んだものだつた。何か障壁となることでもあるのだろうか、とサイラスは思ったが、それを尋ねていいものかどうかわからなかつた。

「随分と気が早いんだね」

「いろいろ考へないといけないことが多いです」

当たり障りのない探りに、彼は軽く苦笑してこまかすように答えた。

反射的にサイラスは追及する。

「それって進路のこと？ 家のこと？」

「家のこととはあまり関係ないよ。僕はラグラソ・家に執着していないしね。もつとも、家を出るには当主の許しがいるけど、サイフアさんなら、僕が出ていくと言つても許してくれると思う」

淡々と答える彼の端整な横顔は、とても子供とは思えないものだつた。

「君もお姉さんみたいにアカデミーに行くの？」

「まだわからぬけれど、できれば進学するよりも早く働きたい。アンジエリカが14で働いてるんだから、僕も働けるところがあるんじゃないかと思って。それでさ……サイファさんには相談するつもりだけど、先生も何かいい伝手があつたら紹介してくれないかな」

アンソニーは真剣に言つた。もしかしたらこのことを頼むために自分を誘つたのかもしれない、とサイラスは思う。しかし、アカデミー首席卒業のアンジエリカでさえ自分の助手程度の仕事しかしていなことを考へると、たいした学歴を持たない彼が働けるところはほとんどないような気がした。

「勉強するのも悪くないよ？」

サイラスがやんわりと言つと、彼はふつと小さく笑みを漏らした。

「でも、姉さんだけに働かせるのは申し訳ないからさ」

「君はまだ子供なんだから甘えていいんじゃないかな」

「姉さんが安心して頼れるようなしつかりした人だったら、僕だって遠慮なく甘えていたと思うけどね。実際は、むしろ僕の方が支えないといけないくらいだからさ」

その口調は普段と変わらないように聞こえたが、瞳には仄暗い陰が潜んでいるように見えた。誰にも甘えられないつらさ、姉を支えねばならない大変さ、というだけではない何かがそこにあるように感じたが、深く立ち入ってはならない気がして、サイラスは「そつか」と軽い相槌だけを打つて口を結んだ。

サイラスもアンソニーも無言のまま足を進めた。

アカデミーに近いこともあって、若者が多いその道は、適度に活気があり穏やかな喧噪が広がっていた。そんな中、二人の間の空気だけが重く淀んでいた。

不意にアンソニーは空を仰いだ。

「姉さんさ、子供の頃に両親から酷い仕打ちを受けていたんだ」

突然の告白に、サイラスはきょとんとした。しかし、納得のできない話ではなかった。彼らが両親と一緒に住んでいない理由、そして、彼女の持つている陰のある雰囲気は、そういう過去が原因だったのだと合点がいった。

「親元を離れているのはそのせいだったんだね」

「そう、今はサイフアさんが僕たちの親代わり」

アンソニーは静かに答えると、斜め下に視線を落として続ける。

「そんな子供時代のせいかな、姉さんは今でもまだ不安定で脆くてさ、他人との接し方もよくわからないみたい。姉さん自身もこのままじゃいけないって頑張ってるんだけど、ときどき無理をして壊れそうになつていて……」

そこで言葉が途切れた。

彼はゆっくりと足を止めると、難しい顔でうつむいて息をついた。そして、ズボンのポケットに両手を突っ込み、自分の足元を見つめたままぽつりと言つ。

「そんな姉さんを放つておけないんだよね」

横から吹いた風に、鮮やかな金の髪がさらさらとなびいた。

「強くなれつて突き放すのは簡単だけど、入つてそんなにすぐに強くなれるものじゃないでしょう？」多分、姉さん、今はまだ誰か縛れる人がそばにいないとダメなんだ。自分のことを無条件に愛してくれる人が……その実感をくれる人が……」

彼の表情は次第に険しく曇つていった。

しかし、急にパッと顔を上げると、おどけるように肩を竦めながら付言する。

「でも姉さんに近づいてくる男つてろくなのがいなくてさ」

確かに、とサイラスも苦笑する。過去のことは知らないが、研究所に来て早々、レイモンドに目をつけられ酷い目に遭わされていたことを思い出していた。ラグラッシュの名のせいで、こういう輩が近づいてくることも多いのだろう。

「だから……今は、僕がその役目を負つてているんだ」

静かに落とされた言葉。

その意味がよくわからず、サイラスは聞き返すように怪訝な表情を浮かべた。それを目にしたアンソニーは、自分が責められたと勘違いしたのか、自嘲の笑みをその薄い唇にのせる。

「姉さんに頼まれたわけじゃない。僕が姉さんを救いたいって思つたから、僕の意思でそうしてるんだ。いけないことだつてわかつてる……でも、それで姉さんが少しでも救われるならと思つて……」

彼の言つていることが何となくわかつてきた。体は大人と変わらなくとも、心はまだ大人になりきれていない。そんな彼が、精一杯に悩み、苦しみ、出した答えだったのだろう。正しいこととはいえないが、彼を責める気にはなれなかつた。

「だけど、いつまでもつてわけにはいかない。ずっと今のままじゃ

いけないってことはわかってる。でも、姉さんを一人には出来ないし……見捨てられることをすぐ怖れてるから……あつ、別に邪魔だと思つてゐわけじゃないよー」

アンソニーは慌てて弁明すると、小さく息をつき、再び表情を沈ませて目を伏せた。

「姉さんはことは好きだよ。だからいつかは姉さんも本当に幸せになつてほしいし、僕も僕自身の幸せを手に入れたい。あまり力ナも裏切りたくないし……って勝手だよね。図々しいよね。無茶苦茶だよね」

「何となくわかるよ」

サイラスは優しくそう言つて、額を押さえてうつむくアンソニーの頭にそつと手をのせた。その瞬間、何かがブツリと途切れたように、鮮やかな青い瞳にじわりと涙が浮かんだ。

「「めん、先生……僕も結構まいつてたのかな

きまり悪そにはにかみながら、溢れそうになつた涙を拭う。通り過ぎる人たちが、ちらちらと不思議そうにこちらの方を窺つていた。子供とはいえない外見で、なおかつ人目を引く容姿のアンソニーが、このような往来で涙を浮かべていては、注目を浴びるのも当然のことだろう。

「今日のことは誰にも言わないでくれる？ 姉さんにも、ジョシュにも」

「わかつてゐよ」

サイラスは落ち着いた声で答える。もともと頼まれなくても誰にも言つつもりはなかつた。わざわざ口外する理由などない。ただ、深い意味はなかつたのかもしれないが、アンソニーからジョシュの名前が出たことに少し驚いていた。

「それと、僕はいいけど、姉さんのことだけは……軽蔑しないでほしい……」

アンソニーは張り詰めた表情で言葉を絞り出す。秘めておかねばならないはずのことを、許可なく勝手に話してしまったことに責任

を感じて居るのだろう。もしかすると後悔しているのかもしない。だが、サイラスにはそのことで軽蔑するような気持ちは起らなかつた。安心させるようにこつこつと微笑んで言つ。

「ゴールベルのことも、もちろん君のことも、軽蔑なんてしないよ。……先生みたいな人が、姉さんを支えてくれるといいんだけど」アンソニーはほつとしたように、しかし少し悲しげに、小さく笑みを漏らして呟いた。

彼には子供でいられる場所が少なかつたのかもしない。本来ならば、まだ親の庇護を受けて甘えている年齢にもかかわらず、逆に姉を支える立場にまわっているのだ。歪みが生じても仕方のない境遇だつたといえるだろう。

だが、それを知つたといひで、サイラスにはどうすればいいのかわからなかつた。

どうにかしたいといひ気持ちがないわけではないが、安易に手をつけていい問題でもないと思う。彼らの事情に踏み込むには相当の覚悟が必要だと感じた。今の自分に出来るせめてものことといえども？？。

「ねえ、アンソニー、アイスクリームでも食べに行こつか

「……アイスクリーム？」

「そう、アイスクリーム。嫌いなら別のものでもいいけど」

アンソニーは不思議そうな顔をしていたが、やがてふつと表情を緩めた。

「ありがと、先生」

少しの間のあと、静かにそう言つ。いつもとあまり変わらない口調だつたが、そこには精一杯の気持ちがこめられて居るようを感じられた。サイラスは目を細めて柔らかく微笑むと、ほとんど背丈の変わらない彼の背中にぽんと手を置いた。

コールベルは図書室の返却カウンターに、古びた3冊の本を重ねて置いた。

卒論用に借りた本の返却期限が迫っていたので、今日はこのためだけにアカデミーへ来たのだ。他に用はない。せっかくなのでサイラスの部屋へ寄つていこうかと考えるが、この時間は、まだ担当している1年生のクラスで教壇に立つてはいるはずである。アンジェリカはいるかもしれないが、彼女と一人きりになるのは気が進まない。授業が終わるまでここで時間を潰そうと、本棚から適当に一冊を選び、窓際の席について読み始めた。

授業時間中であるものの、図書室にはちらほらと人がいる。コールベルと同じように卒業間際の4年生なのだろう。みな静かに黙々と本を読んでいた。ページを繰る音だけが、近くで、遠くで、遠慮がちに聞こえる。半開きになつた窓からは、そつと、微かな風が滑り込んだ。

ガラガラガラ？？。

扉を開く無遠慮な音が、静寂の空間に響き渡つた。

意識的に見ようとしたわけではないが、音につられて、コールベルは何気なく扉の方に目を向ける。その瞬間、ハツと息を呑んで立ち上がつた。何故という疑問が脳裏を掠めるものの、それを考える余裕などない。気づかれないよう慌てて顔を逸らすと、読んでいた本を本棚に返し、うつむいて足早に図書室を去りつとする。だが？

「……っ！」

すれ違ひ際、先ほど入ってきた男に上腕を掴まれた。

逃げようとしたのは彼と会いたくなかったからである。だが、彼の目的は自分であるはずがないと思っていただけに、この展開に驚

かずにはいられなかつた。

「何をするの？！ 離してつ！…」

「おまえに話がある」

その男？？ラウルは無表情でそつまつと、コールベルの腕を掴んだまま、脇に抱えていた本を返却カウンターの上に置いた。そして、逃れようと足搔くコールベルを引きずるよつにして図書室を出していく。

去りゆく一人の背後では、小さなざわめきが起つっていた。

「私が図書室にいるつて……どうしてわかつたの……」

図書室からさほど離れていない廊下の壁に押しつけられ、コールベルは怯みそうになりながらも、上目遣いでじつと睨み、訝るよつに声を低めて尋ねた。

「勘違いするな。用があつて行つた図書室に、たまたまおまえがいただけだ」

ラウルは無感情に見下ろして答える。

その冷たい言い方にムツとし、コールベルは掴まれた腕に力をこめてそれを示す。

「だつたら、これはどうじうつもりなの」

「おまえが医務室に来ないからだ」

ラウルはポケットから紙切れを取り出し、それをコールベルの前に差し出した。メモ用紙を四つ折りにしたよつなもので、この状態では、書いてある内容まではわからない。

「……何？」

「この王宮医師におまえのことを頼んでおいた。医務室の場所も書いてある。私と顔を合わせたくないのならここへ行け

コールベルは頭の中が真つ白になり、絶句した。

「面倒だろうが定期的に診せろ。医師としての最後の忠告だ」

力の入らないコールベルの手に、ラウルは無理やりその紙を握らせた。そしてもう用はないとばかりに、少しの未練も見せることな

く、長い焦茶色の髪を揺らせて背を向けようとする。

とつとこ、コールベルは彼の手首を掴んで引き留めた。

白いワンピースがふわりと風をはらみ、緩くウェーブを描いた髪が揺れ、後頭部で結んだ包帯がひらりとなびく。そして、無言のままゆつくつとうつむき、縋るように、彼を掴む手に力をこめた。

「……私のことを……見捨てるの……？」

喉の奥から絞り出した声は小さく震えていた。

「おまえが私のところに来るといふのならそれでいい。自分で選べ」

「……どうして……そんな突き放したことを言つの……っ！」

包帯をしていない方の目から涙がこぼれ、タイルに落下して弾けた。膝から体が崩れ落ちそうになり、両手でラウルの服を掴んでしがみつく。ラウルはそれでも無表情を崩さなかつた。

「おまえはもう子供ではない。自分のことは自分で決める」

その言葉はコールベルの胸に深く突き刺さつた。

「みんな……みんなそう言つの……18だから子供じゃない、自立しろ、全部自分で選べって……そんなの本当は厄介払いしたいだけなんでしょう？ やつと突き放せてほつとしているんでしょう？ 物わかりのいいふりして、おまえのためだなんて言つて……そんなのズるいわ！ 卑怯よ！ 嫌いだ、来るなつて言われた方がまだましだわ！！」

考えるよりも先に言葉が飛び出していた。何を言つてているのか自分でもわからなくなつていた。頭の中はぐしゃぐしゃである。ただ、怖かった。我を忘れたように彼の胸を何度も叩き、溢れくるまま感情をぶつけて泣きわめく。

ラウルは微動だにせずそれを受けていた。しかし、やがて面倒くさそうに溜息をつくと、コールベルの細い手首を掴んで止め、その華奢な体を軽々と肩に抱き上げた。

「何する……のつ……！」

コールベルは背中側に頭を落とされ、逆さになつたまま、広い背

中を叩いて必死に抗議する。しかし、ラウルはまったくの無反応で、まわりの視線も気にせず、暴れるコールベルを抱えて大股で歩いていった。

ラウルが医務室へ向かっていることは、コールベルにもすぐにわかつた。そのことで少し頭が冷えたようだ。無駄な足掻きをすることはやめ、小さくしゃくり上げながら大人しくなった。

ラウルは医務室の扉を開けて中に入ると、そこにコールベルを下ろし、ガラス扉のついた棚から新品の包帯と薬を取り出した。

「座れ」

自分も席に腰を下ろしながら、突っ立っているコールベルに冷たく言つ。

何度もこの医務室で診察を受けているので、勝手がわからないわけではない。だが、今日はラウルの機嫌がいつも以上に悪く、またその原因が自分だという自覚があつたので、冷静さを取り戻したコールベルは少しひくついていた。それでも、言われるままに患者用の丸椅子にそろりと腰を下ろす。

ラウルは無言でコールベルの頭を引き寄せ、包帯の結び目をほどいた。そのくたびれた包帯を巻き取ると、傷の具合と見えない目を診察し、消毒をして、薬を塗つて、ガーゼを当て、新しい包帯を巻いていく。その手際はいつもどおり丁寧かつ素早いもので、どこにも荒っぽさはなかつた。

最後に、コールベルの頭を抱えるようにして、後頭部で包帯を結ぶ。

このとき、いつも、コールベルは胸がきゅっと締めつけられる。そんなはずはないとわかっているのに、大事にされているのではないかという錯覚に陥りそうになり、そんな自分を浅ましくみつともなく思うのだ。

一人の体が離れた。

微かに感じていた温もりがなくなり、コールベルは急に心許なくなった。手を伸ばしたい衝動に駆られたが、握りしめたこぶしを膝に留めてじっと耐える。

「これからは自分で選べ。ここへ来るか、他の医務室へ行くかを」コールベルの胸の内を知つてか知らずか、ラウルは包帯の残りと薬を片付けながら、淡々と冷ややかに言葉を落としていく。

「いくら泣いても喚いても、おまえは私にとつてただの患者でしかない。望むようなことはしてやれん。いいかげんに諦めろ」

「わかつているわ、そんなこと……諦めている……諦めているわ……」

コールベルは眉根を寄せてうつむき、膝の上でワンピースの裾をギュッと握りしめた。白く柔らかな布に、無数の皺が放射状に走る。理性ではもう完全に諦めていた。

だが、実際に会つてしまふと心が乱されてしまい、些細なことで気持ちが暴走して抑えきれなくなつてしまふ。そのことがわかつていたからこそ、医務室には行かず、ラウルを避けていたのだ。

「私に会つのは苦痛だらうと思い、他の選択肢を用意した。だが、患者としてのおまえが、医師としての私を選ぶのなら拒絶はしない。お膳立てはここまでだ。あとはおまえが自分で選択しろ」

「私には……選べない……」

コールベルは声を震わせながら固く目をつむり、小さく首を横に振つた。真新しい白い包帯とともに、腰近くまである長い髪が鈍重に揺れる。

「おまえはいつまで甘え続けるつもりだ」

いつものように感情のない声が響く。

今のコールベルにはそれがひときわ冷たく感じられた。

「大人になれば誰もが自分で考え、悩み、自分の責任で物事を選択している。たとえ意に沿わない選択肢しかなくともな。嫌だと駄々をこねるのは子供のやることだ。おまえは誰かに責任を押しつけ、ただ子供のように守られていたいのだろう」

「18だから急に大人になれなんて、そんなの無理よ…」「ならば、いつになつたら大人になれるというのだ」

コールベルはきゅっと下唇を噛んだ。自分の訴えがただの言い訳だったことに気づいたが、それをすぐに認めるほど素直ではなかつた。黒く渦巻く気持ちを抱えながら、攻撃の矛先を変える。

「あの人はいまだに守られてばかりいる」

「おまえはあいつのこと何も知らない」

具体的に名前は出さなかつたが、ラウルには誰のことかわかつたようで、即座に言い返してきた。ムツとしたコールベルに、片付ける手を止めてやうに語り出す。

「あいつは……つらいことがあつても自分の心に秘め、酷い仕打ちを受けても相手を責めることはなく、皆に心配かけないよう笑顔を見せてはいる。守られていることを当たり前と思わずに感謝を忘れない。そんなあいつだからこそ、私も、サイファも…？」

「そんなの惚れた欲目つてだけでしじう…！」

たまらなくなつて、コールベルは涙目で叫んだ。

「そう思いたければ思えばいい」

ラウルは怒りもせず落ち着いた口調でそう言つて、椅子をまわしてコールベルに振り向き、正面からまつすぐにその瞳を見据えた。

「少なくとも、おまえのようにまわりを恨んでばかりの人間を、守られてはいることに感謝もできない人間を、私は守りたいとは思わな
い」

無表情のまま、彼はきつぱりと言い放つ。

コールベルは大きく目を見張つた。

返す言葉が見つからなかつた。

ラウルが自分のために手を尽くしてくれたことは知つていて。それなのに、感謝の気持ちを伝えるどころか、さらに多くを求めて責め立てるばかりだった。自分の境遇に甘えて恨み言をぶつけるばかりだった。

こんな私では、愛想を尽かされるのも当然だわ…。

彼の最も大切な存在になりえないことが怖かったのかもしれない。
他人を責めることで自分の心を守るうとしていたのかもしれない。
深くうつむき、目をつむる。悔しいというより、恥ずかしいという
気持ちの方が大きかった。

変わりたいと思っているのに、変われない。

強くなりたいと思っているのに、強くなれない。

結局いつも甘えて、逃げて、縋つてばかり。

でも、このままではいけない。このままでは？？。

「今……は……、もう少しだけ、考える時間がほしい……」

ユールベルはうつむいたまま、掠れる声を絞り出した。

「わかった」

ラウルは静かにそう答えると、もう一度、四つ折りにした紙切れをユールベルに手渡した。図書室の前で渡されたものと同じものようだ。あのとき、我を忘れたユールベルがいつのまにか落としていたのだろう。ラウルが拾っていたことすら気づいていなかつた。ユールベルは硬い面持ちでそれを見つめると、ゆっくりと握りしめ、決意を固めるようにきゅっと口を結んで立ち上がつた。

逃避

コールベルは、両脇に紙束が積まれたスチール机の上で、俯せになつて目を閉じていた。細く開いた窓から舞い込んだ風が、薄い力一テンをひらひらとはためかせ、緩いウェーブを描いた金の髪と白い包帯を小さく揺らす。いつも來ても乱雑で、狭くて、お世辞にもきれいとは言い難いこの部屋が、なぜかコールベルには落ち着ける場所になつていた。

私、逃げている？？。

ラウルに言われたことの結論はまだ出ていない。それどころか真剣に向き合つてさえいない。あの日以来、毎日のようにここへ来て、何をするでもなく、ただぼんやりしたり、サイラスと話したり、ときにはアンジェリカと話したりしている。そんなコールベルを、サイラスはごく自然に受け入れてくれていた。不思議には思つてはいるだろうが、頻繁にここに来るようになつた理由も訊かないのである。しかし、それももうすぐ終わる。

卒業式の日は目前に迫つていた。卒業してしまえば、気軽に訪れる 것도できなくなるだろう。それまではせめて許してほしい、ここに逃げ込むことを、結論を先延ばしにすることを？？コールベルは薄く目を開いた。

ガチャン？？。

静かな部屋にドアノブのまわる音が響いて、扉が勢いよく開いた。サイラスたちが戻つてきたのだろうと思い、コールベルは顔を上げたが、そこにいたのは思いもしない人物だった。

「あれ？ おまえ何でここにいるんだ？ アンジェリカは？」

魔導省の制服を着たジークが、コールベルを指しながら混乱したように尋ねた。

「先生とアンジェリカは図書室に行つたわ。すぐに戻つてくるって

「ゴールベルは無感情で淡々と答える。

「そうか……」

ジークは僅かに声を沈ませると、微妙に渋い顔で、落ち着きなく首をひねつたり頭を押さえたりした。ここで待つべきかどうか迷っているのだろう。そんな彼を、ゴールベルはじつと見つめて口を開いた。

「ジークは成人して何か変わった?」

「……えつ?」

唐突な質問に、ジークはぱちくりと瞬きをした。しかしすぐに真面目に考え始める。

「そうだなあ……18になつてもそんなに意識はしなかつたな。大人になつたつて実感はあんまりなかつたし、まわりからもそんなに大人扱いされなかつたし。のらりくらり学生やつてたつてのもあるんだろうけど」

それは拍子抜けするような答えだつたが、ゴールベルにはとても羨ましく思えた。

ジークは斜め上に視線を向けて、さらに続ける。

「就職してからの方が変わつたことは多かつたな。自分の言動に責任を持たなきやならないつてことを実感を持つて理解した、つていうか、理解させられたつていうか……結構大変だぜ、働くのも」

その言葉とは裏腹に、彼の声にはどこか楽しげに弾んでいた。

「そういうやおまえ、あの研究所に就職するんだつてな」

「ええ……」

あの研究所、などという極めて曖昧な言い方だつたが、おそらく王立魔導科学技術研究所のことだつうと思い、ゴールベルは戸惑いながらも小さく頷いた。

「氣をつけるよ。あそこにはラグランジエの関係者つてだけで嫌つてくるやつがいるんだ。おまえなんてもろにラグランジエ家のの人間だし、おまけにサイファさんの口利きで入つたんだから、標的になることは間違いないぜ」

「ジョシュ……？」

ジークの言つた人物像に当てはまるのは彼しかいなかつた。少なくとも、コールベルが知る中では彼だけである。

「あれ？ 知つてんのか？」

「研修に行つていたから……」

「ああ、そうか」

ジークは軽く納得すると苦笑した。

「ひどかつただろ？ あいつの態度」

「でも、ジョシュはいい人……私を助けてくれたもの……」確かに、彼にはラグラントジエの人間だからという理由で冷たい態度をとられたが、襲われかけていたときには見過ごすことなく助けてくれたのだ。しかし、事情を知らないジークは、怪訝な顔で腕を組みながら首をひねる。

「まあ、悪いやつではないと思うけどな……ひいつ……」

突然、彼は引きつた悲鳴を上げて飛び上がつた。

「おまえっ！ 背筋を指でなぞるのはやめろっ……！」

「だつてジークが入口をふさいでいるんだもの」

顔を赤くして勢いよく振り返つたジークに、アンジエリカは楽しそうに笑いながら答えた。図書室から戻つてきたところなのだろう。その隣にはにこにこしているサイラスもいた。

「つたく……おまえ忘れてたんじゃねえだろうな」

「心配しなくともちゃんと覚えているわよ」

アンジエリカはニコッとして答えると、隣のサイラスに振り向いて言つ。

「それじゃ、私はこれで帰りますね。お疲れさまです」

「お疲れさま」

サイラスが片手を上げて応えると、彼女はサイラスに小さく手を振り、部屋の中のコールベルにも手を振つて、幸せそうな顔でジーグと並んでどこかへと去つていつた。

「留守番させちゃつてごめんね」

サイラスは部屋の中に入ると、一番奥の自席に座り、すっかり冷めた飲みかけのコーヒーを口に運んだ。それでも美味しそうに顔をほころばせると、ほつと一息ついて、無表情のユールベルに微笑みかける。

「君もジークと知り合いだつたんだ」

「……あの一人はどこへ行つたの？」

「さあ、詳しくは聞いてないけど、何かお祝いとか言つてたよ」

「そう……」

ユールベルはそう言つと、再び机に俯せになつた。他人の幸せを素直に喜べない今の自分は、多分、とてもひどい顔をしている。そんな顔をサイラスには見せたくなかつた。

「ねえ、僕たちもどこかへ行こつか

「……どこへ？」

サイラスの思いがけない誘いに驚きながら、それでも顔を上げることなく、ぽつりと小さく尋ね返した。彼は、ギシリと音を立てて椅子の背もたれにもたれかかると、腕を組んでのんびりと答える。

「そうだね、アイスクリームでも食べに行こつか」

ユールベルは少しだけ顔を上げ、ちらりとサイラスに横目を向けた。その視線がぶつかると、彼はにっこりと微笑み、机に肘をついて前屈みでユールベルを覗き込む。

「嫌い？」

「嫌いじゃ、ない……」

「じゃあ行こうよ、ね？」

まっすぐ向けられたその視線に、ユールベルは微かな戸惑いを感じたが、不思議と逃げたい気持ちは起こらなかつた。机に頭を載せたままじつと彼を見つめ返すと、小さくこくりと頷いた。

「ここ」のアイスクリームが好きなんだけれど、一人ではちょっと行きづらくてね。これからもときどき付き合ってくれると嬉しいな

向かいに座るサイラスは、カップ入りのアイスクリームをスプーンですくいながら、これまで見たこともないくらいの晴れやかな笑顔でそんなことを言った。

「ユールベルが連れてこられたのは、小さなアイスクリーム専門店だった。

店内を見まわしてみると、並んでいるのも、席に着いているのも、ほとんどが若い女性である。ちらほら男性客もいるが、みな女性と一緒に来ているようだ。確かにこれでは男性一人では行きづらいだろ？

「先生がアイスクリームを好きだなんて知らなかつた」

「まだまだ君の知らないことがたくさんあると思うよ」

サイラスはにっこりと笑つて言つた。

ユールベルは何と答えていいかわからず、無表情のままアイスクリームを口に運ぶ。それでも彼はにこにこと微笑んでユールベルを見ていた。

「今日だけではない。

ユールベルがどれだけ無愛想な態度をとつても、いつも優しく見守るようにそこにいてくれる。だからだらり、彼のそばはとても居心地が良く、ついそこに逃げ込みたくなるのだ。他人の優しさを利⽤するのは、もうやめなけばと思っていたのに？？。

「先生、私、逃げているの……」

ユールベルはゆつくりうつむくと、スプーンを握る手に力をこめた。

突然のことにサイラスはきょとんとしたが、すぐに軽く笑いながら答える。

「僕もし�ょっちゅう逃げてるよ。つらいときは逃げるのもいいんじゃないかな。気分が乗らないときまで無理することはないよ」

彼の言葉を聞いていると、逃げるのも悪いことではないよと思えてくる。しかし、彼の「逃げる」は、ユールベルのそれとは根本的に違うのだ。彼の場合は、気分転換のための一時的な逃避であり、

その根底にあるのは前向きな気持ちである。それに引き替え自分は？？。コールベルはますます深くうつむき、独り言のように呟く。

「結局、本当に逃げたいものからは逃げられないのね……」

サイラスは不思議そうに瞬きをしてコールベルを覗き込む。

「本当に逃げたいものって？」

「私自身」

コールベルはぽつりと言葉を落とした。

「弱くて、ずるくて、我が慢で、嫉妬深くて、欲深くて、僻んでばかりで、手に入らないものばかり欲しがって。そんなどうしようもない人間だから、自分でも大嫌いだし、他の誰からも好かれないの」

「僕はコールベルのことが好きだよ」

それはサイラスの優しさだったのだろう。いや、同情なのかもしれない。コールベルは言いようのない虚しさを感じて、きつく眉根を寄せた。スプーンを持つ手にも無意識に力が入る。

「先生は私のことをよく知らないもの。私のことを知ればきっと嫌いになる」

「そつならない自信はあるけどね」

サイラスは楽しげにアイスクリームをすくいながら平然と言った。自信満々というよりも、それが当然であるかのような口調だった。

「どうして？」

「勘、かな？」

あまりにもいい加減な答えに、コールベルは唖然とすると、呆れたように溜息をつく。

「研究者とは思えない答えね」

「研究者には勘も必要なんだよ」

サイラスは頭を指さしてそう答えた。いつたいどこまで本気で言っているのか、コールベルにはわからなかつた。しかし、邪氣のない彼の笑みを見ていると、黒く渦巻く気持ちが薄らいでいき、これ以上、反論する気もなくなつていつた。

「変な人……」

「アイスクリーム、溶けちゃうよ

サイラスは笑いながら言った。

ユールベルは溶けかかったアイスクリームをすくって黙々と口に運ぶ。それはとても冷たかったが、ほっとするような甘さがあり、口にするたびに気持ちが和らいでいくように感じた。

いつかは現実と向き合わなければならぬ。

だけど、あと少しだけ？？。

そんな甘えた考えも、今だけは許されるような気がした。

「コールベル、卒業おめでとうーーー！」

ターニャは講堂から出てきたコールベルに駆け寄り、彼女が戸惑うのも構わずに思いきりぎゅっと抱きしめた。白いワンピースの裾がふわりと舞い、金の髪が揺れ、立ち上ったほのかな甘い匂いが鼻をくすぐる。

「卒業生代表の挨拶も良かつたわよ」

「あれは俺が書いたようなものだ」

コールベルの後ろからついてきていたレオナルドが、自慢げに胸を張つて割り込んできた。普段と変わらない格好をしているコールベルとは対照的に、新調したと思われる、高級そうな仕立ての良いスーツを身に着けていた。

「それどういう意味よ」

「何を言つたらいいかわからない、ってコールベルが悩んでたから、ネタ出ししてやつたんだ。まあ、文章に起こしたのはコールベルだけだな」

腰に手を当てて鼻高々のレオナルドに、ターニャは呆れた眼差しを送つた。

「卒業できるかさえ危なかつたのに、よくそんな余裕があつたわね」

「卒業が決まってからの話だーーー！」

レオナルドは卒業証書の入った筒を握りしめ、顔を真つ赤にして言い返した。

今日はアカデミーの卒業式である。

元ルームメイトで友人のコールベルを祝うために、ターニャはこへやつてきたのだ。もつとも、当事者である卒業生と教師以外の立ち入りは許可されていなかっため、式は外からこっそり覗いていただけである。だが、取り立てて派手なことを行つわけでもないので、

声を聞くだけでも十分なくらいだつた。

長くはない厳肅な式が終わると、講堂のまわりは急に賑やかになつた。外に出た卒業生たちはしゃいだ声があちこちで上がる。ターニャたちの声も、その中のひとつだった。

「ゴールベル、卒業おめでとう」

ふと、背後から落ち着いた声が聞こえ、3人は会話を中断して振り返る。

そこにいたのは、優しく微笑む温厚そうな男性だつた。

ターニャには見覚えのない人物であり、誰だろうかと不思議に思う。ゴールベルの父親にしては若すぎるし、そもそも全く似ていな。第一、このぼさぼさ髪の冴えない男が、ラグランジエ家の間であるとも思えない。

「ありがとう」

考え込んでいるターニャをよそに、ゴールベルは素直に淡々と応じた。

ターニャは、その男性のことが気になりつつも、さすがに本人の目の前で「誰?」などと訊くことは躊躇われた。だが、レオナルドの方は、そんな気遣いなど微塵も持ち合わせていないようだ。

「おまえゴールベルとどういう関係だ」

单刀直入に、しかもあからさまな敵意を込めて、睨みつけるような視線で問いただす。年上の人間に対して、かなり失礼な態度といえるだろう。

「やめてレオナルド、この人は……」

「僕はサイラス・フェレット。アカデミーの魔導全科1年担任と、魔導科学技術研究所の研究員を兼務している。ゴールベルとは研究所で知り合つたんだ」

困惑したゴールベルを制止して、相手の男性は笑みを崩すことなく端的に説明をした。それでもレオナルドは納得しなかつたらしく、さらに険しい顔になり食つてかかる。

「教師が生徒に手を出していいと思っているのか」

それはあまりにも飛躍した決めつけだった。サイラスは困ったよう に乾いた笑いを浮かべると、コールベルに振り向いて肩を竦める。

「何か誤解しているみたいだね、君の……彼氏？」

「彼氏じゃなくて、親戚……」

コールベルは無表情でぼそりと答えた。

それまで黙つて聞いていたターニャは、その言葉を耳にして思わず噴き出した。しかし、すぐに咳払いしてそれをごまかす。レオナルドは、その様子を横目で見ながら、ムツと眉をひそめて睨んだ。サイラスは申し訳なさそうに微笑みながら、コールベルに振り向いて口を開く。

「ごめんね、コールベル。友達と一緒にのところに声を掛けちゃって。これからアイスクリームでもどうかなと思つたんだけど、それはまた今度にするよ」

「ええ……私の方こそ、『ごめんなさい』……」

コールベルのその声には、どこか寂しそうな響きがあった。気のせいではないだろう。彼女の場合、表情にあまり動きはなくとも、声には比較的素直に感情が表れるのだ？？ターニャは確信してくれりと笑う。

「コールベルは先生と行つて。私たちのお祝いは、また今度つてこじで」

「おまえっ！ 何を言つて……」

勢いよく突つかつてきたレオナルドの口を、ターニャは両手を伸ばして無理やりふさぎ、満面の笑みを浮かべて続ける。

「今日はレオナルドを祝つてあげることにするわ。だから、こっちは気にしないでね」

「えつ……あの……」

「それじゃ一ねつ……！」

戸惑うコールベルに一方的にそう告げると、大きく手を振り、レオナルドの腕を引きながら逃げるように門に向かつて走つていった。

講堂前に残されたコールベルとサイラスは、呆気にとられ、去りゆく一人をただ立ちつくしたまま見送っていた。

「おい、どうじうつもりなんだよ」

アカデミーの門を出ると、レオナルドはむすつとした膨れ面を見せながら、前を歩くターニャにぶつきらぼうに尋ねた。ターニャは掴んでいた彼の手首を放すと、くるりと振り返り、その鼻先に人差し指を突きつけて言う。

「コールベルが先生と過ごしたがつてるつて気づかなかつたの？」

「あんな野暮つたい汎えないおっさんなんて、冗談じゃないぞ」

「大事なのは外見じやなくて中身でしょ。いい人そうじやない」

嫌悪感を露わにしたレオナルドに、ターニャは反論する。

「コールベルにはああいう穏やかで優しい人が似合つてゐるよ。すごく大切にしてくれそうな感じがするし。あの一人はきっと上手くいくわ。うん、間違いない！」

一人で盛り上がると、両手を組み合わせ、澄み渡つた青空をうつとりと仰ぐ。

「なに勝手に決めつけてるんだよ」

「決めつけじやなくて、女の勘よ」

「女の勘……おまえがね……」

レオナルドは嘲笑まじりに口先で呴いた。

その言葉が聞こえていたものの、彼の失礼な態度には慣れていたため、ターニャは気にすることなく受け流した。それより、他にもつと気になつてゐることがあるのだ。横目を彼に向け、遠慮がちにそろりと切り出す。

「ねえ、余計なお世話かもしれないけど、いい加減コールベルのことを諦めたら？」

「とつぐに諦めてるわ。もう終わってるんだよ」

レオナルドの答えは、拍子抜けするくらいあつさりとしていた。先ほどまで見せていた態度とは裏腹の、まるで何の未練もなさそう

な口調である。ターニャは怪訝に眉をひそめて問い詰める。

「じゃあ、何でそんなにムキになるのよ？」

「終わったからって、情までなくなつたわけじゃない。あいつが不幸になるのは見たくない。いつか幸せになれる」と願つてゐる…

…それだけのことだ」

そう語るレオナルドの眼差しは、ドキリとするくらいにまつすぐで、真剣そのものだつた。その言葉に嘘や「まかしはないだらう。別れた相手からこんなふうに思われる」ことを願つてゐる…

ましく思つ。

「だったら大人しく見守ることね。上手くいくものもいかなくなつちやう」

「だからあんなおつかんじや、あいつが幸せになれないって言つてるんだ」

レオナルドは相変わらず一方的に決めつけていた。先ほど羨ましいと思つたばかりなのに、ターニャはもうその気持ちを撤回したくなつた。思いきり眉をしかめた不機嫌な顔を、グイッと背伸びして彼の鼻先に突きつける。

「そんなのわからないじゃない。ゴールベルを信じて見守るの！いい？」

「……わかつたよ」

ターニャの勢いに圧され、レオナルドは少し上体を引きながら、仕方なくとつた感じでしぶしぶ返事をした。柔らかい金髪を搔き上げながら顔をそむけると、小さく溜息をつく。

「それで、どうやって祝つてくれるんだ？」

「えつ？」

ターニャは隣のレオナルドに振り向いて、問いかけのよひにまづくつと瞬きをした。彼は、空を見上げたままポケットに両手を突っ込み、静かな声で言つ。

「さつき言つただろう、祝つてくれるつて」

「ああ、そつか。じゃあ「ハンでも奢つてあげるわ。何が食べたい

？」

ターニャが人差し指を立てて明るく尋ねると、レオナルドは少しだけ振り向き、どこかむくれたような表情で、ターニャにじっと視線を流した。

「貧乏人のおまえに、俺が奢られるのか？」

「あら、これでも立派に社会人やつてるのよ？ 今はもうそんなに貧乏でもないんだから。妙なプライドなんか捨てて、今日くらいは素直にお姉さんに奢られなさいって」

ターニャは軽く笑いながらレオナルドの肩をぽんと叩いた。その瞬間、彼の表情があからさまに翳つた。

「そんなに年が違わないのに、年上ぶつてお姉さんなんて言つな」
彼がなぜそんな表情でそんなことを言つのか、ターニャにはわからなかつた。戸惑いを感じながらも、田を合わそうとしない彼の横顔を見つめ、小さく首を傾げて尋ねる。

「2年違えば十分でしょ？」

「3ヶ月しか違わない」

「えつ？」

彼の言つた意味が理解できず、ターニャは聞き返した。

「俺は入学したとき19歳だつた」

「あ、そうなんだ……でも、3ヶ月？？」

彼がアカデミーに19歳で入学したとなると、生まれ年はターニャと一つしか変わらないことになる。そこまではいいが、3ヶ月という数字に関しては、やはりわからないままだつた。しかし、続くレオナルドの言葉で、その疑問も解ける。

「おまえの生年月日はアカデミーの名簿で調べた」

「……は？」

「そんなことも知らないのか？ 図書室に行けば、卒業生の氏名と生年月日が書かれた名簿がある。アカデミーの関係者なら誰でも閲覧可能だ」

平然と答えるレオナルドの言葉を聞いているつむじ、ターニャの

目は大きく見開かれていた。両方のこぶしをギュッと握りしめて、眉根を寄せると、語氣を強めて勢いよく責め立てる。

「そりゃなくて！だからって何でわざわざ人の生年月日をこつそり調べてるわけ？普通そんなことしないでしょ。何かちょっと怖いんだけど！！」

それでもレオナルドに動搖は見られなかつた。少しばかり上氣したターニャをじっと見下ろし、開き直つたかのようにふてぶてしく言い返す。

「好きな女のことを調べて何が悪い」

「ああ、まあそういう理由だつたらわからなくもないけど……って、あれっ？」

ターニャはいつたん納得しかけたが、何かがおかしいことに気づいて首を傾げた。ユールベルことを言つてゐるのかと思つたが、彼女の生年月日ならば、わざわざアカデミーの名簿など見なくとも知つてゐるだろ。だとすれば、彼の言つ好きな女というのは、ユールベル以外の誰かということになる。

「もしかして、もう他に好きな子いるの？」

ターニャは瞬きをして尋ねた。

何を言つてゐるんだといわんばかりの表情で、レオナルドは柔らかい金の髪を搔き上げながら、呆れたように小さく溜息をついた。それから顔を上げ、真剣な眼差しでターニャを見据えると、ゆっくりと薄い唇を開いて言つ。

「おまえが好きだ。俺と付き合へ

「……へつ？」

呆然としたターニャの口からは、間の抜けた声しか出なかつた。

「ターニャ、そろそろ切り上げない？」

「ごめん、私、もう少しやつていくから」

定時が過ぎてすっかり帰る気になつてゐる同僚のアニーに、ターニャは申し訳なさそうに両手を合わせて詫びた。そして、さらに申し訳ない顔になり、上田遣いで、言いくさうに「一日連続のお願いを切り出す。

「それでさ……もしあいつが待つてたら、もう帰つたつて言つてくれない？」

「またあ？ 私は別にいいけど……でも、嫌なひしゃんと断つた方がいいよ？」

アニーは机の書類を片付けながら軽く忠告する。しかし、そんなことはもちろんターニャにもわかつてゐた。疲れたように薄く笑つて溜息をつく。

「もう何度も断つたわよ。でも、あいつ全然あきらめてくれないんだもの」

「そんな情熱的に想われるなんて羨ましいよ。いつや付き合ひやえれば？」

「バカ言わないでよ！」

悪戯っぽくからかうアニーの言葉に、ターニャはむきになつて反論した。思いのほか大きかつた声は、しんとしたフロアに響き渡り、まわりの注目を集めてしまつ。ターニャは慌てて肩を竦めて小さくなり、ごまかし笑いを浮かべながら周囲にペコペコと頭を下げた。

アニーは首を伸ばしてターニャに顔を寄せると、声をひそめて話を続ける。

「どうしてよ？ 結構カツコイイし、一途つぱいし、何よりラグラソジエ家のご子息なんでしょう？ 言つことないじゃない。上手くいけば玉の輿だよ？ 何が不満なわけ？」

「……バカなのよ」

少し考えたあと、ターニャはぽつりと言葉を落とした。

「えっ？ でもアカデミー卒業したんでしょう？」

「成績の問題じゃなくて、人としてバカなのよ」

「ふうん、まあ、人の好みはそれそれだけね」

アニーは興味なさげにそう言つと、鞄を持って立ち上がり、「お先に」と挨拶をして帰つていった。遠ざかる彼女の足音を聞きながら、ターニャは書類に目を落としたが、胸がざわついてなかなか集中することができなかつた。

突然の告白以来、レオナルドは毎日のようにターニャの前に姿を現した。

その度に、ターニャは毅然と断つてきた。少なくともターニャ自身はそのつもりだつた。しかし、人の話を聞いているのかいないのか、それとも断り方が悪いのか、レオナルドは性懲りもなく告白を繰り返し、付き合えと偉そうに迫るのだ。

彼のことが嫌いなわけではない。

だが、あくまで友人の一人である。恋愛対象として見たことはなかつたし、見るつもりもなかつた。それ以前に、彼とは付き合うわけにはいかない理由がある？？。

数時間が過ぎ、フロアに残つている人もだいぶ少なくなつてきた。ターニャはきりのいいところまで仕事を片付けると、大きく腕を上げて背筋を伸ばした。あくびを噛み殺しながら、帰り支度をして立ち上がり、残つている人たちに挨拶をして研究所をあとにする。外はもうすっかり暗くなつていた。

濃紺の空に数多の星がきらきらと瞬いでいる。夜遅くまで仕事をした帰り道、新鮮な空気を吸い込みながら星空を眺めると、体も心も少しだけリフレッシュできる。ターニャはこのひとときが好きだつた。

だが、今日は、それを楽しむ余裕はなさそうである。

もうすぐ深夜といつてもいい時間のせいか、だいぶ冷え込んでおり、ブラウスに薄手のジャケットという格好では寒さが身に沁みるのだ。ここまで遅くなるとは思わず、コートを持つてこなかつたのだが、ターニャはその判断を後悔していた。

小さく身震いして足早に帰路につこうとした、そのとき？？。

「随分と卑怯な手を使つてくれたな」

「レオナルド……っ！」

木の陰からぬつと姿を現したレオナルドに驚き、ターニャは息を呑んで後ずさつた。すぐさま彼はその間を詰めると、少し怒つたような顔で、逃げるようすに視線を逸らしたターニャをじつと見下ろす。「一度も同じ手が通用すると思つたのか

「…………そ、うよ」

ターニャはぽつりと言葉を落とすと、キッと強い眼差しで顔を上げる。

「私はこういう愚かで卑怯で馬鹿な人間なの。あなたの思つているような人間じゃないの。落胆した？ 軽蔑した？ 嫌いになればいいじゃない。早く愛想つかしなさいよ！」

感情のまま早口で捲し立てたが、レオナルドはまともに取り合つことなく、呆れたように小さく溜息をついた。

「おまえ、本当に意地つ張りだな」

「あなたこそどこまでしつこいのよ！」

「おまえが素直にならないからだ」

「素直に嫌だつて言つてるでしょ？」

いつもと同じ言い合いの繰り返し。どうしてわかってくれないのだろうと苛立ちが募る。それはレオナルドも同じなのかもしない。一瞬、苦々しく顔をしかめたが、それでもすぐに平静を装つと、じつとターニャを見つめて落ち着いた口調で続ける。

「おまえのことだ。どうせコールベルのことを気にしているんだろう。だけどコールベルとはとっくに終わつてる。おまえが遠慮する

「ことなんて何もない」

「お、終わってるからいいってもんじゃないわよー。」

ターニャは必死に言い返した。

レオナルドはうんざりしたように反論する。

「俺が振ったのならともかく、俺があいつに振られたんだぞ。おまけにあいつはあの先生と仲良くやつてるんだろう? いつたいどこに遠慮する要素があるんだよ」

「それでも、私はコールベルの友達だから……さつとあの子は傷ついたやう……きっと裏切られたような気持ちになると思ひ。あなたがつてコールベルを傷つけたくはないでしょ?」

それは今まで口にしなかつた本音だった。コールベルは自分を見捨てられることを何よりも怖れている。だから、今まで自分を好きだと言つていたレオナルドが、他の人、それも友人と付き合いだしたとなれば、理性ではともかく、感情的な面では見捨てられたと感じてしまつに違ひない。

しかし、それでもレオナルドは引かなかつた。

「そんな納得できない理由で、好きな女を諦めるつもりはない」

真剣にそう言つと、さらに間を詰める。ターニャはその距離の近さに驚き、後ずさりかけたが、レオナルドは手首を掴んでそれを引き留めた。

「俺が諦めるのは、本気でおまえに嫌われたときだけだ」

「嫌いよー。」

ターニャはカツとして間髪入れずに叫んだ。その瞬間、急に目頭が熱くなり、彼の姿が大きくぼやけて見えた。そんな自分に混乱し、やけになつて大声を張り上げる。

「あなたみたいなわからずや大つ嫌いなんだからーー!」

「……俺には好きつて言つてるようにな聞こえるけどな

「はあつ?ー!」

レオナルドはどこまでも自己中心的だつた。だが、その声にはどこなく寂しさが漂つてゐるよつに感じられた。少し冷静さを取り

戾したターニャの胸に、理由のわからない罪悪感が広がる。

「いい加減に素直になれよ。無理をしていたら苦しいだろ？。俺も

……きつい」

ふわり、と背中をあたたかいものが覆い、ターニャは驚いて顔を上げた。それはレオナルドのジャケットだつた。彼が自分の着ていたものを掛けてくれたのである。彼の体温の残るそのジャケットに、ターニャの身体はすっぽりと包まれた。

「不格好だが、こんな時間だ、誰も見ないだろ？」

「レオナルド……」

ターニャは戸惑いながら目を泳がせる。心臓を轟掴みにされたようく苦しい。彼を拒絶するつもりなら借りるべきではないのかもしれない。だが、彼の厚意を踏みにじるようなことは言えなかつた。肝心なときに強気になれない自分に歯痒さを感じた、そのとき？？。

「もしも本当に俺のことが嫌いだつたら、そのジャケットは返さずに焼き捨てる」

「えつ……」

「おまえがそこまでするなら、俺もキッパリと諦めてやる」

レオナルドは真剣な面持ちで言つた。そして、軽く右手を上げながらくるりと背を向け、シャツ一枚といつ見るからに寒そうな格好のまま、片手をポケットに突っ込んで帰つていいく。ターニャは何も声を掛けることができず、闇夜にほのかに浮かぶ白い背中をただ呆然と見送つた。

焼き捨てるなんて出来るわけないじゃない？？。

狭いアパートに帰つたターニャは、ハンガーに掛けたジャケットを見つめながら、膝を抱えて心の中で毒づいた。レオナルドの貸してくれたそのジャケットは、生地も仕立ても良く、明らかに高そうなものである。貧乏だった自分がそれを焼き捨てるには勇気がいる。彼の勝手な押しつけに腹が立つて仕方がなかつた。

なのに、あのときの彼のことを思い出すと胸がキュッと締めつけ

られ、顔も熱くなる。その感情の正体に、ターニャ自身もつづらと気づきかけていた。それでも、コールベルのことを思うと、受け入れるわけにはいかない。しかし、彼の言い分ももつともであり、間違つてはいない。

思考は堂々巡りして結論に辿り着けない。

灯りを落とした暗い部屋の中で、抱えた膝に顔を埋める。答えを出さなければいけないことはわかつている。けれど、一晩中考えても、何一つ決断は下せなかつた。

翌日、レオナルドは姿を見せなかつた。

その翌日も、翌々日も、ターニャの周辺は平和すぎぬくらいに平和だつた。彼がしつこくつきまとう以前、つまり、ほんの数週間前までの生活である。これが自分が望んだ結果なのだ。にもかかわらず、心に大きな穴が空いたような寂しさを感じた。

愛想つかされたのかな、私？？。

嘘をついて逃げようとしたうえ、嫌いだの大嫌いだの言つたのだ。愛想を尽かされるのも当然のことだらう。最後の去り際に見た、彼のつらそうな顔が脳裏によみがえり、胸がズクリと疼く。それでも、コールベルのことを思えばこれで良かったのだと、何度も自分に言い聞かせた。

「4日ぶりだな」

ターニャが仕事を終えてアパートへ帰つてくると、レオナルドは門の横にもたれかかつて待ち構えていた。組んでいた腕をほどき、軽く右手を上げて一步前に出る。

ターニャはビクリとして半歩下がると、訝しげに眉をひそめた。
「どうして私の住んでるところを知つてゐるのよ

「おまえが教えてくれたんだぞ」

レオナルドはポケットから取り出した小さな紙片を掲げる。それは、以前、ターニャが渡した名刺だつた。裏には自宅の連絡先を書

いた記憶がある。もう一年以上前のことであり、今の今まですっかり忘れていた。

「……諦めたんじゃなかつたの？」

「俺の言つたことを忘れたのか？ 本気で嫌われない限り、諦めるつもりはない」

じゃあ、なんで……と言いかけて、ターニャはその言葉を呑み込む。しかし、表情には出でていたのだろう。レオナルドは少し視線を逸らし、柔らかい前髪を搔き上げながら、微かに頬を染めてぶつからぼうに説明する。

「ずっと風邪をひいて寝込んでいたんだ。何度も抜け出して行こうとしたんだが、母親に引きずり戻されてベッドに縛りつけられてなもしかして、その風邪つて……」

あの日の夜はかなり冷え込んでいた。そんなところでコートも着ずに何時間も待つたうえ、ターニャにジャケットを貸してシャツ一枚で帰つたのだ。風邪をひいても仕方のない状況である。

「ああ、俺が勝手にやつたことだ。おまえが気にする「こと」はない」「気になんてしないわよ」

誇らしげに胸を張るレオナルドに、ターニャは呆れたような眼差しを送る。

「どうしようもないバカだなって思つただけ。バカなのに風邪をひくなんて、本当に何の取り柄もないじゃない」

「おまえな……」

反論のしようがなかつたのか、レオナルドは低い声でそれだけ言うと、額を押さえて小さく溜息をついた。真新しいジャケットの腕に固く皺が走る。それを目にしたターニャは、あることを思い出し、しばらく思考を巡らせてから静かに切り出す。

「少しここで待つてくれる？」

「……ああ。だが、逃げるなよ」

「そんなつもりはないわ」

訝しげに念を押したレオナルドに、ターニャは冷たく答えると、

アパートの階段を小走りで駆け上がりついた。

「はい」

アパートから出てきたターニャは、待たせていたレオナルドに、口の部分を折り返した紙袋をそつなく手渡した。レオナルドは不思議そうな顔で受け取り、顔の位置まで持ち上げてじっと眺める。

「何だこれ？俺へのプレゼントか？」

「あなたのジャケットの燃えかすよ」

「何つ？！」

レオナルドは焦つて紙袋の口をバッと開き、顔を突っ込まんばかりに中を覗き込んだ。

「燃えてない……よな？」

そう言いながら折り畳まれたジャケットをそろりと取り出し、表を眺めたり裏返しにしたりして確認する。しかし、ビニも燃えてない。

結局、ターニャは燃やすことができなかつたのだ。

渡すものだけ渡したあと、素知らぬ顔でこっそり帰らうとしたターニャを、レオナルドは手首を掴んで引き留める。ニシ、と口の端が吊り上がつた。

「ようやく俺を好きだと認めたな」

ターニャはカツと顔を真つ赤にしてあたふたとする。

「べつ、弁償しろって言われたら困るから！だから燃やすなかつただけよ！…」

「この期に及んでまだそんな意地を張るのか。まあそんなところも可愛いけどな」

「年下のくせに、年上に向かつて可愛いとか言わないでっ！」

突然、レオナルドは真剣な表情になると、ターニャの両方の手首を掴んで壁に押しつけ、ぐいと顔を近づけた。鮮やかな青い瞳で、じっと心の奥底を見透かすように覗き込む。ターニャはますます自分が熱を帯びていくのを感じた。

「なつ、何よ……」

「おまえが好きだ

まっすぐな言葉と眼差しに、ターニャの心臓はドキンと跳ねた。田を見開いたまま動きが止まる。その一瞬の隙に、レオナルドは掠めるようにターニャの唇に口づけた。

な、な、な、

一何するのよ！ は、初めてだつたの！ 一！」

ターニヤはあまりのことにパニックになり、ゆでだこのようになじ耳まで真っ赤にして、わけもわからずぼろぼろと涙を流した。手首を掴まれたままで、頬を伝う涙を拭つうともできず、浅くしゃくり上げながら震える口を開く。

たのに……！

「それなら、いま咲くただろ、」

卷之三

「うわあ、机の上に置かれてる本が全部、

「なつ…………バカつ！
変態！！！ 最低つ！！！」

そう喚き立てながら抵抗するターニャを、レオ

せすぎゅっと抱きしめた。ターニャは泣きながら彼の背中を叩いていたが、次第にその手は弱まっていく。やがて完全に動きを止める

と、レオナルドの胸に顔を埋めて小さく鼻をすすつた。

本当にどうしようもないくらい最低……あなたも……私も？？。
レオナルドの背中にまわした手に、ターニャは戸惑いながらもそ
うそく手を握った。

つと力をこめた。

ふー……。

手持ちの仕事が一段落したジョシュは、細く息を吐いて椅子にもたれかかった。背筋を伸ばしながら、何とはなしに奥へ続く通路に目を向ける。見えるわけでないことはわかつていたが、それでもいつも無意識に目を向けてしまうのだ。

あいつ、どうしてるかな？？。

僅かに眉を寄せながら再び溜息をつくと、目を閉じて彼女の姿を思い浮かべた。

アカデミーを卒業したコールベルが、正式に魔導科学技術研究所に勤務するようになったのが約一ヶ月前のことだ。同時に配属先が伝えられたが、それは誰もが驚かざるをえない異例のものだった。彼女の配属先は、レベルC 特別研究チーム？？。

研修のときと違うチームに配属されることは通例であり、ジョシュも覚悟はしていたが、異例なのは彼女が配属されたそのチームである。研究所でも限られたものしか入室が許可されていない、立入制限区域で研究を行う特別チームなのだ。そこでは機密事項を含む高度な研究が行われていることもあり、相応の実績を上げ、なつかつ身辺がクリーンであると判断された所員のみが配属される。新人が配属されることなど通常はありえない。誰が考えてもラグランジエ家の力が働いているとしか思えなかつた。

おそらくはサイファの仕業だろう。

しかし、不思議と怒りは湧いてこなかつた。表沙汰にはなつていのものの、研修のときに、彼女はラグランジエの名のために襲われかけたことがあつた。今回の配属は、二度とそのような目に遭わせないための配慮なのだろう、とジョシュは好意的に解釈していた。完璧ではないにしろ、一般フロアと比べて安全であることには違い

ない。セキュリティはしつかりしているし、何より、特別チームにはレイモンドのような愚か者はいないはずである。

問題は、ジョシュがそこに立ち入る権限を持つていないことだ。当然のように仕事上の接点もなくなり、一ヶ月も経つといつのこと、彼女とはまだ言葉を交わしたことすらない。何度も廊下を通り、見かけたことはあるが、勤務中では、用もないのに追いかけて声をかけることなど出来はしない。もともと、立入制限区域への入室を許可されているサイラスは、勤務中にときどき用もなく彼女の様子を見に行っているようだが……。

せめて食堂で会えないかと、行くたびに彼女の姿を探しているが、一度も見つけたことはなかつた。食堂ではなく自席で食べているのかもしれない。特別研究チームにはそうする人が多いという話を聞いたことがある。彼女もまわりに合わせている可能性はあるだろう。

昼休憩の時間になり、ジョシュはひとりで食堂に向かつた。スペゲティとサラダの載つたプレートを持ち、あたりをぐるりと見まわして、残り少ない空席を見つけようとする。同時にコールベルの姿も探すが、それは習慣のようなものであり、もはやほとんど期待はしていなかつた。

しかし、その日、ついに見つけた。

一瞬、我が目を疑つたが、見間違いであるはずがない。顔はよく見えないものの、腰近くまである緩いウェーブを描いた金の髪も、後頭部で結ばれた白い包帯も、間違いなく彼女のものである。ジョシュはそのテーブルの前に立つと、少し緊張しながら、窓際にひとりで座つている彼女に声を掛けた。

「ここ、いいか？」

コールベルは驚いたように顔を上げた。呆然としながらも、小さくこくりと頷く。

ジョシュは冷静を装つて席に着いた。

「元気でやつてるか？」

「ええ」

「そうか、良かった」

素つ気ないくらいの短い会話を交わすと、ジョシュはフォークを手に取り、黙々とスペゲティを食べ始めた。しかし、半分ほど口にしたところで手を止めると、そつと彼女に目を向けて尋ねる。

「おまえ、いつも姿を見ないけど、食堂には来てないのか？」

「食堂で食べているけれど、お昼休み、ずれることが多いから」

その理由にジョシュは納得した。基本的に、特別研究チームというの、研究のこととなると寝食を忘れるような人間が多い。彼らにとつては昼休憩など重要ではないのだろう。

「大変だな」

「食堂が空いていて助かっているわ」

「それは言えるかもな」

ジョシュは小さく笑いながら言った。つられるように、彼女の顔も僅かに綻ぶ。それを見たジョシュの顔はほんのりと熱を帯びた。彼女に悟られないようこつこつと、黙々と冷たいサラダを口に運ぶ。

「ごめんなさい」

「えつ？」

不意に落とされた小さな謝罪に、ジョシュは驚いて顔を上げた。そこには、何かをこらえるような、彼女の沈鬱な表情があった。

「新人が特別研究チームなんて、異例だつて聞いたわ」

「そんなこと俺は気にしてない。おまえも気にするな。謝る必要なんてないんだ」

彼女がこういうことを気にするようになったのは、おそらく、研修のときにジョシュが冷たく当たつたせいである。その理由がラグランジエ家にあることを知り、彼女は自分を責めるようになったのだ。

「おじさまには抗議したけれど、聞き入れてもらえなかつた」

「おまえを守るために必要だと思つてやつたことなんだろう」

ジョシュは腹立たしくもサイファの肩を持つような発言をしてしまった。それだけ必死だった。しかし、その甲斐もなく、彼女はいまだに表情を曇らせたままつむいていた。

「もしかして、誰かに何か言われたのか？」

眉をひそめたジョシュの問いに、ゴールベルは小さく首を横に振つた。

「みんな良くしてくれるわ」

「だつたら一人で氣に病むな。おまえは自分に出来るることを精一杯やればいい」

それは自身のことを棚に上げた発言だつた。いつも一人で後ろ向きなことばかり考え、自分に嫌気が差し、他人に当たり散らしている。そんな人間が言つたところで、説得力などあるはずもない？？。しかし、ゴールベルはこくりと真摯に頷いた。

そのことで、ジョシュは逆に自分が励まされたように感じた。単なる自己満足かもしれないが、彼女の力になれたことが嬉しかつたのかもしれない。自分が認められたように思えたのかもしれない。ほつと安堵の息をつくと、再びスペゲティを口に運び始めた。

カタン？？。

彼女より先に食べ終わつたジョシュは、どうしようかと思案しながらフォークを置いた。

「のまま席を立つてさよならしては、今度いつ会えるのかわからぬ。この調子だと数ヶ月後といつとも十分に考えられる。それに、今日のようく運良く会えたとしても、こんな短い会話だけでは、自分と彼女の関係は何ひとつ変わりはしないのだ。だとしたら？？」
「今度の休日、どこか行かないか？」

「……えつ？」

意を決して切り出したジョシュの耳に、明らかに戸惑いを含んだ声が届いた。彼女は訝しげに言葉を繋ぐ。

「どうして？」

「どうしてって……」

まさか理由を訊かれるとは思わず、今度はジョシュが戸惑った。しかし、考えてみれば随分と唐突な話であり、不審に思われても当然のことだらう。もしかすると、レイモンドとのことがあったので、この手の話には警戒しているのかもしれない。

俺は、あいつとは違う？？。

ラグランジュの名前などに興味はない。そんなもののために彼女に近づこうとしているわけではない。ジョシュは斜め下に視線を落とすと、テーブルに載せた手をギュッと握りしめた。

「好きだからだよ」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに、プレートを持つて席を立ち、彼女の視線から逃れるように背を向ける。

「今度の休日、朝9時に研究所の前で待つてる」

ぶつきらぼうな口調で一方的にそう告げると、彼女の返事を聞かないまま、返却口に向かつてその場から足早に立ち去つた。彼女がどんな顔をしているのか気になつたものの、それを知るのが怖くて、食堂を出るまで後ろを振り返ることも出来なかつた。

「朝9時つて何だよ……」

ジョシュは研究所の前で壇に寄り掛かりながら、大きく溜息をついてうなだれた。

今度の休日、朝9時に??。

とつさにそう言つてしまつたものの、遠出するわけでもないのに、朝9時に待ち合わせなどどう考へても早すぎる。子供でもこんなに早く遊びに行きはしない。住宅街から離れた場所柄も関係しているのだろうが、実際、まわりにはほとんど人影もなく閑散としていた。それ以前に、一方的に約束を押し付けたことが一番の問題である。いや、断る隙すら与えなかつたのだから、そもそも約束にさえならないのだ。臆病ゆえにそんな態度をとつてしまつたのだが、彼女の目にさひや傲慢に映つたことだらう。もしかすると、レイモンドとたいして変わらない男だと思われたかもしれない??そのおぞましい想像を否定するように、必死にブンブンと首を横に振つた。腕時計に目を落とす。もう間もなく9時である。

ジョシュは青空を大きく仰ぎ見て、細く長く溜息をついた。彼女は来ないかもしぬない。来なくても当然だと思つ。それでも一応10時くらいまでは待つてみよう、そう考えたそのとき??。

「ごめんなさい、遅くなつて」

コールベルが駆け足でやつてきた。少し息を切らせながらそう言う。薄手の白いワンピースがひらひらと揺れて目に眩しい。

「……来たのか?」

「どういう意味?」

「あ、いや……」

コールベルは怪訝に小首を傾げて、ジョシュをじつと見つめている。来いと言われて来たのに、来たのかなどと問われては、確かに不安にもなるだろう。慌てて、ジョシュは少々ぎこちない笑顔で取

り繕つた。

しかし？？。

彼女は嫌ではなかつたのだろうか。嫌だつたが仕方なく来たのだろうか。好きだからと言つたことに対しては、どう思つているのだろうか。次々と疑問が頭に浮かぶが、どれも口には出せなかつた。

「それで、どこへ行くの？」

「……え？」

ジョシュは大きく瞬きをして、口もとを引きつらせたまま硬直した。ゴールベルを誘うことで頭がいっぱいになつてしまい、肝心なその後について何も考へていなかつたことに、彼はこのときになつてようやく気がついた。

「悪い、こんなところしか思いつかなくて……店はまだ開いてないし……」

「人の多いところは苦手だから、こういうところの方がいいわ」そこは公園だつた。広々とした芝生の奥に、大きな湖が続いている。まだ午前中のためかあまり人は多くなく、ランニングしている人、ボール遊びをしている人、散歩をしている人、木陰のベンチに座つて読書をしている人が、ちらほらと目につく程度である。

二人は木陰の下に、ジョシュの上着をひいて座つていた。

ゴールベルは軽く膝を抱え、ぼんやりと青い空を見上げている。緩やかなウェーブを描いた金の髪が小さく揺れ、後頭部で結ばれた白い包帯もひらひらと舞つ。その横顔を見つめながら、ジョシュは出来るだけ何気ない口調で切り出した。

「卒業おめでとう」

ゴールベルはふわりと髪を揺らして振り向いた。半開きの口できよとんとしたあと、少し恥ずかしそうにうつむき、小さな声で「ありがとう」と応じる。

「首席卒業だつて？なんか代表で挨拶したつてサイラスから聞いた」

「私、ああいつのは苦手なのに、辞退は許してもらえたかったから……」

彼女はますます深くうつむくと、膝を引き寄せて顔を埋める。その照れたような仕草が可愛くて、ジョシュは小さく笑みをこぼした。

「サイラスとはよく会っているのか？」

「今はときどき様子を見に来てくれるだけ」

ジョシュもそれほど頻繁にサイラスと会っているわけではないが、彼はそのたびにユールベルの話をしていた。その内容から察するに、彼女がアカデミーを卒業するまでは、毎日のように会っていたようだ。今は「ときどき」ということらしいが、週に2、3回は顔を合わせているのだろう。彼の話だけが今の彼女を知る唯一の手掛かりであり、その点ではとてもありがたく感じていた。しかし、同時に、自分自身に対する不甲斐なさも感じずにはいられなかつた。

サイラスには水をあけられるばかりだな？？。

彼は立入制限区域に入る許可を持っており、ときどき特別研究チームの手伝いをしているようだつた。今はアカデミーの教師がメインであるが、約束の4年を終えれば、おそらくは正式に特別研究チームへ配属されるのだろう。いまだに下つ端の自分とは雲泥の差である。

そんな人間には、ユールベルと会う資格はない。

まるで現実にそう諭されているかのようだつた。しかし、今日彼女に会つて、諦めたくないという思いをいつそう強くした。勝手に卑屈になつて身を引くなんてことはしたくない。いや、もうしないと決めている。だからといって焦ることも禁物だ。レイモンドの件で傷ついているだろう彼女を、意図せず傷つけてしまう結果にならかねないのだから？？。

「やあ、ジョシュにユールベルじゃないか。こんなところで何をやつてるんだ」

ビクリとして振り返つたジョシュは、その声の主を目にし、思い

きり顔をこわばらせて絶句した。ややあつて我にかえると、慌てて立ち上がり、コールベルをかばつように彼の前に立ちふさがる。

「レイモンド……おまえこいつ、どうこいつもりだ」

「ここの格好を見たらわかるだろ？ ランニングだよ。研究ばかりしているひょろっこいおまえとは違つて、俺はこの体をつくるために相応の努力しているのさ」

確かに彼はランニングシャツに短パンといつ、いかにもな格好をしていた。あまり気にしたこともなかつたが、剥き出しになつた彼の腕や脚は、適度に筋肉がついていてたくましく見える。だからといつて、彼の言うことを鵜呑みにはできない。

「そんなこと言つて、何かたくらんでるんじゃないだろ？ な」

「悪いが、今は他にターゲットがいるんでね」

そう言つて、レイモンドはフツと笑つて口もとを斜めにする。

「ジョシュ、研究所での君の態度は忘れていない。覚悟しておけよ。結果的にラグラソジエ本家の次期当主に唾を吐いたことになるんだからな」

その意味が掴めず、ジョシュは眉をひそめる。しかし、コールベルにはすぐにわかつたようで、ジョシュの後ろに座つたまま、じつと上目遣いにレイモンドを睨んでいた。

「あなた……、本当におじさまに殺されるわよ」

「自由恋愛を妨害する権利が彼にあるとでも？」

「あなたは自由でも、相手にとつては不自由だわ」

「君のときのような強引な手を使うつもりはないこわ。何せ相手は子供だからな。今度はじつくりと時間をかけて口説いていくつもりだ」

「一人の会話を聞いているうちに、ジョシュにも話が見えてきた。

どうやらレイモンドは、ラグラソジエ家当主？？すなわちサイファ？？の娘と結婚して、自分が次期当主に收まるつもりらしい。サイファに悪感情しか持たれていないであらう彼が、ラグラソジエ家に入ることなど、ましてや次期当主として迎えられるなど、到底あり得る話ではないと誰もが思うはずだ。しかし、彼がそのつもりで

行動を起こすのなら、ターゲットの娘が無事で済むかが心配である。強引な手を使わないという言葉を信じていいかわからないし、そもそもとしても、子供ならば表面的な優しさにコロリと騙される可能性も高いだろ？？？とジョシュは思ったのだが、コールベルの考えは違つたようだ。確信したような強い眼差しで断言する。

「彼女は私ほど愚かじやない。絶対にあなたの思いどおりになんかならないわ」

「ふむ……なるほど……」

レイモンドはゆっくりと右手で顎を掴んで考え込むと、やがて一人納得したように頷き、眞面目な面持ちでコールベルを見つめて自分の胸に手を当てた。

「俺にも情はある。君が泣いて謝るのなら、当主の座は諦めて君と結婚してやつてもいい」

何を勘違いしたのか、それともわざとなのか、上から目線で見えないくらい勝手なことを言つ。コールベルは何とも言えない微妙な表情で言葉を失つていた。彼の身勝手さをよく知つているジョシュも、さすがに開いた口がふさがらない。

「俺としても口の上に子供っぽいガキなんて、当主の娘という肩書きさえなければ相手をする気も起きないわ。その点、君はいろいろと楽しませてくれそうだからな」

レイモンドはそう言つと、いやらしく片方の口角を吊り上げ、舐め回すようなねつとしとした視線をコールベルに絡ませる。まるで白いワンドペースの中の肢体を、その目には映しているかのようだつた。彼女はぞくりと身を震わせると、自分の腕を抱え、その視線から逃れるように大きく顔を背けてうつむいた。緩やかなウエーブを描いた髪がはらりと落ち、彼女の表情を隠す。

「やめろ！！」

ジョシュはあらためて二人の間に割り込むと、両腕を広げ、レイモンドの視界から必死に彼女を隠そうとした。そして、ありつたけ

の嫌悪感を瞳に込め、斬りつけるように激しく睨む。腹立たしいと思つたことは数えきれないほどあるが、ここまで誰かを憎いと思ったのは初めてかもしない。いつそサイファに殺されてしまえとさえ思つた。

しかし、レイモンドは痛くも痒くもないよつで、小馬鹿にしたよう鼻先でフツと笑う。

「相変わらず姫を護る騎士か？　どうせそれ以上の進展もないんだろ？」「……だつたら何だ」

背後のコールベルを気にしながら、ジョシュは小さな声でぼそりと言つ。

そんなジョシュを見て、嫌がらせのよつて、レイモンドはよつといつそう声を大きく響かせる。

「残念だつたなあ？　せつかくコールベルを抱かせてやる約束をしてたのに、俺がこんなことになつたせいで約束がおじやんになつて」ジョシュは目を見開き、息をのんで顔を真つ赤にした。

「やつ……約束なんにしてないだろ？　おまえが勝手に……！」「ま、せいぜい一人で頑張ることだな。アドバイスくらいならしてやるよ」

「つるせこつ……」

ジョシュがいきり立てば立つほど、レイモンドは愉快そうに笑う。その不快な笑い声は、広い空に高らかに響いた。ひとしきり笑うと、ジョシュの肩を軽く押しのけ、腰を屈めてコールベルを覗き込みながら白い歯を見せる。

「コールベル、その気になつたら王宮を訪ねてくれ。間違つても、いんな出世の見込みもないよつな男なんて相手にするなよ」

ジョシュが反撃して押し返そつとすると、レイモンドはひよいと身軽に避けて数歩後退する。そして、ランニングのポーズをとつて足踏みを始めると、じゃあなと右手を上げて、何事もなかつたかのようになどり軽く湖の方へ走つていつた。

ジョシュはおずおずとゴールベルに振り返った。何も言わずにじつとジョシュを見上げている、感情の窺えないその瞳に怯えながら、誤解を解こうとあたふたと両手を動かしながら口を開く。

「あ……あんな、レイモンドが言つた約束とか何とか、あれ、俺、そんな約束なんてしてないから。あいつが一方的に言つてきただけで、俺はそんなつもりなくて……」

必死になればなるほど、出来の悪い言い訳のようになつていく。そのみつともなさに耐えきれなくなり、思わず頭を抱えて彼女に背を向けた。

「私は……」

遠慮がちに切り出された彼女の声に、ジョシュの鼓動は大きくてクンと打つた。どんな言葉をぶつけられるのか怖かった。背筋が凍り付くような冷たさと、頭から熱湯をかぶつたような熱さを同時に感じ、何も考えられないほどに眩眩がした。しかし？？。

「私は、ジョシュのことを信じていいから」

彼女は静かな声で囁みしめるようにさつさつと語った。驚いてジョシュは振り向く。

「信じて……くれるのか？」

「あなたはそんなことを望む人じゃないもの」

「……」

深い森の湖のような瞳で見つめながら、まっすぐさつさつと語ってくれる彼女に、ジョシュは一の句が継げなかつた。眉を寄せてうつむき、額に右手を押し当てる。一度は忘れようとした罪悪感が、急に胸の内を支配して、息が出来ないほどに苦しくなる。

「どうしたの？」

「……夢を、ときどき見るんだ」

話が見えないゴールベルは、地面に手をついて身を乗り出し、不思議そうに下からじつと覗き込む。しかし、ジョシュは彼女を見ることができず、顔をそらして、額を押さえていた手で両目を覆つた。

ずっと隠してきたことを、あふれくる感情にのせて吐露する。

「場面はあのときの資料室で……だけど、コールベルに跨がっているのは、レイモンドじゃなく俺で……」

「夢、でしょ？」「う？」

「そう、現実ではなく夢である。だけど、それは自分自身が見せているもので？？」

「何度も見るのは、どこか俺の願望が入ってるのかも知れない」

「……もしかして、以前、私を避けていたのって、これが原因なの？」

訥々と紡がれる疑問に、ジョシュは顔を隠したまま小さく頷いた。その夢を見るよになつてからは、彼女への罪悪感と、自分に対する嫌悪感とで、まともに彼女と接することが出来なくなつた。いや、彼女と接していい人間ではないように感じたのだ。

「そんなことだつたなんて……」

「そんなことって、おまえ……」

半ば呆れたように溜息まじりに言われ、思わずジョシュは目を覆つていた手を外し、困惑ぎみに彼女を見下ろして言い返す。しかし彼女は淡々と続ける。

「夢を見るごとに実際に行動を起すことは違うわ」

「それは、そうだけど……」

ジョシュは複雑な表情で眉を寄せた。確かに現実と夢とでは重みが違うが、夢だからといって気にならないわけではないだろう。きっと嫌な思いをしているに違いない。

「言わなければわからなかつたのに」

「……嫌な話を聞かせて悪かつた」

ジョシュは彼女の前に膝を折つて座り、うなだれるよつて頭を下げる。コールベルは無表情のまま首を横に振つた。

「俺を、許してくれるか？」

「あなたは何も悪いことなんてしていない」

それが本心かどうかはわからない。しかし、彼女が自分のことを否定しないのならば、勝手に先回りして自ら身を引くようなことはしたくないし、してはならないと思つ。

だから、俺は？？。

芝生のうえで握りしめた手が汗ばんできた。ぐっと力を込めて握り直す。そして、しばらく考えを巡らせると、少し顔を上げ、ごくりと唾を飲み込んでから口を開く。

「じゃあ、来週も、会ってくれるか……？」

ユールベルは瞬きをしてきょとんとした。そして小さくくぐりと頷く。相変わらずの無表情だったが、ジョシュがほつとして緊張を解くと、彼女の表情も少し緩んだように？？わずかに微笑んだように見えた。

「一人でウチに乗り込んでくるなんて、おにいさん結構いい度胸してるよね」

「度胸つて何だよ！」

「姉さんとのことを僕に追及されるつて思わなかつた？」

.....

初めて彼女と一人で休日を過ごしてから3週間、ジョシュは毎週ユールベルと会っていた。今まで公園など外で会っていたのだが、今日は彼女の家で会う約束をして、ここへやって来たのである。もちろん彼女の弟がいることは承知の上だ。むしろ、一人きりだったら彼女の家に上garことはなかったに違いない。彼女も警戒するだらうし、自分も遠慮しただらうと思う。

彼女の思考は相変わらずわからないままだ。なぜ自分一人でいられるのだろう。自分一人で

対してどう感じているのだね。自分のことをどう思つていいのだ
らう？？。聞きたいことは山ほどあつたが、実際に聞くことは躊躇
われた。聞いた瞬間にすべてが失われてしまつよつた、そんな気が
して怖がつたのだ。

ただ、少なくとも嫌われてはいないうだろ」という確信はあった。今はそれで十分である。レイモンドとのことが心の傷になつてゐるかもしれない彼女には、慎重すぎるくらいに進めるのがちょうどいいはずだ。焦らずに少しずつ彼女との距離を縮めていけたらしい。そして、いざれは？？。

「姉さんどうされましたの？ その辺、イマイチせつせつしないんだが？」

アンソニーはソファに座つたまま、膝に腕をのせて身を乗り出し、

眉をひそめながらジョシュに尋ねる。

付き合いつと/or/いうのが恋人になると同義ならば、現時点での答えは否としかいいようがない。彼女の気持ちは聞いていないし、毎週会つているのは確かだが、ただ並んで歩くだけで手さえ繋ぐことはないのだから。

ジョシュは考え込んだまま返事をしなかつたが、微妙に曇った表情を見て、アンソニーはだいたいのところを察したようだつた。面倒くさそうに溜息をついて上体を起こす。

「ほんと焦れつたくて仕方ないんだけど。子供の恋愛じやあるまいし何やつてんのかなあ。おにいさんもう30近いんでしょう? いい大人つていうか、そろそろおじさんだよ?」

「おまえには関係ないだろ?」

「相手が姉さんじやなればね」

アンソニーは頭の後ろで手を組みながら言った。

「僕としてはさ、先生一押しだつたんだよね。姉さんには、先生みたいな優しくて穏やかな人がいいんじやないかなつて。まあ、先生にその気がなければ仕方ないんだけどさ。どうなんだろ? 先生つて姉さんのこと好きじやないのかなあ?」

ジョシュにとつて、それはあまり考えたくないことだつた。もしも、サイラスがゴールベルに好意を寄せているとしたら、そして行動を起こしたとしたら、自分ではとても敵わないだろ?と思つ。そして、サイラスの方が彼女を幸せにできるのではないかと??

「ねえ、先生に聞いてくれない?」

「自分で聞いてくればいいだろ?」

不安からか、思わずそんな突き放すような言い方をしてしまう。

アンソニーは体を起こして前屈みになると、もの言いたげにじつとジョシュを見つめた。

「おにいさんは姉さんのこと好きなんだよね?」

「……ああ」

あまりにも直球な質問にこたえか動搖しながらも、ジョシュは正

直に答えた。そのことはコールベル本人にも言つてあるし、アンソニーもとつぐにわかつてゐるようなので、今さら隠す必要はないだろつと思つ。

「それで、どうしたいわけ？」

「どう、つて言われても……」

「念のため言つておくけど、たいして本氣でもないのに思わせぶりな態度をとつたり、ちょつかいを出したりして、姉さんを傷つけることだけはやめてよね。そんなことをしたら、僕、絶対におにいさんのこと許さないから」

「俺は、本氣だ」

本氣だからこそ、彼女に対しこれほど慎重になつてゐるのだ。決して思わせぶりな態度をとつてゐるつもりはない。しかし、アンソニーはまだ信用していなかつた。険しい表情でぐいっと身を乗り出して問ひ詰める。

「全部まるい」と受け止める覚悟はあるの？」

「……ああ」

彼の迫力に氣おそれながらも、ジョシュは真剣な顔で頷く。にもかかわらず、アンソニーはソファにもたれかかつて深く溜息をついた。僅かに顎を上げて、疑いの眼差しをジョシュに流す。

「本当にわかつてゐのかな……」

「何がだ？ どういうことだ？」

何か含みがありそうなアンソニーの言動に、ジョシュは眉をひそめた。

「ま、とつあえずおにいさんのこと信用しておへ」

「あの、コーヒー……」

背後からのコールベルの声に、ジョシュはビクリと体を震わせた。アンソニーと話しているうちに、彼女が隣の台所にいることをすっかり忘れてしまつてゐた。二人とも声をひそめていなかつたようだ。思つので、もしかしたら会話を聞かれてしまつたかもしれない。

コールベルは無表情のまま、トレイにのせたコーヒーをテーブル

の上に置いていく。

ジョシュは息を詰めたままその横顔を窺い、特に意識している様子はなさそぐだとわかると、ほつと小さく安堵の息をついた。

「ねえ姉さん、おにいさんかね、姉さんのこと……」

「わーっ……！」

アンソニーが「ココ」しながらコールベルに話し始めると、ジョシュは血の気が引いて頭が真っ白になつた。妨害するよつて大声を上げて、あたふたと両手を伸ばす。

「なに……？」

「い、いや……」

ビクリとしたコールベルを見て、ジョシュは我に返つた。不安の拭えないまま再びアンソニーに目を向けると、彼は白い歯を見せて悪戯っぽく笑つていた。またからかわれたのだと脱力する。

それでも、本当にコールベルに言われてしまうよりはいいだろう。後ろめたいことは何もないが、それはいつかあらためて自分から彼女に伝えるべきことであり、こんな軽い調子で暴露されるのだけは勘弁してほしいと思つた。

コールベルが淹れてくれたコーヒーを飲んで一息ついたあと、ジョシュは大きなガラス窓を開けて、コンクリートのベランダに出た。雲ひとつない鮮やかな青空から燐々と陽光が降り注ぎ、そのまましさに思わず目を細める。そして、あまり広くはないそこにしやがみ、持つてきたビニール袋から中身をひとつずつ出して広げた。白いプランター、袋に入った土、肥料、スコップ、そして花の種である。

「何かと思つたら花壇だつたんだ」

窓際にしゃがんで覗き込みながら、アンソニーが呆れたように言う。

「女の子と会うのに花束を持つてくる人はいても、花壇を持つてくるのはおにいさんくらいじゃない？」

「そうかもな。どつちも花なんだし悪くはないだろう

正確には花壇でなく鉢植えであるが、些細なことであり、ジョシユはあえて訂正しなかつた。両方の袖をまくり上げると、プランターに土と肥料を流し込み、黙々とスコップで整えていく。

「でも、もつと他にいいものがあると思つただけど。初めてのプレゼントだよね？」

「私がお願ひしたの」

ジョシユの代わりに、アンソニーの隣に立つコールベルが答えた。そう、これは彼女が望んだことなのだ。別にジョシユの独断でプランターを抱えてきたわけではない。いくらなんでも、頬まろもないのにこんなものを持ってきて押しつけるほどの図々しさは持ち合わせていなかつた。

一通りプランターの土をならして準備を整え、種をまき始めると、アンソニーも面白がつて手伝い始めた。

「おにいさんつて何となく無趣味な人かと思つてたなあ

「別にこれは趣味つてほどでもないけど……」

一人暮らしの部屋はあまりに味気なく、また人恋しさも手伝つてか、何とはなしにプランターで花を育てるようになつただけである。特に詳しいわけではない。ただ適当に種をまいて水をやつて草をむしるといふのは咲いてくれた。花の種類にこだわりがないので、育てやすいものばかりを選んでいるからだらう。

先週、そういう話をコールベルにしたら、意外なことに、彼女は自分も育ててみたいと言つた。これまで彼女が自分から何かをしたいということはほとんどなく、何に关心があるのかもわからなかつたので、少しでも彼女を知る手がかりを得られたことが言いようのないくらいに嬉しかつた。

「適当に水をやつてれば育つと思つけど、うまくいかなくとも気にするなよ」

念のため、窓際に立つてゐるコールベルにそう釘を刺す。ジョシユも仕事が忙しかつたときに少し枯らしたことがあつたが、それだけでけつこう落ち込んでしまつた記憶がある。できればそんな思い

を彼女にはさせたくないが、生物である以上、絶対に駄目にしない方法などないこともわかつて いた。

「 適当つて……？」

「 俺もあんまりよくわかつてないけど、土が乾いてきたらやればいいんじやないかと……あ、やりすぎもよくないからな。様子を見て調整していけばいいと思つ」

「 コールベルは不安そうな面持ちながらもこくりと頷いた。

「 おにいさん、どうせたびたび見に来るつもりなんだよね？」

アンソニーは「 どうせ」に力を込めて皮肉っぽく言つ。確かに、彼女に任せきりにするのではなく、ときどきは成長具合を確かめに来た方がいいかもしれない。しかし？？ ジョシュは彼の眼差しから逃れるように、プランターを見つめたまま目を細めた。

「 それは……コールベルが望むのなら……」

「 私は、ジョシュさえ迷惑でなければ……」

呼応するように頭上から降つてきた彼女の声。

ジョシュはドキリとしてそこに立つ彼女を見上げた。いつものようく感情の窺えない表情をしていたが、少し視線を外して目を泳がせたり、心持ち肩をすくめて後ろで手を組んだりして、どこか落ち着きなく感じられた。まるで、恥じらつているかのように？？。

それは勝手な解釈かもしれない。

しかし、来ることを許されたのは事実である。

ジョシュは柔らかくふつと表情を緩めると、行くよ、と小さいながらもほつきりとした声で言つた。

ベランダに座るジョシュ、窓際にしゃがむアンソニー、その隣に立つコールベル？？ 3人は、あたたかい日差しと緩やかなそよ風を感じながら、それ無言でたたずんでいた。心地いい昼下がりが、眠気を運んでくる。ジョシュはあくびを噛み殺しながら、雲ひとつない穏やかな青空を見上げた。

「 花が咲く頃にはどうなつてるかなあ」

アンソニーはプランターを見つめながら、からかうよつよつな口調でなく、ぼんやりと独り言のようになつてついた。

ジョシュも、コールベルも、何も答えなかつた。

けれど、そこには気まずい空氣はなく、ジョシュはつむいたまま目を細めて、その近くで遠い未来のことをおぼろげに遠慮がちに思い描いた。

研究所の食堂で、ジョシュはいつもよりドロセットを注文した。ゴールベルに会えるのではないかと期待して、このところジョシュは少し遅めに来るようになつたのだが、あの転機となつた出会い以降は、一度も食堂では見かけていない。彼女は正規の休憩時間より後になることが多いのだろう。それだけに、あのとき会えたことは運命のような気さえしていた。

少しだけ人波の引いた食堂をぐるりと見渡す。

おそらくいらないだろうと思っていたが、その日は窓際に彼女が座つていたのを見つけた。緩やかなウェーブを描いた金の髪と、後頭部で結ばれた白い包帯？？ジョシュの胸はそれだけで熱くなる。今にも走り出したい気持ちを抑えつつ、彼女の方へゆっくりと足を向けた。

しかしその瞬間、ある光景を目にし、とつせに近くの柱に身を隠した。

ゴールベルの前にサイラスが座つていたのだ。

別に隠れる必要はなかつた。研究所の食堂で一緒に昼食をとつているだけで、やましい現場でも何でもない。一人ともジョシュの知り合いであり、声を掛けて同席を求めればいいだけのこと、邪魔をしたくなれば黙つて離れればすむだけのこと。なのに？？。

ジョシュは柱の陰になつた席に腰を下ろし、後ろめたさを感じつも、二人からは見えないであろうその場所からこつそりと聞き耳を立てた。

「でも、そつはならないんじや……」

「前提条件が違うんだよ。限りなく絶対零度に近い温度で反応されば、理論上は上手いくはずなんだけど、実際に実験をするのは難しそうだね。今の研究所の設備では無理だつて言われたよ

どうやら一人は研究の話をしているらしい。食事中までこんな話をしなくとも、と思うものの、そういう会話が出来る一人をジョシコはうらやましく思った。ジョシコは、サイラスとも、コールベルとも、眞面目に研究の話をしたことなどほとんどない。自分にそれだけの知識も能力もないからだろう。

しばらく研究の話が続いた。

ジョシコの手にはフォークが握られているものの、ただ握つているだけで、サラダの上で微かに揺れながらとどまっている。背後の二人が気になつて、食事をするどころではなかつた。

「ねえ、コールベルって休日は何をしてるの？」

その質問にジョシコの心臓はドキリと跳ねる。

「別に……」

コールベルは「まかすよ」つて口にもつた。ジョシコの名前は出でこない。ほつとしたような、残念なような、相対した気持ちがジョシコの心に渦巻いた。それでも、今はこれでいいのだと自分に言い聞かせる。

だが、話はこれで終わらなかつた。

「じゃあさ、今度の休日、もし良かつたらどこか遊びに行かない？」

「えつ……」

気楽なサイラスの言葉と、戸惑いを隠せないコールベルの声。そのとき一人がどんな表情をしているのか、気になつて仕方なかつたが、柱の陰から顔を出すなどという危険なことはできない。ただフオーレを握りしめたまま、奥歯を食いしばり、じつとぞくらかの次の言葉を待つ。

「あ、別に無理しなくていいんだけど」

「そうじゃなくて、予定があるから……」

「そつか」

彼女とは次の休日も会つ約束をしている。予定とはおそらくそれのことだろう。サイラスの誘いより自分との約束を優先してくれたことに、ジョシコはほつと胸を撫で下ろした。が、それも一瞬のこと

とである。

「じゃあ、その次の休日はどうかな？」

「いめんなさい、その日も予定があるの……言い訳じゃなくて……」

「ゴールベルは申し訳なさそうに言つ。

ジョシュはフォークの先を見つめて眉をひそめた。自分がゴールベルと約束をしたのは次の休日だけである。いつも帰り際に次の約束を取り付けているのだが、その先の約束まではしたことがない。だから、彼女のその予定は、自分以外の誰かとの約束ということになる。もちろん、誰と休日を過ごしても彼女の自由なのだが??。

「そつか、じゃあ暇なときがあつたら誘つてくれる?」

「ええ……」

サイラスの声は明るいままだった。

ジョシュは口を引き結んで、フォークをサラダに突き刺した。二人が楽しそうにとりとめのない話を続けるのを聞きながら、身を隠したまま、音を立てないようにひつそりとサラダを口に運んだ。

次の休日??。

昼過ぎにゴールベルと待ち合わせをして、公園を散歩したあと、彼女が希望したアイスクリーム屋へ向かった。彼女の方から行きたいことやしたいことを言つてきたのは初めてで、少しづつ打ち解けてきている証左かもしれないとジョシュの気持ちは弾んだ。

アイスクリーム屋の店内に座っている客は、ほとんどが若い女性だった。あちらこちらから楽しそうなお喋りが聞こえてくる。その雰囲気には少しばかり居心地の悪さがあつたものの、目の前でアイスクリームを口に運ぶ彼女を見ていると、やはり来て良かつたと思わざるを得ない。

「アイスクリーム、好きなのか?」

「……多分、好き」

下を向いたまま訥々と答えるゴールベルの表情には、僅かに戸惑いが浮かんでいた。しかし、それさえも、ジョシュには可愛らしく

感じられて、アイスクリームをつつきながら自然と顔がほころんでいた。

アイスクリームを食べ終わって外に出ると、もうだいぶ日が傾き、地平近くの空が燃えるように赤く染まっていた。そろそろ帰らねばならない時間である。ジョシュは名残惜しさを感じつつ、彼女と並んで帰路につき、やがて研究所近くの交差路で足を止めた。そして、いつものように次の約束を取り付けようとする。

「再来週にまた会えるか？」

「……来週じゃないの？」

ゴールベルは不思議そうに聞き返し、少し不安そうにジョシュを見上げた。その深森の湖のような瞳にどきりとして、ジョシュは混乱した思考のままギマギと質問を返す。

「来週は予定があるんじゃないのか？」

「別に、ないけれど」

「ないって……だつて」の前おまえ……」

そこまで言いかけて、ジョシュは慌てて口をつぐんだ。しかし、少し遅かつたようである。ゴールベルは怪訝な面持ちでジョシュを下から覗き込んだ。

「この前つて？」

「あ、いや……食堂でサイラスと話してるのが聞こえて……」

正確には「聞いていた」だが、言い訳がましく「聞こえた」と言つてしまつ。もちろん、そんなことは見透かされているだろう。盗み聞きのよつなまねをしたことで、非難されるかもしれないと不安になつたが、彼女はただ困惑したように目を泳がせてうつむくだけだつた。後頭部で結んだ白い包帯が緩やかにひらひらと揺れている。

「あれは、あなたと会つてになるだつたから……」

「えつ？」

思わず口をついた短い声。

視線を落としたままの彼女を見つめながら、ジョシュは気持ちを

落ち着けて、彼女の言葉の意味をよく考えてみる。つまり？？彼女には誰かと約束があつたわけではなく、自分との約束のために予定を開けておいてくれたということですか？？

少しばかり期待していいのか？

次第に鼓動が速さを増し、そして強くなつていいく。体から飛び出さんばかりの動きがはつきりと認識できる。それでも、精一杯の平静を装うと、僅かにうわずつた声で言つ。

「じゃあ、来週でいいな」

ユールベルは小さく首を縦に振つた。そして、ちらりと上目遣いにジョシュを窺う。視線が合つと、ジョシュは少し顔を赤らめながらぎこちなく笑いかけた。つられるように彼女も戸惑いがちに小さく笑つた。

少し冷くなつた風が、彼女の長い髪と白いワンピースをふわりと揺らす。

ジョシュは彼女の方へ手を伸ばしたい衝動を抑えつつ、その手を小さく挙げ、またなと言つて背を向けながら歩き出した。その足取りは軽い。薄暗くなつた空を田を細めて仰ぐと、浮かれる気持ちを静めるように、大きく胸いっぱい深呼吸をした。

「コールベル！」「ちー！」

奥の席に座っていたターニャは、喫茶店に入つたコールベルを見つけると、少し腰を浮かして大きく手を振つた。今までがあちこち撥ねた癖毛だつたが、どういうわけかストレートヘアになつていたので、一瞬コールベルは面食らつたが、それを表情に出すことなく、呼ばれるまま彼女の前に腰を下ろす。

「じめんね、休日に呼び出したりして」

「ううん……」

不安げにそう答えたところで、ウエイトレスが注文をとりにきたので、少し考えてレモンティを頼む。そして、運ばれてきた水に少し口をつけて、小さく息をついた。

「久しぶりね。元気だつた？」

目の前のターニャは明るい笑顔を見せている。が、どことなくぎこちなく、落ち着きもなく、緊張しているように感じられた。

「何か話があるんじやないの？」

「えつ、ああ、まあ……」

コールベルが水を向けると、彼女は困惑して目を泳がせた。しばらく眉根を寄せて考え込んでいたが、やがて振り切るようにパツと笑顔を作つた。

「コールベルがどうしてるか気になつたのも本当だから。しばらく会つてなくて、就職してからの話もほとんど聞いてなかつたし、お仕事がんばつてるかなーって」

「……ええ、それなりに」

彼女の不自然な明るさを疑問に思いながら、コールベルはぽつりと答えた。

「まわりの人とか大丈夫？ 変な人いない？」

「みんない人ばかりよ」

今は？？と心の中で付け加える。レイモンドのことは彼女に言つてなかつたが、もう終わつたことであり、あえて言つ必要もないし言いたくもない。このことを言つべき相手がいるとすれば、レイモンドが次に狙いを定めているアンジェリカくらいである。

「あの先生とは仲良くしてゐる？ほら、えーと……」

名前を忘れてしまつたようで、ターニャは斜め上に視線を向けて記憶を辿る。しかし、それがサイラスのことだといふのは、コールベルにはすぐにわかつた。

「先生とはときどきは会つてゐるけど」

「そう、良かった」

ターニャは安堵したように息をついた。彼女はなぜほとんど面識のないサイラスのことをそれほど気にするのだろうか。もやもやした気持ちになりながらも、あえて聞こうとはせず、何となくテーブルの上のグラスに視線を落とした。

沈黙が重くなつてきたところで、コールベルの頼んだレモンティが運ばれてきた。スライスされたレモンを紅茶に沈めてそつと口をつける。その温かさにほつとして、少しだけ気持ちが軽くなつた。

「ね、ケーキも頼まない？ 遠慮しなくていいのよ？」

ターニャは思いついたように勧めてくる。今日は彼女の奢りということなので、気を利かせてくれたのだろうが、どちらにしてもケーキまで頼むつもりはなかつた。

「私、このあと用があるから」

「え？ そうなの？？」

「まだ一時間くらいは大丈夫だけ」

「そつか……」

ターニャは少し考えたあと、残つていたミルクティを飲み干した。ティーカップをソーサに置くと、ゆっくりと顔を上げて、まっすぐにコールベルを見つめる。

「私、コールベルのこと、とても大切な友達だと思ってる」

「一言、一言、噛みしめるように繋いでいくと、大きく息を吸い、

思い詰めたように表情を険しくして続ける。

「だから、私から、言つておかなくちゃって……」

ただごとでなく緊張している彼女を見て、コールベルは不安になつてきた。あまりいい話でないことは容易に想像がつく。しかし、話の内容についてはまったく心当たりがなかつた。僅かに眉を寄せながら、口を開こうとしている彼女の次の言葉を待つ。

「わ、私ね……今、レオナルドと付き合つてゐるの

ガタン？？！」

コールベルはテーブルに手をついて反射的に立ち上がつた。顔をこわばらせて硬直する。思いもしないことに驚いたというのもあるが、それだけでないことは自分自身でよくわかつていた。

「ごめんなさい、あの……」

ターニャは怯えたように身をすくめて田に涙を溜めていた。そんな彼女を見ていられなくて、コールベルは下を向く。肩から髪がはらりと落ちて揺れた。

「どうして謝るの？ あなたは何も悪くない」

そう、ターニャは何も悪くない。レオナルドも悪くない。悪いのは他の誰でもなく、勝手に動搖している自分自身。今の私にはそんな資格もないのに？？。

「だけど……」

「もう行くわ

「待つて！」

ターニャの必死な声に追い縋られ、コールベルは背を向けたまま足を止めた。緩いウェーブを描いた金色の髪がふわりと流れ、後頭部の白い包帯がひらりと舞う。

「私たち、これからも友達よね？」

ターニャがおずおずと問いかけると、コールベルはぎこちなく小さな口を開く。

「ええ、何も変わらないわ……」

「だったらお願ひ、行かないで！」

「……今は、一人になりたいの」

両手を顔で覆つて静かに泣き崩れるターニャと、まだほのかに湯気の立ち上るレモンティを残し、コールベルは足早に喫茶店を後にした。

約束の時間よりだいぶ早く、次の待ち合わせ場所に着いた。近くの植え込みの煉瓦に座り、膝を抱えてそこに顔を埋める。前を通る人たちがちらちらと不思議そうに視線をよこすが、コールベルにはそれを気にする余裕などなかつた。通り過ぎる人たちの足音を聞きながら、膝を抱える手にぎゅっと力を込める。

どれくらいの時間が過ぎたのかもわからず、時が止まつたように感じていた、そのとき。

「コールベル？」

少し離れたところからジョシュの声が聞こえた。彼は急いで駆けつけてくると、隣にひざまずき、コールベルの背中に手を置いて覗き込む。

「どうしたんだ？ 気分が悪いのか？」

優しくあたたかな声、あたたかな手。そのせいで、必死に凍らせようとしていた自分の気持ちが一気に氷解した。バッと勢いよく彼の首に腕を絡めて抱きつく。ジョシュはバランスを崩して尻もちをつきながらも、コールベルの体をなんとか受け止めた。

「ど、どうしたんだよ……」

ジョシュの声はうわずつていた。しかし、構うことなく、細い腕にぎゅっと力を込めて縋りつく。ピタリと寄せた体から体温と鼓動が伝わる。少し乱れた長い髪が、彼の背中側に落ちて揺れた。

「抱いて」

「……え？」

チチチチチチ……。

遠くに小鳥のさえずりが聞こえる。

「コールベルは少し背中を丸め、膝を抱えるように体を横たえた。強い日差しに照りつけられた足もとがジリジリと熱い。

「少しほ落ち着いたか？」

いつもと変わらないジョシュの口調。けれど、コールベルは背を向けたまま何も答えなかつた。頭上の木々がさわさわと擦れる音と、優しい草の匂いに包まれながら、小さな口をきゅっと結んで身を固くする。

「無理しなくてもいいわ」

「無理なんてしない……まあ、かなり驚いたけど……」

抱いて、少しでも私のことを想つてくれるなら？？我を忘れてそんなことを求めてしまつたコールベルを、ジョシュは理由も聞かずにこの公園へ連れてきてくれた。彼は大きな木陰に腰を下ろして空を見上げたが、コールベルはとても彼の顔を見られず、その隣に寝転がりずっと背を向けていた。

「気持ちが沈んだときやつらいときは、外に出て青空を見上げるのが一番いい」

「……雨が降つてたら？」

「いつかは晴れるだろ」

ジョシュは苦笑しながら答えた。その答えを、コールベルはうらやましく思い、同時に彼との距離を大きく感じた。

「もうわかつてるとと思うけれど、私、あなたが考えていたような無垢な女の子じゃない」

「別に、俺は……」

ジョシュはそう反論しかけて口元をついた。コールベルは淡々と続ける。

「あなたがそう誤解しているのはわかっていた。わかっていたけど否定しなかつた。あなたの優しさを利用していたの。寂しかつたら、一緒にいたかつたから……だからごめんなさい。もうこれで終わりにするわ」

「ちょっと待てよー、なに言つてんだよ、勝手に終わらせるなよー。」

ジョシュは焦ったように振り向いて言った。それでもコールベルは背を向けたまま動かない。少し呼吸をしてから、静かに話し始める。

「私、今朝、友達に会つてきたの。話があるって言われて」
ジョシュは相槌も打たず黙りこくつていた。コールベルから彼の姿は見えないが、いきなり話が変わつて困惑しているだらうことは、何となく空氣で伝わつてくる。少し緊張して手元の芝を握りしめた。
「その友達、付き合つてるつて……私が以前一緒に住んでいた人とす……？」

ジョシュは素つ頓狂な声を上げかけて、それを呑み込んだ。

「……今でも、そいつのことが好きなのか？」

「優しくしてくれるから、寂しさを埋めるために利用していたのよ。きっと、最初からずっと……。好きな人は他にいたけれど、相手にしてもえなかつたから。でも、そういうのは良くないと思つて自立しようとした。けれど無理だつた。さつきみたいに友達に嫉妬したり、あなたを利用したり、弟にまで縋つたり……」

コールベルの声は次第に小さくなつていく。芝を握る手に力がこもり、ブチブチとちぎれる音がした。

「利用とか言うなよ。だいたい弟は家族なんだから遠慮することないだろ？」

「そう、家族なの。家族だから許されない……あんなこと……」

「…………」

張りつめた空氣。ジョシュが背後で小さく息を呑んだ。コールベルの発言は曖昧だつたが、その言い方から何があつたか察したのだろう。それでも構わないと思つて口にしたのだから、覚悟はできている。コールベルは芝を握る手を緩めた。

「ここまで聞いたら軽蔑する以外にないでしょ？ もういいの」「放つておけるかよ！」

ジョシュは横たわるコールベルの両側に手をつき、真上から覗き込んで強く訴える。そろりと視線を上に向けたコールベルに、彼の

真剣な眼差しが突き刺さった。

「俺と一緒にいたいって思つてくれたんだろ？ それつて俺のこと好きつてことじゃないのか？ それともまだ相手にしてくれなかつたヤツに未練があるのか？」

「わからない……本当にわからないの……」

必死に追及されて混乱する。言い逃れではなく、本当に自分の気持ちがわからなかつた。コールベルが潤んだ目を細めると、ジョシュは奥歯を噛みしめて苦しげに顔をしかめた。

「俺は、利用されたなんて思つていない。お互いに会いたいから会つてただけだろ？ 嘘をついて騙してたわけでもないのにそんな言い方するなよ。俺のことを嫌つてるわけじゃないなら、これからも……」

「同情ならやめて。私もあなたも傷つくだけだから」

「同情じゃない。俺が終わりにしたくないだけだ！」

今の彼がそう思つてていることは間違いないだろ？ が、それはおそらく一時の感情に流されてのこと。だから、それに縋つてはいけないし、自分からきつぱりと終わらせなければならぬ。これ以上、彼に後悔させないように、自分が後悔しないように？？。

「……来週、また会つてくれるか？」

ジョシュが緊張した面持ちで問い合わせてくる。

コールベルは彼から目を逸らすと、少し考え、やがてぎこちなくこぐりと頷いた。

「あれ？ ジョシュもう帰るの？」

「ああ、ちょっとな」

研究所の門前で鉢合わせたサイラスに軽く答え、ジョシュは目的の場所へと足を向ける。まだ勤務時間は終わっていないが、用があるからといって抜けさせてもらつたのだ。普段は夜遅くまで仕事をしていることが多いため、このくらいの融通は利かせてもらえる。とはいっても、ジョシュが頼んだのは初めてのことであり、上司も少し驚いた様子で、よほどの用件だと思つてくれたようだつた。

研究所からそう遠くないところにある、何の変哲もないごく普通の学校。

ジョシュはその門前に到着すると、校舎の方を見やつた。昇降口の前には下校する生徒たちが溢れ、若々しい賑やかな声が上がつてゐる。この分だと、すでに帰つてしまつた生徒も多そうだ。

あいつ、まだいるかな？？

会えなかつたら何のために仕事を抜けてきたのかわからぬ。こんなことならもう少し早く来れば良かつた、と後悔しつつ、次々と出てくる生徒たちを確認していく。そのとき、周囲から頭ひとつ抜け出た少年が目についた。向こうもジョシュに気付いたようである。

「おにいさん！」

アンソニーは人なつこい笑顔を見せながら、小走りで駆けつけてきた。

「どうしたの？ 偶然……なわけないよね？」

「おまえに話があつて来た……んだけど……」

そう言いながら、彼についてきた小柄な少女にちらりと視線を向ける。随分と子供っぽく見えるが同級生なのだろうか。アンソニーが実年齢より大人びているせいで、隣にいると余計にそう見えるの

かもしだれない。

「あ、紹介するよ。僕の同級生で彼女のカナ、こっちは姉さんの同僚のジョシュ」

「こんにちは」

「あ、ああ……」

カナに可愛らしい笑顔で握手を求められ、ジョシュは慌てて右手を差し出す。アンソニーに彼女がいるということは、以前に聞いたので知っていたが、ユールベルからあの話を聞いたせいか戸惑いを隠せない。

「カナ、じめん。おにいさんと話していくから、今日は先に帰つてくれる？」

「うん、じゃあ、またあしたね」

カナは素直にそう答え、ジョシュに礼儀正しくお辞儀をし、アン

ソニーには手を振つて去つていく。

「で、どこで話をするの？」

「ああ……歩きながら……」

これからするのは誰にも聞かれたくない話なので、喫茶店に入るわけにもいかず、ジョシュにはそれしか思い浮かばなかつた。変に思われはしないかと心配したが、アンソニーは特段気にする様子もなく、じゃあ……と言つて、カナの去つていつた反対側へ足を向けた。

二人は無言のまま並んで歩く。

何かを察してか、ただの偶然か、アンソニーは人通りの少ない道を選んでいるように見えた。早く切り出さねばと思つものの、彼がスタスタと足を進めるため躊躇われてしまつ。

どこへ向かつているのだろうか？？。

ジョシュはチラリと隣を窺つた。彼は初めて会つたときよりも背が伸びていて、今はジョシュよりも高くなつてゐる。そこにこだわりを持つてゐるわけではないが、何とはなしに敗北感を覚え、小さ

な溜息とともに足もとに視線を落とした。

「……ならどういふ？ あまり人が来ないけど」

ほとんど会話らしい会話もせず、30分ほど歩くと、アンソニーは唐突にそう口を切つた。

ジョシュは顔を上げる。

眼前は大きく開けていた。正面の煤けたガードパイプの下方には、大きな川が流れている。少し冷たい風が新鮮に感じられて心地いい。そして、まわりには、確かにあまり人がいなかつた。

「あ……ああ……」

「良かつた。おにいさんとここ來たかったんだよね」

アンソニーはそう言つて屈託なく笑うと、河原へと続く石段を下りていく。彼が何を考えているのか今ひとつ理解できず、眉根を寄せながらも、ジョシュはその背中を追つてゆっくりと階段を下り始めた。

「おまえたちのことを見いた」

石段を下りきつたところで、ジョシュは河原の小石を踏み鳴らしつつ切り出した。

アンソニーは不思議そうな顔で振り向く。

「どうこうこと？」

「それは、その……ゴールベルとおまえの関係といつか……えつと

……」

覚悟は決めてきたつもりだったが、いざとなると口に出すのが憚られ、みつともないくらい狼狽えた曖昧な言い方になつてしまつ。しかし、アンソニーは、その様子で何を言いたいのか理解したようだ。一瞬、息を呑んで目を見開いたが、すぐに溜息をつきながら両手を腰に当て、いかにも残念そうに大きく抑揚をつけて言つ。

「なんだあ、先生、喋っちゃつたんだ」

今度はジョシュが目を見開いた。

「え……？ 先生つて、サイラスか？」

「先生から聞いたんじゃないの？」

「俺は、コールベルから聞いた……」

「へえ、姉さんが……」

アンソニーは斜め下に視線を落としながら考え込んだ。まさかコールベル本人が言うとは思わなかつたのだろう。考え込みたくなるのも無理はない。だが、それをいうならジョシュも同じである。

「サイラスは知つてたのか？」

「まあ、僕が言つたから」

半信半疑で尋ねると、アンソニーは事も無げにさうりと答える。なぜ、サイラスにだけ話したのか疑問に思つたが、彼はサイラスを慕つており、コールベルと付き合つてほしいと願つていたようなので、あえて本当のことを話しておいたのかもしれない。

「それで……あいつ、何か……」

「何も」

彼がいつ知つたのかはわからないが、コールベルと接する態度に変化はなかつた。それ自体は悪いことではない。だが、知りながらなぜ放置していたのかがわからない。他人事だから関わらなかつたのだろうか。関わるべきではないと思つたのだろうか。

しかし、ジョシュは、このままにはしておけなかつた。

「おまえ、もうあんなことはやめろよ」

「なに、おにいさん嫉妬してるの？」

アンソニーは軽く笑いながら、茶化すよつに答えた。だが、ジョ

シユは表情を険しくしたまま崩さない。

「眞面目に言つてるんだ。こんなこと……コールベルも、おまえも、余計に傷つくだけじゃないのか？ 残るのは虚無感と罪悪感だけだろう。根本的な解決にはなつてない」

感情を抑えて諭すようにそう言つたが、その途端、アンソニーの目がぞつとするくらい冷たくなつた。無表情のまま、少し顎を上げてジョシユを見下ろす。

「姉さんが壊れそうになつて震えてるのを、黙つて見てるって？」「そうじゃない。方法が間違つてると言つてるんだ」

ジョシュは額に汗を滲ませながら言い返した。一瞬だが、遙か年下の彼に、言いしれぬ恐怖を覚えた。ラグラソジョーという恵まれた家で生まれ育ちながら、なぜこんなにも冷たく荒んだ目が出来るのかわからない。

「おにいさんはいいよね」

彼はフツと鼻先で笑つて、視線を流す。

「姉さんが落ち着いているときに会つて、楽しく過ごすだけなんだから」

その静かな声に、ジョシュはまるで鈍器で後頭部を殴られたように感じた。何も言葉が出てこない。

アンソニーは顎を引き、厳しい顔になる。

「僕は一緒に暮らしてるんだよ。良いときも悪いときもずっと一緒にいるんだよ。たとえ一時でも落ち着かせられるなら、そうしてやりたいし、そうしなければいられない。あんな姉さん見てられないんだ。間違つてることくらい僕だってわかつて。じゃあどうすればいいのさ。間違つてるつて責めるんだつたら解決策を提示してよ」

「……ただ話を聞いてやるだけでも、だいぶ違うんじゃないか」

そう答えながらも、ジョシュは自分の言葉が嫌になるほど空疎に感じられた。戸惑いが声に滲む。言つている方がこれでは、何の説得力もないだろう。案の定、アンソニーは呆れたような顔で溜息をつく。

「何もわかつてないくせにアドバイスするなんて、随分無責任だね」「そりや、何もかも知つてるわけじゃないが……」

さすがに『何もわかつてない』などと言われては、反論せざるを得ない。家族であるアンソニーとは比べようもないが、少しずつともに過ごす時間を積み重ね、わかり合おうとしてきたつもりである。けれど、彼はそれを軽い冷笑で薙ぎ払つた。薄い唇に笑みをのせ、挑発するような眼差しで言つ。

「いいよ、教えてあげる。姉さんのこれまでを」

アンソニーから聞かされた話は、想像もつかないほど壮絶なものだった。

幼い頃に本家一人娘の魔導の暴発を受けて、左目の視力を失つたうえ、目のまわりに消えない傷を負つたこと。

実の親に疎まれて虐待され、結界を張つた部屋に7年も監禁されていたこと。

その結界を自力で破つて自由を手に入れたこと。

本家一人娘を階段から突き落としたと誤解され、責められ、壊れかけたこと。

そのとき世話をしてくれた人を好きになつたが、冷たい態度でにべもなく拒絶され続けたこと？？。

あまりのひどさに、口を覆つて絶句するしかなかつた。いつたいユールベルの味方はどこにいたのだろうか。アンソニーも、ほんの数年前まで姉がいることすら知らなかつたらしい。

無茶苦茶だ。何なんだこれは、どうしてこうなつた。

怒りで体が震える。まだ見たことのない彼女の両親に憎しみさえ覚えた。

今なら理解できる。彼女が両親と離れて暮らしていることも、サイファが親代わりになつていていることも、研究所でいきなり特別研究チームに配属されたことも、当主としての義務なのかもしれないが、彼女を守ってきたのはサイファだけだったのかもしれない。しかし、それもここ数年のことのようだ。

「わかつたよね？ 同情なんてやわな感情で支えられるものじゃないって」

「……同情なんかじゃない」

ジョシュは低く確かな声で言い切つた。

確かに、生半可な気持ちでは支え切れないだろう。それがわから

ないほど愚かではない。わかっていてもなお、コールベルを守りた
いと強く思ったのだ。同情もあるかもしれない。だが、どうでもい
い相手だったらここまで考えはしない。彼女と出会う以前は、他人
との関わりを望まず、たとえ同情を感じても行動を起こすことはな
かつたのだから。

「じゃあ、おにいさんの決意を聞かせてよ

「決意……？」

思わず聞き返すと、アンソニーは燃えるような鮮やかな青の瞳を、
まっすぐジョシュに向けた。

「行動以前に言葉にすら出来ない人を、僕は信用しない」

ジョシュはぐくりと唾を飲んだ。

さらさらと川の流れる音が、急に大きく聞こえてきた。それに同
調するかのように鼓動が高まつていく。誤魔化す理由も必然もない。
ただ、アンソニーに認めてもらえるか自信がなくて、怖かった。

「……俺は」

随分と長い沈黙のあと、ジョシュはやや擦れた声で切り出した。

今日で必ず終わらせる。自分で終幕を下ろすの？？。

コールベルは鏡を正面から見据えて、その向こうの自分に暗示を掛けるかのじとく、胸の内で決意の言葉を繰り返す。鏡は嫌いだつた。そこに映される自分の姿を目にするのが苦痛で、いつもは避けているのだが、今日は挑むようにまっすぐに相対していた。

「今日もおにいさんとデート？」

ベランダから顔を覗かせたアンソニーが、さうさうと短い金髪をそよがせながら、小さな如雨露を片手にそう尋ねた。如雨露の先からは水滴がしたたつている。ちょうどプランターに水をやっていたところのようだ。

そのプランターは、ジョシュが作ってくれたものである。

話し合つて決めたわけではないが、平日はコールベル、休日はアンソニーが世話をするようになつていて。何をすればいいのかわからなかつたが、ジョシュに言われたように適当に水をやつていたら、本当に若緑色の小さな芽が出てきた。今は、まだ花は咲かせていないものの、青々とした背丈がしっかりと着実に伸びてきている。

「ゆっくりしてきなよ。遅くなつてもいいからね」

彼は軽く笑いながらそんなことを言つ。

コールベルはムツとして眉をひそめる。そして、口をつぐんだまま、緩いウーブの金髪をなびかせて足早に部屋をあとにした。

空は鮮やかに晴れ渡り、眩しいくらいの日差しが地上に降り注ぐ。待ち合わせ場所には、すでにジョシュが来ていた。

コールベルより早いのはいつものことであり、不思議でもなんでもないが、硬い顔で唇を引き結んでいることが少し気にかかつた。何か思い詰めているようにも見える。しかし、コールベルに気がつ

くと、ほつと安堵したように表情を緩ませた。

「とりあえず公園へ行くか」

その声は普段と何ら変わりのないものだった。コールベルも素直に頷く。それから二人並んで公園に向かうと、小径をゆっくりと散歩したり、木陰でのんびり話をしたりと、あたたかい陽だまりに包まれながら、これまでの休日と同じように穏やかな時間を過ごした。日が傾き、帰る時間が近づいた頃??。

ジョシュがきこちなく遠慮がちに手を繋いできた。

コールベルが顔を上げると、彼は照れたような表情で前を向いていた。夕陽のせいではっきりとはわからないが、頬もほんのり紅く染まっているように見える。その緊張ぎみの横顔に、その手のあたたかさに、コールベルの胸はキュッと締め付けられる。決意が鈍りそうになるが、これが最後だからと自分に強く言い聞かせた。

「来週も今日と同じ時間でいいか?」

別れ際、ジョシュは軽く尋ねてきた。

そう、じつやつて次に会う日時を決めることが、一人には当たり前になつていた。途切ることのなかつた約束、終わりの見えなかつた逢瀬??しかし、それも今日までのこと。コールベルは口を引き結ぶと、そつと首を横に振る。

「何か予定があるのか?」

「……もう、会わない

「えつ?」

単純に声が聞き取れなかつたのか、訝しむ様子もなく、ジョシュは少し顔を近づけて聞き返した。コールベルは小さく息を吸い込み、あらためて心を決めるが、今度ははつきりとした口調で言い直す。

「もうあなたと会つのをやめるわ

ジョシュの目が大きく見開かれた。

「……な、んで……?」

「今までありがとう」

「ゴールベルは抑揚のない言葉を返す。

「理由を教えてくれよ！」

「もつ会いたくないから」

「……嘘だ」

ジョシコは喉の奥から絞り出すよつに詰つ。ゴールベルはたまらず顔をそむけた。

「お願い……あなたといふと苦しこの。これ以上、私のことを苦しめないで」

「……違う。俺と一緒にいるから苦しこんじやない。俺から逃げようとするから苦しこんだ」

彼は冷静にそう言いながら、沸き上がる感情を堪えるように、体の横でこぶしをギュツと爪が食い込むほどに握りしめる。それを見て、ゴールベルは、まるで自分の心臓を轄掴みにされたかのように感じた。

「……やつよ」

胸を押されて声を絞り出す。右目に涙が滲み、頭に熱い血が上つていいく。

「でもそつするしかないの！ あなたもいつか私から離れていく！ 今は意地になつて無理をしてるだけ。私がどんな人間かもうわかつたでしきう？ いつも誰かを利用して縋つて……弟さえも……。心も体も穢れきつてこる。誰にも好きになつてもらう資格なんてない。だから……」

「勝手に決めつけるなよ！」

ジョシコは感情的に言い返した。そして呼吸を整えると、涙目のゴールベルを正面から見据える。

「俺は、逃げない」

「今はそう思つていても、いつか……」

「どうやつたら信じてもらえるんだよー」

「ジョシコは悪くない。悪いのは私……だから、どうしようもない……」めんなさい……

「コールベルは泣きそうになるのを懸命に堪えようとしていた。唇を強く噛みしめて目を伏せる。けれど、怖いくらいまつすぐな彼の眼差しに、全身が熱を帯び、胸が焼けるようにな熱くなり？？そして、右目から大きなひとしづくが零れ落ちた。

さらに強く唇を噛み、こぶしを握りしめる。

それでも、次々と溢れくる涙は止められない。やがて、堰を切つたように大声で泣き崩れた。その場でうずくまつて激しく慟哭する。そこが往来の真ん中であることも、研究所の近くであることも、誰かが見ているかもしないことも、知り合いが通るかもしないことも、何もかもどうでもよかつた。

時折吹く風が冷たい。

空はすっかり濃紺色に塗り替えられていた。星もあちらこちらで瞬き始めていた。

二人は、植え込みまわりの煉瓦に、並んで座っていた。コールベルが泣き崩れたあと、ジョシュは何も言わずに、ずっと背中に手を置いて寄り添つてくれていた。ひとしきり泣き疲れるまで泣いて、少し落ち着いてくると、すぐ近くの植え込みの方へそつと促された。それから1時間ほど、ただ黙つて膝を抱えるだけである。彼がどう思つているのか不安だつたが、それを知るのが怖くて、尋ねることも顔を向けることができない。

「なあ……」

不意に落とされた声に、コールベルの体がビクリと震えた。それでも彼は言葉を繋げる。

「おまえ、あの家を出でた、俺の家に来ないか？」

「……えつ？」

コールベルは大きく目を見開いて振り向いた。

「おまえの家と比べるとだいぶ狭いけど……いや、もう少し広いとこうに引っ越してもいい。今までと同等というわけにはいかないが、なるべく不自由させないようにするから」

「……私たちって、そういう関係？」

「これからそうなるんじゃ、駄目か？」

ジョシュは許しを請うように尋ね返す。

コールベルは眉を寄せてうつむいた。頭が混乱する。彼の言つことがあまりにも飛躍しすぎて、まともに受け止めることができなかつた。家を出るよう勧める理由はわかつてゐるつもりだ。だからといって、どうして彼と一緒に住むことになるのかは理解できない。確かに、自分は終幕を下るそうとしていたはずなのに？？

「軽薄な気持ちじゃない。俺は、真剣におまえと……」

「弟を一人にするわけにはいかないわ。未成年だもの」

ジョシュの言葉を遮つて、コールベルはそう告げた。論点をずらした自覚はあるが、言つたことは嘘ではない。一人にするわけにはいかないし、両親のもとに返すわけにもいかないのだ。家族の関係を説明しなければ納得してもらえないかと思つたが、彼は何も尋ねてこず、ただ苦い表情で唇を引き結んでいた。しばらく考えて、ゆつくりと口を開く。

「じゃあ、あいつが18になるまで待つ

「そんな先のこと……」

「俺は、待つよ」

困惑して口ごもるコールベルに、ジョシュは迷いなく言つた。少なくとも現時点では、彼が本氣でそう思つてゐるだけことは、ユールベルにも疑いようもないくらいに伝わってきた。

しばらくして、ジョシュが自宅まで送つてくれた。

いつもは近くの交差路で別れるのだが、夜遅くなつたからといって、断つたにもかかわらず強引についてきたのだ。おそらく、まだ精神的に不安定なコールベルを心配しているのだろう。扉の前に着いても、ジョシュは手を掴んだまま離そうとしなかつた。何か言つたげに目を泳がせている。

「やっぱり今日だけでも俺の家に来ないか？」

「もう大丈夫よ」

「ゴーレベルは努めて無感情に言つ。

「なあ、もしつらくなつて、泣きたくなつても……その……」

「わかつてゐるわ」

それでもジョシュは手を離そつとしない。中にいるアンソニーと二人きりにしたくないのだろう。彼が何を懸念しているのかはわかつてゐたが、それでも帰らないわけにはいかないのだ。

握つた手に、少し力がこめられた。

「なかなか信じてもらえないけど、俺は、本当におまえのことが好きなんだよ」

ジョシュは、思いつめたように切々と訴えかけた。

しばらく苦悶の表情でゴーレベルを見つめていたが、やがて細い肩に手を置き、様子を窺いながら少しずつ身を屈めていく。

彼が何をしようとしているかわかつた。けれど、拒絶しなかつた。ゴーレベルが近づくジョシュの顔をじっと見つめると、彼は少し戸惑いを浮かべたが、それでも逃げる」となくそつと触れるだけの口づけを落とした。優しい熱が伝わる。次の瞬間、彼の表情を確かめる間もなく、ゴーレベルは強い腕で思いきり抱きしめられた。足もとがよろけて、白いワンピースがふわりと舞つ。

「何があつたら、何でもいいから俺を頼つてくれ

「彼の声が耳にかかる。

唇も、体も、心も、すべてが心地よくあたたかかった。

こんなことは初めてである。

今まで誰と一緒にいても、誰に縋つてみても、虚しさや悲しさという負の感情が消えることはなかつた。それどころか縋るたびに大きくなつていて。けれど、今はどうしてだか幸福感の方が大きい。終幕を下ろそうとしていたはずなのに、その動機すら見失いそうになつてゐた。

もしかしたら、彼なら本当に……?

信じると断言することはまだできなければ、気持ちは傾きつづ

あつた。もし、信じることができれば、彼とずっと一緒にいたから、きっとどれだけ幸せだらうと思つ。そんな安易な自分に、幾何かの嫌悪感を覚えながらも？？。

「アンソニー？」

「ようやく家に帰つたゴールベルは、真つ暗なリビングルームで弟の名を呼んだ。

しかし返事はない。

寝室やキッチンなど他のどこからも明かりが漏れておらず、浴室にもいる気配もない。もう寝てしまつたのだろうか。何となく嫌な予感がしながらも、手探りで照明のスイッチを入れると、テーブルに紙が一枚置いてあるのが見えた。ゴールベルは近づいて目を落とす？？瞬間、それを掴み取つて凝視し、大きく息を呑んだ。紙にはアンソニーの筆跡で、ひとことだけ書かれていた。

と？？

「行くところに心当たりはないのか?」「わからない……」

コールベルは泣きそうになりながら、もういちど紙切れに目を落とす。さようなら? アンソニーが残したのはその一言だけだった。これを見つけたあと、帰りかけていたジョシュを追いかけて助けを求めたが、彼もまた驚いてあたふたするばかりだった。頭を搔きながら必死に思考を巡らせるが、何か思いついたのか、パツと顔を上げて人差し指を立てる。

「そうだ、あいつ彼女がいただろ? …」

「同級生で力ナつて言つていた気がするけど、会つたこともないし、連絡先なんてわからないわ」

何度もアンソニーと一緒に見かけたことはあつたが、会いたくなくて避けるようにしてきた。彼女の話も聞きたくなかったし、アンソニーもそれを察してか積極的に話そうとはしなかった。

「学校の先生は?」

「担任が誰かも知らない……学校の場所はわかるけれど……」

家族でありながら、一緒に住んでいながら、結局はアンソニーのことをたいして知らなかつたのかもしれない。ただ利用していただけで、ただ甘えていただけで、彼のために姉らしく何かをしてあげたことなどなかつた。考えれば考えるほど、自分がろくでもない人間だと思い知らされて絶望的な気持ちになる。目にじわりと涙が滲んだ。

「愛想を尽かされて当然だわ」

「いや違う、俺のせいだ……」

ジョシュは視線を落として沈んだ声で言つ。しかし、すぐに顔を上げて気合いを入れ直した。

「今はそんなこと言つてる場合じゃない。アンソニーを見つければ

と「

彼の言ひおり、今はアンソニーを捜すことが最優先である。コールベルは涙を堪えてこくりと頷いた。

とりあえず手がかりを求めて学校に来てみたが、明かりは見えず、門も閉まっていた。誰かがいそうな気配はない。休日の夜だから、当然といえば当然である。

「誰かひとりくらい先生がいてくれれば良かつたんだけど……」

ジョシュは門にもたれかかりながら、悔しげに言ひつ。

それを聞いて、コールベルはハツとした。

「おじさま……」

「えつ？」

「おじさまに聞けばわかるかもしれない。担任の連絡先くらいなら……」

今でもアンソニーの保護者代理はサイファになつてゐる。学校からの連絡などは彼が受けているはずだ。そう思つと、いてもたつてもいられず駆け出した。事情が呑み込めていないジョシュは、よくわからぬまま、慌ててコールベルを追つて走り出した。

「おじさまつて、もしかして……」

ジョシュは大きな屋敷を仰ぎ見ながら、顔を引きつらせた。

しかし、コールベルには彼に構つてゐる余裕などなかつた。無言のまま進んでいき、躊躇うことなくチャイムを鳴らす。しばらくすると重量感のある扉が開き、レイチエルが優しく微笑んで一人を迎えた。

「いらっしゃい、コールベル……それと、あなたは研究所にいた鼻血の……？」

「それはもう忘れてください！」

ジョシュは顔を真つ赤にして言い返した。レイチエルは口もとに手を添え、くすくす笑つてゐる。このいかにも接点がなさそうな二

人に、いつたいどういう面識があるのだろうか？？ゴールベルは少し驚き、そして気になつたが、今はそれに気をとられている場合ではない。レイチエルに向き直ると、苦手意識を感じながらも、懸命に彼女の目を見ながら説明を始める。

「私、おじさまにどうしても訊きたいことがあつて……」

「ええ、居間にいるわよ。サイファも、アンソニーも」

「……えつ？！」

ゴールベルとジョシュは、同時に目を見開いて声を上げた。

「また負けかあ。サイファさん手加減なしだもんない」

「手加減で勝つたところで面白くないだろ？！」

チエス盤を挟んで談笑するアンソニーとサイファを眺めながら、ゴールベルは啞然とした。紙切れを持つ手に、無意識に力がこもる。と、アンソニーが戸口のゴールベルたちに気付いて振り向いた。

「あ、姉さん。おにいさんも一緒なんだ」

何事もなかつたかのように、にこやかに笑顔を振りまく。

ゴールベルの頭の中で何かが切れた。

「どういうことなの？！」

そう叫ぶと、軽くウェーブを描いた金髪と包帯をなびかせながら、部屋の中に駆け込んで行く。ソファのそばに立つて睨み下ろしても、アンソニーは顔色一つ変えず、人なつこい笑みを浮かべて答える。

「僕、ここに住まわせてもらひことにしたんだ」

「どうしてそんな……！？」

ゴールベルは絞り出すように言つ。視界が大きく歪んだ。目に滲んだ涙が今にもこぼれ落ちそうになつていて。

サイファはその様子を見て、不思議そうに尋ねる。

「アンソニー、置き手紙をしてきたんじゃなかつたのか？」

「置き手紙つてこれのことかよ」

ジョシュは苛立ちながら、ゴールベルの持つていた紙切れを抜き取り、乱暴に開いて前に突き出す。「さよなら」とだけ書いてあ

る紙だ。サイファはソファから身を乗り出してそれを覗き込んだ。

「これはひどいな」

サイファは軽く苦笑しながらそう言つと、ソファに座り直し、口もとを上げて正面のアンソニーに視線を投げる。彼は小さく肩をすくめて視線を落とし、チエスの駒に指をのせた。

「心配してほしかったんだよ……最後だしね」

そう言葉を落として薄く微笑む。が、すぐにいつもの表情に戻るとジョシューに振り向いた。

「おにいさん、姉さんのことを頼んでいいよね。僕の代わりにあの部屋で姉さんの面倒を見てやつてよ。残してある僕のものは、使うなり捨てるなり好きにしていいから。ベッドもそのままだし……つて、おにいさんは嫌かな」

あははと笑うアンソニーを、ジョシューは苦虫を噛み潰したような顔で見下ろした。その瞳には困惑と怒りが見え隠れする。何かを言いたそうにしているが、口は閉ざしたまま、ただ悔しげに顔を歪めるだけである。

「ユールベルは混乱したまま首を横に振つた。

「私、そんなこと頼んでない……私……」

「このままじゃ、誰も幸せになれないのはわかるよね。いつかは終わらせなきやいけないことなんだ。だつたら、今が一番いいんじゃないかなつて。おにいさんの覚悟も聞かせてもらつたしね。姉さんの過去をすべて話したけど、それでもずっとそばで支えて守つていくつて。絶対に逃げたりしないつて。他にもいろいろと話し合つて、おにいさんなら信用できると思ったんだ。だから、姉さんは安心して頼ればいいんだよ」

アンソニーは落ち着いた口調で、優しく言い聞かせるように言つ。その様子を、サイファはゆつたりとソファに座つたまま見守つた。おそらくアンソニーからすべての話を聞いているのだろう。そのうえで、ここに住ませてほしいと頼まれたから、了承せざるを得なかつたのかもしれない。

「私は、何も知らなかつた」

コールベルは肩を震わせながら嗚咽し、顔を両手で覆つた。溢れた涙が手のひらを濡らす。ジョシュは何も言わず、そつとコールベルの肩を抱いた。

「姉さん、幸せになつてよ。僕も幸せになるからせ」

アンソニーは目を細めて言った。

それでも、コールベルはどうすればいいかわからず、頭が混乱したまま、ただ体を震わせてすすり泣き続けた。アンソニーの言うことは理解できるが、思考と感情が追いつかなかつた。夢なのか現実なのかもわからなくなつてくる。肩に置かれた手のあたたかさだけが、辛うじて自分を現実に引き留めているようだつた。

「話が違うとあとで言われるのも何だから、あらかじめ言つておくが」

サイファは不意にそう切り出して、視線を流す。鮮やかな青の瞳がジョシュを捉えた。

「ジョシュ、君をラグランジェ家に迎えることはできない」
ビクリ、と彼の体が小さく震える。

「俺は、別にそんなこと……」

「つまり、コールベルとは結婚できないということだ」

「……」

コールベルの肩に置かれた彼の手に力が入つた。

サイファは膝の上で手を組み、淡々とした表情で話を続ける。

「君が気に入らないから言つていいわけではないんだよ。ラグランジェ家に迎えるには一定の基準があつてね。君には魔導力が不足している。最低限、アカデミー魔導全科に入学できるくらいの力はないといけない」

基準の話はコールベルも聞いたことがある。ラグランジェ家の人間は一族間でしか結婚が許されていなかつたが、一年ほど前、基準さえ満たせば外部の人間であつても受け入れることにした？？といふ話だ。溢れた涙を拭つてそつと顔を上げる。隣のジョシュは、思

い詰めたように必死な表情を見せていた。

「俺は……一緒にいられるだけで……」

「君はいいかもしねないが、ユールベルにとってはそれで幸せかな？」

サイファはちらりと厳しい視線を流す。

「それ、は……」

ジョシュは苦しげに言葉を詰まらせた。ユールベルの肩から手を滑り落とすと、体の横で壊れそうなほど強く握りしめる。こぶしは小刻みに震えていた。奥歯を強く噛みしめた表情にも、悔しさとやりきれなさが滲んでいる。

「ラグランジエ家としても困るんだよ」
サイファは容赦なく畳みかける。

「同棲などという外聞の良くない」とは避けてもらいたい。ラグランジエ家の品位を下げることに繋がりかねないからな。それに、ユールベルに勝手なことをされては、ラグランジエ家の若い者にも示しがつかないだろう?」

「私、出ます……」

ユールベルは体の奥底から震える声を絞り出す。

「私、ラグランジエ家を出ます。ラグランジエの名前を捨てます!」
涙の乾かないまま、まっすぐサイファに向かってそう叫んだ。隣では、ジョシュが目を丸くして、ポカンと口を開けている。けれど、ユールベルには自分の言ったことの意味くらいわかっていた。

「ユールベル、それでいいの?」
サイファは優しく問いかける。

ユールベルは硬い表情でこくりと頷いた。

「ラグランジエの名前さえなければ問題はすべて片付くもの。それに、私、以前からいつかラグランジエ家を出たいと思つていた……
そのためには正当な理由がいるつて聞いていたけれど、これなら認めてもらえるんでしょう?」

「ジョシュと結婚する、というのならね

そう言われ、とつさに言葉が出てこなかつた。コールベルとしては、一緒に暮らすことを考えていたのだが、結婚でないと正当な理由にならないのだろうか。

サイファは感情のない声を重ねる。

「ラグランジエ家を出るために、彼を利用しているだけなのか？」

「違うわ！ 好きだから……好きだから、一緒にいたいの……」

コールベルは、慎重に、噛みしめるように言葉を紡ぐ。そして、表情を引き締めてサイファを見据えた。

「彼と、結婚するわ」

ジョシュは驚いて大きく目を見張つた。しかし、すぐにそれは嬉しそうな表情に変わる。その屈託のなさに、コールベルの胸は小さく疼いた。彼が好きだというのは嘘ではない。好きだからこそ、怖くなつて逃げだそうとした。終わらせようとした。そんな自分が、今さらこんなことを言う資格はあるのだろうか。あまりにも都合が良すぎるのでないだろうか？？。

「ラウルのことは吹つ切れたのか？」

「……大丈夫よ」

その名を聞かされて、一瞬ドキリとしたが、すぐに気持ちを落ち着けて答える。強く断言するだけの自信はなかつたが、ジョシュがいてくれるなら、おそらくもう心を乱されることはないだろうと思えるようになつていた。

「随分と簡単だね」

サイファは無表情で言つ。けれど、コールベルは引かなかつた。

「簡単じゃなかつたこと、おじさまなら知つてはいるはずです。いくら縋つても私を見てくれなくて、拒絶されて、それでもずっと諦めきれなかつた。そんな私の気持ちを融かしてくれたのがジョシュだつたの。逃げ込める場所じやなくて、一緒に過ごす時間が欲しいと思えるよになつたの。一緒に生きていくのなら、私はジョシュが

いい

半ばむきになつて、懸命に訴えかける。

サイファはふっと笑った。

「コールベル、君の気持ちはわかつた。だが、ラグランジエの名を捨てるはどうなるか、君は正しく理解しているのかな？」

「……特別扱いされなくなる？」

コールベルは少し考えて答えた。

ラグランジエというだけで、多少の無理が通ることは知っている。研究所でもそれは実感していた。新人のコールベルが特別研究チームに配属されたのが、何よりの証左である。

「そう、それも影響のひとつだ」

サイファはゆっくりと肯定した。そして、一呼吸おいて続ける。「加えて言うならば、私も表立つて君を助けることができなくなる。もうラグランジエ家の人物ではなくなるのだから……わかるね？」

「俺が守ります」

コールベルが口を開くより先に、ジョシュが一步前に踏み出してそう言った。強い意志の漲る眼差しを、まっすぐサイファに送る。サイファも鮮やかな青の瞳でジョシュを見つめ返す。二人とも目を逸らそうとしなかった。ジョシュの頬に幾筋かの汗が伝う。と、サイファがフッとおかしそうに小さく笑った。

「ジョシュでは些か頼りない気がするな」

「そんなこと……は……」

ジョシュの声は次第に弱々しくなり、やがて唇を噛んでうつむいた。そんな彼を見ながら、サイファは涼しい顔でソファの背もたれに身を預けている。いつたい彼が何を考えているのか、コールベルにはわからなかつた。

「わ、たし……」

息が詰まりそうになりながら、震える声で切り出す。みんなの視線が一斉に向けられた。少し怯みつつも、逃げることなく、静かな口調で噛みしめるように述べていく。

「私、誰かに守られなくても生きていけるくらい強くなりたい。そうなれるように努力するつもりでいるわ。でも……」

そこでいつたん言葉を切ると、小さく息を吸い、顔を上げてサイファを見据える。

「こぞとこうときは、ジョシュが守ってくれると信じているから」

「彼は決して頼りなくなんかない。」

あのときだつて、誰よりも必死にレイモンドから守つてくれたのだから？？。

「なんか……いきなりこんなことになるなんてな……」

ジョシュは困惑を露わにしながら、濃紺色の空を仰ぎ見た。無数の星のきらめきが一人を照らす。空気はだいぶ冷え込んでおり、緩やかに頬を掠めるたび、火照つたそこから熱を奪つていった。

「きっと、アンソニーとおじさまの策略だつたのね」

「つたく、勝手なことを……」

今にして思えば、サイファの厳しい言葉もこの結果を誘導していだとしか考えられない。けれど、それは自分たち一人のことを慮つてのことだらう。コールベルはそつと隣に視線を向ける。まだ眉を寄せているジョシュの表情に、少し不安が湧き上がってきた。

「後悔しているの？」

「いや、後悔はしていない。……コールベルは？」

「後悔していないわ」

二人は顔を見合させて小さく笑つた。

ジョシュは包み込むようにコールベルの手を握る。今朝のぎこちなさはもう消えてきた。コールベルも、今朝は彼と離れることしか考えていなかつたのに？？。流されてしまつた気がしないでもないが、後悔はしていないし、気持ちがすつと軽くなつたように感じていた。彼の手のあたたかさに応えるように、そつと力をこめて握り返した。

「ンンンン？？。

「コールベルは息を吸い込んで決意を固めると、立て付けの悪い扉をノックした。

「入れ」

すぐに、中から短い返事が聞こえた。相変わらず愛想のかけらない声である。しかし、それさえも懐かしく感じてしまふくらい、長い間、ここを訪れていなかつた。コールベルはもう一度、深呼吸すると、ゆっくりと扉を開いた。

机に向かい本を読んでいたラウルは、ページを繰る手を止め、椅子を回して訪問者の方に体を向ける。そして、コールベルの姿を認識すると、無表情のまま僅かに眉を寄せた。

「座れ」

そう言って、顎で丸椅子を指示する。

コールベルは引き戸を閉じて、素直に彼の前の椅子に座つた。ギシ、と小さな軋み音が響く。

「おまえほど言つことを聞かない患者もいない

「つそつき。私以外に患者なんていなくて」

溜息まじりで落とされた言葉に、間髪入れずそう言い返したが、ラウルは何の反応も示さなかつた。いつものように、無言でコールベルの頭を引き寄せるが、抱え込むようにして後頭部の包帯の結び目をほどこつとする。が、いつになく手にずつっているようだ。

「下手だな

「えつ？」

「この包帯の結び方だ」

それまではコールベル自身やアンソニーが結んでいたが、最近ではジョシュが結んでいる。決して下手ということはないだろう。ただ、固く結んでほしいというお願いをきいてくれているだけだ。反

論したい気持ちはあつたが、今はあえて口をつぐんだ。

広い胸に両手を置いたまま、あたたかさと鼓動を感じながら田を閉じる。

ラウルはしばらく結び田と格闘して、何とかほどくと、大きく手を回しながら包帯を巻き取つていく。覆われていた部分が露わになり、外気に触れてひやりとした。すぐに彼はコールベルの肩を押し、体を離すと、手を洗つて戸棚から薬と包帯を取り出し、左田とそのまわりを順に診察する。

「田のまわりが少しがぶれている。これ以上ひどくなりたくないなら、こまめに医者に診せろ。私でなくても構わん」

そう言つと、手早く薬を塗り、新品の包帯を巻き付けていく。そして、再び頭を引き寄せようとするが、コールベルはラウルの胸を押し返してそれを拒んだ。怪訝な眼差しを送るラウルに、何も答えないまま、丸椅子をゆっくり回して背中を向ける。ラウルも何も言わず、その後頭部に手を伸ばして包帯を結び始めた。

「私、これからもラウルに診てもらひつわ」

「だつたら真面目に通つてこい」

「ええ、そうするつもり……」

コールベルは緊張を緩めるように小さく呼吸をして、言葉を継ぐ。

「私、もうすぐ結婚するの」

包帯を結ぶラウルの手が止まつた。しばらく無言で固まつたあと、再び手を動かし始める。

「本当なのか?」

「信じられない?」

コールベルは思わず挑発的な口調で言い返した。しかし、わかっているのかいないのか、ラウルはますます神経を逆なするようなことを言つ。

「当てつけか? それとも自棄か?」

「ひどい自惚れね」

コールベルは呆れかえつた。包帯を結び終わつてラウルの手が離

れると、ぐるりと椅子を回す。緩やかなウェーブを描いた金色の髪とともに、後頭部で真新しい包帯がふわりと揺れ、再びラウルに正面から相対した。濃色の瞳を睨みつけて言つ。

「おめでとうくらい言えないので？」

「めでたいかどうかわからん」

ラウルは素っ気なく答え、包帯の残りと薬を片付け始める。

「……相手は誰だ」

「あなたは知らないと思うけど、私と同じ研究所で働いている人よ。その人はラグランジエ家のの人間ではないから、私もラグランジエ家を出ることになったの。おじさまにも許可をもらつたわ」

ゴールベルは淡々と説明した。そして、相槌すら打たない無表情な横顔を見据えて話を続ける。

「私、ようやく見つけたの。逃げ込める場所じやなくて、縋りたい人じやなくて、一緒に生きていこうと思える人。なぜだかわからないけど、彼と一緒にいると、虚しい気持ちにならずに、穏やかな気持ちでいられるから」

「そうか……」

ラウルはその一言だけ落とすと、机に向かった。

ゴールベルは目を細めて広い背中を見つめた。そして、音を立てないようにそつと椅子から立ち上がると、その背中に小さくお辞儀をし、まっすぐ出入り口に歩を進めて扉に手を掛けた。そのとき？

？。

「ゴールベル」

不意に名前を呼ばれて振り返る。しかし、彼は机に向かったまま、こちらに目を向けようともしなかった。どういuffもりなのかと怪訝に眉をひそめる。長い沈黙が続いたあと、小さくラウルの口が開いた。

「幸せになれ」

瞬間、ゴールベルの右目から涙が溢れそうになつた。すんでのとここでそれを堪えると、もう一度小さくお辞儀をし、うつむいたま

ま医務室を出て扉を閉めた。そして、早足でそこから離れると、胸に手を当てて深呼吸しながら顔を上げる。

ありがと。

これまで拒絶し続けてくれて。

多分、あなたは優しかった？？。

今度こそ本当に大丈夫だと、ただの患者になれると、ようやく心からそう思えた。ゆっくりと階段を下りて外に出ると、日映いばかりの鮮やかな青空を仰ぎ、白いワンピースをひらめかせながら王宮をあとにする。その足取りは、今までにないくらい軽かった。

研究所の食堂で、ジョシュは今日もBセットを注文した。

昼食の載ったトレーを受け取ると、ぐるりとあたりを見まわし、混雑の中で空いている席を探す。と、窓際の席で穏やかな光に包まれているコールベルが目についた。彼女の昼休みは遅れることが多く、正規の休憩時間に来ていることはめずらしい。

さつそく彼女の方へ足を進めようとしたが、そのとき、向かいにサイラスが座っていることに気がついた。一瞬、躊躇するものの、もう以前とは違う。小さく息を吸い込んで、一人のテーブルへと進んでいった。

「サイラス、一緒にいいか？」

「あ、ジョシュ。もちろんだよ」

サイラスは人当たりのいい笑みを浮かべて、自分の隣を示す。サイラスが一人で食事をしているときに声を掛けはあるが、コールベルが一緒の今でも、そのときと何ら変わらない調子で答えてくれた。

ジョシュが示された席に座ると、向かいのコールベルが少し戸惑つたように目を泳がせた。

「コールベルとは久しぶりなんじゃない？」

サイラスは明るく言つた。

コールベルとは結婚することを決めていて、すでに一緒に暮らしているのだが、まだ研究所のほとんどの人には秘密にしていた。知っているのは所長と副所長くらいだ。といつても、ジョシュが話したわけではなく、サイファの方から話がいつたらしい。コールベルがラグランジエ家を出ることになるので、その報告も兼ねて、早めに話をしておきたいというのが彼の意向のようだ。時が来れば、所長から他の人にも話が伝わるだろう。

「それでもないよ

「そりなの？」

サイラスは意外そうに軽く聞き返した。ジョシュは無表情のままサラダを口に運んだが、コールベルはまだ困ったような表情を見せている。一人の様子が気まずそうに見えたのか、サイラスは気を遣つて、何気ない調子で別の話題を振つてくれた。

ぼんやりとその話を聞きながら、ジョシュは考え込んだ。

コールベルとのことが皆に知られてしまつ前に、サイラスにだけはどうしても自分の口から伝えたい。けれど、なかなかきつかけが掴めず、どうしたものかとここ一週間ほどじつと悩んでいた。もしかしたら、今が絶好の機会なのかもしれない。が、やはり、まわりに大勢の人がいる状況はいただけないだろう。できれば、一人きりのときがいいのだが、そういう機会が度々あるわけもなく??。

「ジョシュ？　どうしたのぼーっとして。悩みこと？」

「ん、いや……」

すっかり手が止まつていたジョシュに、サイラスが気遣わしげに声を掛けてきた。コールベルも不安そうに顔を曇らせている。もつとも、サイラスと違つて、コールベルにはその理由がわかっているはずだ。

「じゃあ、根を詰めすぎなんじゃない？」

「……かもな」

ジョシュはスペゲティをフォークで巻き取つながら、曖昧にそう答える。

「もうちょっと気楽にした方がいいよ」

「おまえは気楽すぎるんだよ」

そう言いながらも、彼の気楽さは正直うらやましいと思つてゐる。サイラスくらいの気楽さがあれば、悩むことなく、簡単に結婚のことを話すことができただろう。だが、性格なのでどうしようもない。気楽にしようと頑張つたところで、気楽にできるものではないのだ。「そうだね、僕とジョシュを足して2で割つたらひょううど良さそうだね」

サイラスは楽しそうにそんなことを言った。

確かに、そのくらいがちょうどいいのかもしない。ジョシュがふつと表情を緩めると、コールベルもほっとしたように小さく息をつく。彼女にも随分と心配を掛けているようだ。彼女を安心させるためにも、早くサイラスに報告しなければ、とジョシュはあらためて思った。

しかし、結局、この日も何も言えないまま終わるうとしていた。ジョシュは欠伸を噛み殺しながら大きく伸びをすると、ぐつたりと机に突っ伏した。仕事で疲れたというのもあるが、サイラスに今日も言えなかつたということが、精神的に大きなダメージとなつていた。自分の不甲斐なさにはとことん呆れるしかない。もうこのフロアにはもう誰も残つていなかつた。

コールベルもすでに帰つているだろう。せつかく一人で暮らすようになつたのに、平日は帰るのが遅く、なかなか一緒に過ごす時間が持てなかつた。だが、帰つたときに「おかえりなさい」と言ってくれる人の存在は、とてもありがたいものだと実感している。その小さな言葉だけで気持ちがあたたかくなれるのだ。

そんなことを考えていると、急に家が恋しくなつた。

そろそろ切り上げて帰ろうと、机の上に散らばつた資料やデータを片付け始める。そのとき？？。

「ジョシュ、もう帰るの？」

ふいに名前を呼ばれて振り返る。そこにいたのはサイラスだった。残つて仕事をしていたのか、それともアカデミー帰りなのかはわからぬが、ジョシュのいるフロアに入つてくると、一瞬一瞬ながら歩み寄つてくる。

「ああ、そろそろ帰るうと思つてる」

そう答えながらも、ジョシュはチャンスかもしれないと思う。今なら一人きりでまわりに誰もいない。だが、どう切り出していいかわからず、拳動不審にあたふたと目を泳がせてしまう。

サイラスはジョシュの隣の席に腰を下ろした。

「もしかして悩み」と?「

「えつ?」

「昼間から何かずっと考え込んでたよね

」

まさかサイラスが気にしてくれていたとは思わなかつた。ジョシュは資料の山に手を置いて下を向く。なぜ悩んでいたのか、何を悩んでいたのか、それを伝えられればすべて解決するのだ。今しかない? ? 意を決すると、『ぐぐりと喉を鳴らし、何の前置きもなくストレートに切り出す。

「俺、結婚するんだ

」

サイラスはきょとんとして短く聞き返した。無理もない。本人でさえ信じがたい話なのだから。しかも? ?

「相手は、コールベルだ」

噛みしめるように言葉を落とす。

サイラスは絶句したまま、口を半開きにして固まつた。

ジョシュもそれ以上は何も言えなかつた。

長い沈黙と静寂が続く。

やがて、サイラスがわずかに掠れた声で言葉を絞り出す。

「コールベルは、何も言つてなかつたけど……」

「俺から話したかったから、言わないでくれるよう頼んでおいた。サイフアさんにも許可をもらつて、今はもうコールベルのあの家で一緒に暮らしてゐる。弟のアンソニーはサイフアさんの家に引っ越したから一人きりだ」

「……そうだつたんだ」

サイラスは独り言のよつとつぶやくと、息をつき、それからこりと大きな笑顔を作つて言つ。

「良かつたね、おめでとう」

「ああ

ジョシュはほっと胸を撫で下ろした。

けれど、それがサイラスの本心かどうかはわからない。いつからそうなったのか、どうしてそうなったのかなど、何も聞いてこないのが気になっていた。本来の彼なら、無神経なくらいに根掘り葉掘り聞いてくるところだ。ただ驚いているだけだろうか。それとも？？。

「……なあ

「なに？」

「いや、何でもない」

彼自身が自ら言わないことなら、聞き出さない方がいいと思い出す。

自分はサイラスから思われているほどお人好しではない。多分、本當は以前から気付いていたのだろう。けれど、彼に対して、遠慮することも思いやることもなかつた。自分から伝えたいといつのは、せめてもの罪滅ぼしのつもりだつたのかもしれない。そんなことは、ただの自己満足に過ぎないとわかつているのだが？？。

「結婚祝いに何か贈るよ」

「そんな無理するなよ」

「……させてよ」

サイラスはぽつりと短い言葉を落とす。気のせいか、その声にはどことなく寂寥感が滲んでおり、ジョシュは何も返すことができなかつた。現実から逃避するかのように、ギイと軋み音を立てて椅子を引き、資料を机の引き出しに片付け始める。フロアにはその小さな音だけが響いていた。

「でも、ジョシュで良かつた」

沈黙を破つたのは、何かを吹つ切つたような声だった。

振り返ると、彼は普段と変わらない人当たりの良い笑みを浮かべていた。

今の自分にできることは、彼の思いを裏切らないことだけ。これからもずっとそう思つてもらえるように、ゴールベルを幸せにし、そして自分も幸せになる？？その決意をあらためて強くする。ひと

つ、また新たに責任が増えたが、それは決して嫌なものではない。ジョシュはまっすぐに彼を見つめ、そつと微かに笑みを返した。

「やあ、こりゃしゃー。まさか君の方から足を運んでくれるとは思わなかつたよ

「は……」

正面の執務机でにこやかに笑みを湛えるサイファとは対照的に、ジョシュは血の氣の引いた顔をこわばらせながら扉に張り付いていた。脚も少し震えている。

「どうした？ 遠慮せずにこっちに来たらどうだ？」「

「あ、いや……すごい眺めですね……」

何とか答えたその声は、隠しよつもなぐづわづつていた。サイファはぱちくりと瞬きをする。

「なんだ、君は高所恐怖症なのか

「こんな高いところは初めてで……」

魔導省の塔の高さは尋常ではない。これまでジョシュは高所を怖いと思ったことはなかつたが、この塔の最上階へ来て、そこから広がる光景に初めて足のすくむ恐怖を覚えた。しかも、サイファの背後は一面大きなガラス窓になつており、見たくなくとも強制的に目に入つてしまふのだ。

サイファはすつと立ち上がりて隅へ向かうと、そのガラス窓に焦茶色のカーテンを引いた。金の髪をさらりと揺らして振り返り、につこりと笑みを浮かべて尋ねる。

「これでどうかな？」

「あ、はい……」

ジョシュは大きく安堵の息をついた。先ほど日に焼き付いた光景が消えるわけではないが、視界から隠れたというだけで、ようやく少しずつ心が落ち着いていくのを感じる。そんな自分を幾分情けなく思いながらも？？。

「コールベルとのことで何か問題でもあつたのか？」

サイファは、執務机の上でゆつたりと手を組みながら、まっすぐ

にジョシュを見つめて尋ねる。

ジョシュは相談があるとしか言つていなかつたが、あえてサイファに相談となれば、コールベルに關することと推測されても不思議ではないだろう。そして、それはあながち的外れでもない。

「コールベルというより、ウチの家族の方なんですけど……」

なんと説明しようか悩んで口ごもつていると、サイファの方から尋ねてくる。

「君の家族には結婚することを伝えたんだな」

「相手が18歳つて言つたら田を丸くして、名前を言つたら卒倒しかけました」

「だろうね」

サイファは気楽に笑つているが、ジョシュとしては笑い「」とでないくらい大変だった。何も知らない深窓の令嬢を騙して自分のものにしたと誤解され、まるで女性の敵を見るような目つきで母親に責め立てられたのだ。騙してなんかいないと何度も力説したが、今でも完全には信じていないのかもしれない。

「それで、反対されたのか？」

「いえ……むしろその逆というか……」

ジョシュは苦い顔でそう言つと、小さく息をついて続ける。

「相手の『』両親に挨拶をつて意氣込んでるんです。コールベルはラグランジェ家を出るんだから、ラグランジェ家とは無関係だと説明したんですが、そういう問題じやない、大切なお嬢さんをいただくんだから挨拶するのは当然だつて言い張つて」

「まあ、真つ当な感覚だね」

サイファは呑気にそんなことを言つ。

「でも、コールベルの両親は……」

ジョシュはそう言いかけて目を伏せた。相手の両親に会わせたがらないことが、余計に母親の不信を煽つてゐるらしく、挨拶しよう

と意地になつて居るのはそのせいもあるようだ。それが出来るくらいなら、初めからしている。そして、その事情を説明しようと、どこまで言つていいのかわからない。だから、一進も二進もいかなくなつて、苦手なサイファにこうやって助言を求めて来たのだ。

サイファはちらりと腕時計に目をやると、すつと立ち上がつた。

「よし、今から行くか

「は？」

話が飛躍して、ジョシュには何のことだかわからない。しかし、サイファはもうドアを羽織りつとしていた。

「行くつて……どくへ？」

「もちろん君の実家だよ

「え？！」

ジョシュは素つ頓狂な声を上げた。

「その方が早いだらう？」

サイファは襟を直しながら事も無げに言つた。しかし、ラグランジエ本家の当主がたかが一所員の実家を尋ねるなど、普通に考えたらありえないことだ。ジョシュとしては、ありがたいというより困惑の気持ちの方が大きい。

「仕事はどうするんですか」

「これから定例会議だからちよつと良かつたよ。たいして意味のない会議だからね」

「いや、なに言つて居るんですか！ ちゃんと仕事してくださーーー！」

「いゝ加減なことを言い出したサイファに、ジョシュは思わずカツとして声を荒げる。根っからの眞面目人間であるジョシュには、とても許容できることではない。なにより自分の勤める魔導省の副長官なのだ。きちんと仕事してほしいと思つのは当然だらう。ちなみに、ジョシュは届けを出して早退してきたので、言い返されるような隙はない。

しかし、サイファは涼しい顔で背を向けると、カーテンに手を掛け一気に開いた。

赤く色づいた光が射し込む。

先ほどとは比べものにならないくらい間近で広がった、その高所の景色に、ジョシュは田を逸らすのも忘れて完全に凍りついた。もうサイファに意見するどころではない。頭の中がグラグラまわっているようで何も考えられなかつた。

「さあ、行こうか」

サイファはそう言ってにっこり微笑むと、倒れそうになるジョシュの肩に力強く手をまわした。

それから20分ほど車を走らせ、ジョシュの実家の前についた。車は魔導省が持つてゐるものらしく、車を運転してゐるのも職員らしい。完全に公私混同である。しかし、ジョシュが何を言つても彼は二口一口したまま取り合わない。たまにはいいだらうと受け流すだけである。結局、文句を言いながらも一緒に来てしまつたのであるが？？。

「そういうば、どうしてウチの実家を知つてゐるんですか」

「これでもコールベルの親代わりだからね」

つまり、結婚相手のことは徹底的に調べたということだらう。ジョシュは少しムツとして眉をひそめたが、冷静に考えれば仕方のないことだとも思う。コールベルもラグランジエ家のいとこだから、いくらラグランジエ家を出るとはいへ、問題のある相手に嫁がせるわけにはいかないはずだ。

「親に話を通して來るので、少し待つてください」

「ああ、早めに頼むよ」

サイファはニッコリ笑つて、軽く右手を上げる。

ジョシュは気が重かつた。この事態をいつたいどう説明すればいいのだろう。軽く溜息をついて玄関に足を向けようとした、そのとき？？。

「あら、やつぱり來てたの？ 声が聞こえたから、もしかしたらと思つただけど……」

玄関の扉が開き、中からエプロンをつけた母親が出てきた。

心の準備が出来ていなかつたジョシュは、あたふたしながら母親とサイファを交互に見る。が、サイファはにこやかに会釈し、紹介してもいいのに勝手に挨拶を始めた。

「初めまして、私は？？」

「ラグランジエ本家当主つ？！？」

母親は顔を見ただけですぐに誰だか認識したらしく、目を見開いて絹を裂くような声を上げると、後ずさりながらよろけて尻もちをついた。脱げたサンダルが派手に転がる。サイファは自分の足もとで止まつたそれを、にこやかな笑顔で拾い上げた。

その後、サイファを玄関前に待たせ、母親は大慌てで掃除と片付けを始めた。当然のようにジョシュも駆り出される。どうして前もつて言わないの？！ あんたのせいとんだ恥をかいだじゃないの！ と責められたが、つい數十分前に決まつたばかりのことなのでどうしようもない。元凶であるサイファの顔を思い浮かべながら、ジョシュは眉間に皺を寄せた。

「お待たせして申し訳ありません。それに、汚いところで……」

「こちらこそ、突然お邪魔をして申し訳ありません」

恥じ入るように肩をすくめる母親に、サイファは満面の笑みで受け答えする。それだけで彼女の頬は桜色に染まつた。先ほどまでの怒りはどこへ行つたのだと、ジョシュは苦々しい気持ちになる。ローテーブルに置かれたティーカップに手を伸ばし、平静を取り戻すべく紅茶を口に流し込んだ。

「今日はユールベルさんのことですか？」

「はい、彼女の親代わりとして、お話ししておきたいことがあって参りました」

親代わりという言葉を聞いて、母親は口もとに手を当て、不思議そうに目をぱちくりさせた。ジョシュはもちろん知っていたが、母

親にはまだ伝えていなかつた。親代わりがいるという話をすれば、実の両親のことも触れざるを得ないからだ。

しかし、サイファには何の躊躇も感じられなかつた。

まっすぐにジョシュの母親を見つめたまま、落ち着いた口調で、ひとつひとつわかりやすく説明を始める。コールベルの目に負つた怪我のこと、両親から虐待を受けていたこと、それゆえ両親とは会わせないようにしていること、両家の顔合わせも容赦してほしいということ？？ラグラッシュ家としては表に出したくない話もあるはずなのに、どれもジョシュが心配になるくらい正直に語つていく。

母親がどう反応するのかも心配だつたが、彼女はサイファの言うことに理解を示し、おまけにすっかりコールベルの境遇に同情したよつで、目に涙を浮かべながら「これからは私が幸せにします」などとわけのわからぬことまで言つてはいる。ジョシュは頭を抱えたが、つまりはコールベルを受け入れてくれるということであり、それに関しては言葉にしようもないくらい感謝した。

「あんなことまで言つて良かつたんですね？」

「君の母上が言いふらさなければ問題ないよ」

すつかり夜の帷が降りた空を見上げ、サイファは軽く笑いながら答える。その言葉に、ジョシュはそこはかとないプレッシャーを感じ、あとで母親に釘を刺しておかなればと冷や汗を滲ませる。サイファを敵にまわすと恐ろしいことが、今日だけで何となくわかつってきたような気がした。

車を置いた近くの空き地へ、一人は人通りの少ない細道を並んで歩く。

ジョシュの家には1時間ほど滞在していただろうか。その間、仕事でもないことで、ずっと運転手を待たせてしまつたことになる。ジョシュは申し訳なさで胃が痛くなりそつた。ジョシュのやつたことではないが、ジョシュのためであることは間違いない。サイファがここにいることも？？

「あの、今日はありがとうございました」

そう言つと、サイファは少し驚いたように振り向いた。その鮮やかな青の瞳に捉えられ、ジョシュの心臓はドクリと跳ね上がる。

「あ……でも、わざわざ家にまで来てくれなくとも……」

「私が直接説明した方が早いだろ?」

サイファはにっこりと魅惑的に微笑んで言つ。

悔しいが彼の言つとおりである。自分にはあれほどわかりやすく説明は出来ないし、たとえ同じ説明をしたとしても、おそらく母親は簡単には納得してくれなかつたに違いない。ラグラッシュ本家当主という立場だからこそ、あの話に説得力を持たせられたのだ。そのことは誰よりも彼自身がいちばんわかつてゐるはずだ。そして、その整つた美しい顔が武器になるといふことも？？。

「利用できるものは、何でも利用すればいいんだよ

「自分には、利用できるものなんて何もありませんから

ジョシュは前を向いたまま少しムッとして答える。サイファのことにやたらと腹が立つのは、彼の狡さが許せないだけでなく、多くのものを持つ彼に対する僻みもあるのだろう。そんな自分の卑しさにはどうに気が付いていた。

サイファはゆっくりと視線を流す。

「ジョシュ、どうして私がここまで来たかわかるか？

「……ユールベルのため、ですよね？」

それ以外には考えられなかつた。ただ、なぜそんなことを尋ねるのかがわからない。答えを求めるように困惑した眼差しを送ると、サイファは目を細めてくすと笑つた。

「君の場合、無自覚の方がいいのかもしれないな

「いつたい何が言いたいんですか

一向に真意が見えない苛立ちが声に滲んだ。しかし、サイファは思わずぶりに微笑むだけで、何も答えようとはしない。彼のそういう人をからかうようなところが嫌いだった。ラグラッシュの名や立場を何かにつけ利用するところも嫌いだった。自分なら何でも許さ

れると思つてそなとこにも嫌いだつた。

けれど？？。

コールベルがなぜ彼を頼りにしているのか、そのことに関しては理解できるような気がした。悔しいが、実際に自分はサイファほど彼女のことを守れていない。でも、いつかは彼に頼らなくて済むように、自分の力で彼女を守れるようにならなければ？？ジョシュは口をきゅっと引き結んだ。

横目でその様子を見ていたサイファは、ふつと表情を緩め、微かな夜風を受けながら紺色の空を仰いだ。

陽の当たる場所（最終話）

「あつ……」
ベランダに足を踏み出したコールベルは、プランターに皿を落として小さく声を上げた。如雨露を持つたまま、瞬きも忘れるほどに、じつとそのプランターを見つめる。白いネグリジェが風をはらんでふわりと揺れた。

「どうした？」

寝室から出てきたジョシュは、立ち尽くすコールベルに気付くと、半開きの窓に手を掛けて顔を覗かせた。それでもコールベルの視線はプランターから離れない。不思議そうに、ジョシュはその視線をたどる。

「あつ！」

その声には、驚きとともに喜びの色も混じっていた。おかげで、コールベルにもようやく実感が湧いてくる。

プランターには、ひとつだけ赤い花が咲いていた。
それは、ジョシュに頼んで、土作りから種蒔きまでやつてもらつたものである。最初はコールベルとアンソニーで、数週間前からはコールベルとジョシュで世話をしてきた。本当に花を咲かせるのだろうか、と不安に思いつつも、祈るような気持ちで水をやり続けた。そして？？。

「そろそろとは思つてたけど、まさか今日だなんてな

「ただの、偶然だわ……」

可愛げのない言葉を返すコールベルを、ジョシュは背後からそつと腕の中に引き入れる。

「じゃあ、すごく幸せな偶然だ

あたたかな声が耳を掠める。

コールベルは少し体温が上がるのを感じた。何か言おうとするものの、上手く言葉が出てこない。代わりに、自分を閉じ込めるその

腕に、おずおずと自分の手を重ね置く。彼の腕に柔らかく力がこもつた。

ベランダから見えるのは、まだ静かな早朝の街。
昇り始めた太陽が一人を照らす。

生まれたての赤い花は、優しくそよぐ風に小さく揺れていた。

家具や調度品の類がほとんど置かれていない、簡素な部屋。
さほど広くなく、古びているが、隅々まで清掃はされていなかった。

コーラルベルはその部屋の奥で、全身が映せるくらいの鏡と向かい合わせに座っていた。膝にのせた自分の手に、じっと目を落としている。鏡はいまだに苦手でまともに見られない。背後では、緩やかなウエーブを描いた金の髪を、ほつそりとした手がブラシで丁寧に梳かしていた。

「ごめんなさいね」

「えつ……」

戸惑いの声にも手を止めることなく、レイチャエルは言葉を繋ぐ。

「あちらのお母さまは、ドレスのことはわからないそうだから……」「コーラルベルがうつむいたまま少し視線を上げると、そこにはウーディングドレスを着た自身の姿が映っていた。自分にはふさわしくないと感じるほど、清楚で、纖細で、それでいて華やかさもある純白のドレス？？これを着せてくれたのがレイチャエルである。自分ではしたことのない化粧も施してくれた。そして、次はこの長い髪を整えようとしているようだ。彼女の手に迷いはない。ただ、鏡越しに見た表情は、気のせいかどこか寂しそうに見えた。

「別に、今はもう……」

コーラルベルはうつむき、ぽつりと言つ。

あの頃？？自分の欲してやまなかつたものを、すべて当たり前の

ように手に入れ、そして、当たり前のように享受していた彼女が許せなかつた。けれど、今は、それが自己中心的な感情だつたことを理解している。彼女に対する苦手意識は消えないものの、あのときのような激しい敵意や不快感はない。

「私は……」

じつと考え込みながら、静かに切り出す。

「今まで、世界が怖くて仕方なかつた。まわりのものすべてに怯えていた。だから、他人と関わりたくないながつたし、攻撃的になつたりもした。でも……、何があつても自分の味方でいてくれるつて、そういう信じられる人ができたおかげで、少しだけ世界が怖くなくなつたの……こんな気持ち、あなたにはわかつてもらえないでしようけど……」

「……」

「少しは、わかるわ」

レイチャエルは控えめにそう言つと、再びブラシを持つ手を動かし始める。

「私は、一生を掛けてその恩を返していく」つて決めたのもしかすると、それはアンジェリカが生まれた頃のことかもしない。漆黒の瞳を持つ「呪われた子」を生み、一族から白い目を向けられていたことを、ユールベルも何となく覚えている。そして、そんな彼女を救つたのが、サイファアということなのだろう。

「私も……ジョシュに返していけたらいんだけど……」

「その気持ちを、ずっと持ち続ければ大丈夫よ」
レイチャエルは優しい声で言つ。しかし、ユールベルは顔を曇らせた。

「自信がないの」

「えつ？」

「私には愛情を返せる自信がない」

鏡越しに、レイチャエルは蒼い瞳をぱちくりさせ、不思議そうな顔で小首を傾げた。

「ユールベルは頭の中を探りながら言葉を紡いでいく。

「いつも私のことを大切にしてくれて、とても感謝しているけれど、ジョシューを愛しているのかはわからない……愛するところ」と自体がよくわからないの……彼に愛されているかどうかさえ……」

心の隅に追いやっていた漠然とした不安。しかし、それを言葉にするにつれ、とんでもなくひどいことだと気付かれる。こんな気持ちで結婚するなど彼に失礼だろう。けれど、ここまできて今さらどうすればいいのか着地点が見つからない。考えているうちに、頭がぐらぐらして少し気持ち悪くなってきた。

「難しく考えることはないんじゃないかしら」

ユールベルの気持ちを知つてか知らずか、レイチヨルはさうりと言つ。僅かに眉を寄せて視線を上げると、鏡の向こうで、彼女は慈しむように微笑んでいた。

「おかえり、ただいま、ありがとう？？そんなささやかな思いやりと感謝の積み重ねが、愛情になつていくんだと思つわ。これから長い時間を掛けて、あなたたちふたりが、あなたたちだけの愛情の形を作つていいくの」

「そんな……こと、で……」

「そんなことだけど、とても大切なことよ」

にわかには受け入れられなかつたが、彼女の言葉を聞いていると、不思議と信じてみたい気持ちになる。実際に、ささやかな感謝といいやりが、どれほど気持ちをあたかくしてくれるのかは、ユールベルもすでに十分すぎるくらい実感している。それが愛情と呼べるものかはわからない。けれど、もしも本当にレイチヨルとサイファがそれを積み重ねてきて、その結果として今の二人があるのだとすれば？？。

ふわり、と右目の中の包帯の上に何かが被せられた。

「えつ、なに……？」

「せつかくきれいなドレスを着ているのに、ただの包帯では素つ気ないでしょ？」

そう言われて、コールベルは鏡に目を向ける。

包帯の上に巻かれていたのはレースだった。白い包帯の上に白いレースなので、田立ちはしないが、かえってそのことが上品さを醸し出している。ドレスのレースとも調和していた。

「言つなつて口止めされたんだけど……」

レイチェルはそう前置きをして、静かに続ける。

「実は、ラウルが用意したものなの」

「…………」

コールベルは田頭が熱くなるのを感じた。きのう彼に診察してもらつたが、そんなことは何も言つていなかつた。淡々と診察を終えただけである。結婚式の話題も出なかつたし、出さなかつた。まさか、気に掛けてくれていたなんて？？。

「ありがとう、って伝えて」

「ええ、必ず」

レイチェルはここやかにそつ答えると、ふんわりと軽やかなウエディングベールを手に取つた。

「あの…………」

すっかり支度を終えたジョシュは、パイプ椅子に座るサイファに目を向け、遠慮がちに切り出した。

「すみませんでした。何から何までお世話になつて……」

「君に任せていたら一年くらいかかりそうだからな」

「そこまではかかりませんよ」

少しまづとして言い返すと、サイファはあははと軽く笑う。

当初、ジョシュたちは結婚式を挙げないつもりだった。しかし、サイファは、式を挙げないのなら結婚を許可しないと言い出し、あつというまに教会から衣装まで手配してしまつたのだ。勝手なことを、ヒジョシュは腹立たしく思つたが、コールベルの花嫁姿を見たい気持ちもあり、あまり文句も言えないまま流されてしまった。コールベルも、サイファの言つことでは逆らえず、渋々ではあるが受

け入れざるを得なかつたようだ。

「ユールベルの保護者として、してやれる最後のことなんだよ」

サイファは優しく微笑んで言い添える。

ユールベルは結婚と同時にラグランジエ家を出ることになる。これからはラグランジエとは無関係の人間となり、サイファも表立て彼女を守ることはできなくなるのだ。そして、一度ラグランジエ家を出た人間が、再び戻ることは決してできない。その責任の重さに、ジョシュはあらためて身の引き締まる思いだつた。

「小さいけれど、いい教会だろ？？」

「はい」

確かに、普通に結婚式を挙げるには小さすぎるが、伝統のある教会だと聞いている。そう聞いたせいかもしれないが、他の教会よりも厳肅な雰囲気があるように感じられた。建物も長椅子も古びてはいるものの、上質のものを丁寧に使っているためか、かえつて風格と格式が増しているようだ。

「私とレイチャルも、ここで結婚式を挙げたんだよ」

「えつ？」

聞き返した声に、怪訝な色が滲んだ。ラグランジエ本家人間といえば、お披露目も兼ねて大々的にやるものだと思っていた。なのに、こんなに小さな教会で挙式なんて、いったいどうして？？。

「ちょっと、事情があつてね」

サイファはごまかすように言葉を濁したが、微妙な面持ちをしているジョシュを見て付言する。

「いつか、気が向いたら教えてあげるよ」

別に、何がなんでも聞き出したいわけではなかつた。誰にだつて、言えないことや言いたくないことくらいあるだろう。ただ、すべてが順風満帆だと思っていたサイファにも、何らかの問題があつたらしいことに、少なからぬ驚きを感じただけである。

「ジョシュ」

サイファは眞面目な顔になり、少しあらたまつて語りかける。

ジョシュは緊張して「ぐくりと唾を呞んだ。

「わかつてはいるとは思うが、これは『ゴール』ではなく通過点に過ぎないからな。昨日があつて今日がある。今日があつて明日がある？？過去を作るのも、未来を導くのも、現在の自分ということだ」

その言葉をしつかりと噛みしめ、真剣に頷く。

これから長く続していくであろうこの道を、自分自身のためにも、ゴールベルのためにも、幸せなものにしなければならない。そのためには、現在という一瞬一瞬を、大切に積み重ねていくことが必要なのだ。

「おにーさんっ」

弾んだ声とともに扉が開き、スース姿のアンソニーがにこやかに顔を覗かせた。

「姉さんの支度が終わつたつて」

待ちかねたその言葉に、ジョシュはパツと顔を輝かせる。サイズ調整のために、ゴールベルは一度試着したことがあるのだが、ジョシュはそれを見ていなかつた。新郎は結婚式の日まで新婦の花嫁姿を見てはならない、というしきたりがあるからだ。ようやく見られると思ひつと、自然と顔の筋肉が緩んでくる。

「式の最中はあまり締まりのない顔をするなよ」

「わ、わかつてますよっ！」

サイファにからかい半分で忠告され、ジョシュはあたふたと言い返す。しかし、確かに気をつけていなければ緩みっぱなしになりそうで、自分自身でも冗談抜きで少し心配になつてきた。

重厚な両開きの扉が大きく開け放たれていた。

そこから射し込む白い陽光は、中央の赤い絨毯を鮮やかに照らしている。

ジョシュとゴールベルは、その突き当たりにある祭壇の前に並んで立つていた。一人とも神聖な雰囲気に呑まれ、やや緊張ぎみの表

情を見せていい。足下にはステンドグラスの光が落ち、純白のドレスの裾を、幻想的な彩りで染め上げていた。

赤絨毯の両側に並んだ木製の長椅子には、ジョシュの関係者である彼の両親と、コールベルの関係者であるサイフア、レイチエル、アンソニーが、それぞれ左右に分かれて座っていた。サイフアたちはにこやかに見守っているが、ジョシュの両親はどちらも緊張しているようで、必要以上に姿勢を正し、ガチガチにこわばった表情で正面を見つめている。

神父は誓いの言葉を読み上げ始めた。

「ジョシュ＝パーカー、あなたはいまこの女性と結婚し、神の定めに従つて夫婦となろうとしています。あなたはその健やかなときも、病めるときも、豊かなるときも、貧しきときも、この女性を愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、そのいのちの限りとともに生きることを誓いますか」

「……誓います」

ジョシュは少し掠れた声で答えた。

神父はコールベルに視線を移し、読み上げる。

「コールベル＝アンネ＝ラグラントン＝ジョ、あなたはいま？？」

その言葉を聞きながら、コールベルは、これまでのことを走馬燈のように脳裏によみがえらせていた。自暴自棄になつていた自分が、ここまで辿り着くことができたのは、ジョシュはもちろんのこと、サイフアやラウル、ターニャ、レオナルド、ジーク、アンジェリカ、サイラス、アンソニー、その他たくさんの人たちが見捨てずにしてくれたからだらう。思い返すのも怖いくらい迷惑も掛けた。だからといって、ここで身を引いたところで何にもならない。感謝と謝罪の気持ちを胸に、怖がらず……いや、怖がりつつも、前を向いて進んでいこうと決めたのだから。

「？？ことを誓いますか？」

「誓います」

神父の言葉が終わると、コールベルは凜とした声で答えた。

「結婚の誓約の印に、指輪の交換をいたします」

神父が一人の結婚指輪を取り出した。シンプルなプラチナ製の指輪である。教会も衣装もサイファに決められてしまつたが、これだけはジョシュとコールベルの一人で選んだものだ。指輪のことなどよくわからなかつたが、飽きのこないものにしたいという思いは一致していたので、それほど迷うことなく選ぶことができた。

神父の導きに従い、指輪の交換を始める。

だが、二人とも指輪など初めてで、手つきはぎこちなく、なかなか上手いかなかつた。サイファとレイチエルは顔を見合わせてくすつと笑い合い、アンソニーはからかうようにニヤニヤとしているが、ジョシュの両親は心配のためか顔から血の気が引いている。ようやく嵌め終わると、彼らは本人たち以上に大きく安堵の息をついた。

神父も少しほつとした様子で、次の段取りに移る。

「それでは、誓いの口づけを？？」

コールベルは少し顔を上げ、ジョシュを見つめてから目を閉じた。身を屈めた彼から、触れるだけの優しい口づけが落とされる。

唇に残る、あたたかい感触？？。

コールベルは、ゆつくりと睫毛を震わせながら目を開く。

そして、再び視線を合わせると、互いに幸せそうに微笑み合つた。

「おめでとう、コールベルっ！」

「どうして……？」

コールベルたちが教会の外に出ると、ターニャとレオナルドがひよっこり姿を現した。ターニャに結婚するという報告はしたが、家族のみの式だからと、場所や時間までは教えなかつたはずだ。もしかして、と背後のアンソニーを振り返ると、彼は悪戯っぽく一ヶ臼い歯を見せた。コールベルは呆れたように溜息をつく。

「来ないでつて言ったのに……」

「あら、たまたま通りがかつただけよ、ね？」

「ま、そんなどころだ」

ターニャとレオナルドは、二口二口しながら、示し合わせたようにとぼけた言い訳をする。その悪びれない態度と、どこか幸せそうな雰囲気に、ゴールベルはすっかり毒氣を抜かれた。

「式も見てたの？」

「ええ、こつそりと」

ターニャはそう言つと、夢見がちに手を輝かせて両手を組み合わせる。

「ゴールベルすつじくきれいだし、雰囲気も神聖で厳肅で、それでいてあたたかくて……ひいき目なしに素敵な式だつたわ！ こういう小さな教会での結婚式つて憧れちゃうつ」

「残念だが、そつはいかないぜ」

レオナルドはニヤリと口の端を上げた。

「ラグランジエ家がこんな貧相な結婚式なんて挙げられるか。思いつきり威儀を見せつけるために、これでもかつてくらい豪華で盛大な式にするんだからな」

言いたい放題な彼に、ターニャはじとじと冷ややかな視線を流す。

「私、あなたと結婚するとは言つてないわよ」

「え？ ちよつ、誰だ？ 他に誰かいるのかつ？」

わたわたするレオナルドに、彼女はツンと背を向ける。しかし、ゴールベルには密かにペロッと舌を出して見せた。この一人が付き合つようになつてから、一緒にいるところを見たのは初めてだが、思いのほか波長が合つようく感じられた。それは、一人をよく知るゴールベルにとつても嬉しいことだ。少し考えた後、持つていたブリケをそつとターニャに差し出す。

「えつ？」

「もらつて」

それでもターニャは困惑つていた。口元に僅かな喜びを覗かせつつ、瞳は困惑したように揺らいでいる。

「……いーの？」

「もうつてほしいの、あなたに」

「ゴールベルは少しも田をそらすことなく言つ。ターニャは恥ずかしそうにはにかんで頷くと、差し出されたブーケをそろりと受け取つた。ありがとう、と小さな声で感謝を述べながら、無垢な白い花に田を落とし、頬をほんのりと赤く染める。

「よし！ さつそく結婚式場を決めに行くぜ！」

「ちよつ、なにバカなこと言つて……きやつ……」

余韻に浸る間もなく、ターニャはレオナルドに無理やり手を引かれ、よろけてこけそうになりながら走り出す。それでもブーケはしつかりと手に持つたまま、それを高々と掲げ、満面の笑みを浮かべて「じゃあ、またね！」と声を張り上げた。

その様子を、ジョシュはポカンと眺めていた。

「慌ただしい奴らだな」

「ええ」

ゴールベルは、ターニャたちの消えていった方を見つめながら田を細める。

「二人には幸せになつてほしい

「二人にも、だろ？」

ジョシュはゴールベルの肩にポンと手を置いて言つ。

一瞬、ゴールベルはその意味がわからず、きょとんとしてジョシユに振り向いたが、彼の表情を見て言いたいことを理解した。胸にあたたかいものを感じながら、こくじと頷いてみせる。

やにわに、少し強めの風が吹いた。

長い髪とウエディングベールが軽やかに舞い上げられる。

ゴールベルは、その風の行き先を追つて顔を上げた。

優しい陽だまりの上には、優しい空色が広がつていた。

今まで私を生かしてくれてありがとう。

これからは、私自身の意志で生きていく??。

ユールベルは空を仰ぎ見たまま、隣のジョシュの手を握った。彼は少しばかり驚いていたが、すぐに優しく握り返した。そして、ゆっくりと顔を見合わせ、柔らかく穏やかに微笑み合つた。

まるで、二人を包み込むこの陽だまりのようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5156q/>

明日に咲く花

2011年12月25日13時46分発行